

# アンデス文明(遺跡)・文化(宗教)と、 16世紀新大陸へ上陸したスペインの植民地政策考



アメリカ大陸最古の都市と呼ばれるカルル遺跡  
ピラミッドは紀元前 2600 年以前年代測定  
(ラテンアメリカ博物館より)



自身の首を切る象形鏡形土器  
クビスニケ文化前 1200～前 800 年  
(古代アンデス文明展・名古屋市博物館より)



イスパニョーラ島に上陸するコロンブス



インディオを攻撃するバルボアの犬



VIVA EL PERU ペルーを生きる

クスコ05・3・6 撮る

2022年5月

端午の節句

池田 勝宣

**はじめに**・・・小生がインカ文明・文化に関心を抱いたのは35余年の前に遡り、その頃小生は現役の建築石材・造園石材業を営んでいた。日本の石工の親方さんに色々と教えてもらいましたが、高度の石組工法等を知りたくて、世界の石造物や城塞の写真を見ている頃に、丁度「インカ文明・文化展」が東京を始め三大都市圏で開催されていた。展示されている展示物は、学問知識を得るには納得できるが、小生の知りたかった事は、石積みの職業技術の「インカの石積み工法」を見て学びたかった。

1988年正月休みに、初の海外旅行であるが、個人旅行でカミさんと2人で出掛けた。現地へ到着して知ったことは、ペルーに日本人移民の方々が約8万余人居ることを知りました。ペルーと日本の両国は明治時代から移民での親しい関係であったのである。日本移民者の代表者と云うべき天野芳太郎氏が開設した、「ペルーの天野博物館」を見学した時、天野芳太郎氏(故)の美代子夫人のお出迎えを受け、夫人からのお話で、「天野は生前から、ペルーの大切な文化遺産で利益をあげたくない。入館料はいただきません」との話をされました。日本から見て地球の裏側、ペルーの首都リマで「アンデス文明博物館」を自ら開設して無料で入館下さい、との話には驚きました。

その話を胸に秘め続け、2年前に電子書籍、『中南米で事業を興して成功し、ペルー・リマに天野博物館を開設した男』の題名で掲載した。秋田県出自の氏の「ペルー天野博物」を開設するまでの物語の紹介は、美代子夫人のお話に感動したからです。

今回のアンデス文明・文化の編集では、「アンデス文明」に於ける神殿の遺跡、聖地の遺跡、農耕の段々畑等を考察し、「アンデス文明」では神々の姿像、陶器の絵柄、金銀の加工品、織物・染物の魅力を紹介します。又、その延長で、16世紀の大航海時代のコロンブス大西洋航海の経緯や、スペイン人のアンデスへの植民地政策や、キリスト教布教とインディアスの大地占有の諸事情を考察して行きます。

又、大航海時代の競争国ポルトガル人たちは、アフリカ大陸最南端喜望峰を廻り込み、東南アジアへキリスト教布教と新天地拠点の確保にやって来ていた。やがて、ポルトガル人と九州種子島で「日本国との出逢」は、「日本鉄砲伝来」となり、日本は戦国の世、その諸々の16世紀～17世紀期の日本とキリスト教布教と貿易にまつわる話、スペイン人による日本征服の企ての話、日本国への秘めた外交交渉の裏話等を紹介し、それらを「アンデス文明・文化物語」として纏めてみました。

『アンデス文明(遺跡)・文化(宗教)と、

16世紀新大陸へ上陸したスペインの植民地政策考』

・・・ 目次 ・・・

はじめに	P 1
目次	P 2
第1章 アンデス文明の遺跡と文化	P 3—P 34
第2章 インカ帝国初代皇帝から13代皇帝を追う	P 35—P 60
第3章 インカ帝国の残影・城砦・ワカ(聖地)を視る	P 61—P 66
第4章 インカ帝国滅亡後のインディオ民の抵抗	P 67—P 81
第5章 新大陸での植民地政策の諸問題	P 82—P 101
終章 コロンブスの新大陸発見と世界への影響	P 102—P 125
終わりにかえて・・・	P 126—134

## 第1章 アンデス文明の遺跡と文化

序・・・南米大陸で人類が住み始めた痕跡を示す最古のものでは、1万4千年前の年代測定値を示す遺跡がある。確実なのは「クローヴィス文化」(1万3千～8千5百年前のマンモスの骨と同時に<sup>せんとうき</sup>尖頭器の石器文化が現れる)魚尾型尖頭器(先端が尖った石器)を用いた狩人生活の遺跡である。又、チリのサンディエゴ南120kmに「マストドン」(原始的なゾウ類の仲間、約4千万年～1万1千年前まで生存確認)を解体した遺跡が残り、紀元前7500年まで使用していた<sup>いわかげどうくつ</sup>岩陰洞窟(張り出の岩盤を利用した先史人類の痕跡の遺跡)を住家にした人種が現れ、ペルーの「トケバラ洞穴」(トケバラ銅鉦山の南東13km、洞穴の奥行10m×5m)には狩猟の様々な壁画を見る事が出来る。アンデス文明とは、インカ帝国以前のペルーを中心とした南米大陸の文明・文化をいう。

その最大の文明の特徴は、“初めに神殿ありき”の文明・文化であった事である。神殿の建設は民族集合の中心の場となっており、祭祀を核に農耕の発展と、土器製作に影響を与えた文明で有る事を知る。

新大陸に於けるトウモロコシ農耕が始まるのは、正確な年代は明らかではないが、メソアメリカ(メキシコ、グワテマラ、エル・サルバドル、ホンジュラス、ニカラグア、コスタリカ等、紀元前2000年の定住村落が



トケバラの壁画ウィキペディアより

形成考古学上の文明地域)でのメキシコ、オアハカ盆地(オアハカ州)の「ギラ・ナキツ洞窟」(加速器質量分析法で紀元前8000年頃の数値)で発掘された5600年以前のトウモロコシ実が出土して証明されている。トウモロコシの栽培は約6000余年の歴史を経て、テオシンテ(和名:豚モロコシ、9000年前)の農耕栽培化が起源となっている。

メソアメリカのトウモロコシには、主食説(食料)と酒造り説があるが、トウモロコシは糖分を含み祭礼儀礼に用いられる発酵酒の「チチャ」(口嚙み酒・2週間程度で<sup>くちか</sup>醗酵)の材料とされた説があり、おそらく両方説であると思われる。

1492年、クリストファー・コロンブスがアメリカ大陸発見時に、カブリ諸島から原住民が栽培していた「トウモロコシ」の種をヨーロッパ持ち帰り、これ以後、旧大陸(ユーラシア大陸)の国々に伝わり、現在では世界の生産量は10億トン以上生産されてい

るといふ。トウモロコシの外に新大陸では、旧大陸にない栽培作物が存在し、サツマイモ、落花生、南瓜(カボチャ)、数種の豆類、トマト、唐辛子、キノア(アカザ一種のキビ・粟・稗等穀物)、タバコ、ジャガイモ(塊茎類)が旧大陸へと運ばれた。更に、木綿(もめん)、キャベツ等が新農作物として旧大陸の世界各国へ広まったのである。

メソアメリカの農業耕作は、農具に使用されたのは掘棒、踏み鋤や鍬の程度で、旧大陸のように、牛馬を使用での犁類は知られていない。一方、灌漑農業の用水に関する配水工事は精巧を極めていふ。家畜類は貧弱のヤーマ(馱載用に使用・耕作用には不可)、アルパカ、ワナコ等のラクダ科の動物や、七面鳥、鷺鳥、アジア系統の犬をも飼育されていた。紡織(布織)、染色の技術は旧大陸に比べ、技量と質は変わらないが、土器製作は、轆轤や釉薬は使用していない。金属類は金、銀、銅、青銅器精巧技術を作り上げていたが、「鉄」の文化はなく、ガラス、車、弦楽器、アーチ、円天井(まるい天井、丸屋根)は遂に発明されなかつた。そして、「文字」も発明されなかつた。



- 左・9月トウモロコシ作付け(踏み鋤)・共同作業で歌を謡い、太陽は笑い、月も覗いている
- 中・畑番の鳥追い・動物の皮を被り右手に投石器を振り回し、左手に棒と鳥を持つのは子供と女の仕事
- 右・雨乞い・巫女と僧侶が祭祀する祭り。10～11月雨が降った後に種芋を土におろす

出典・『アンデスの記録者ワマン・ボマ』 染田秀藤／友枝啓泰著。『インカ帝国』 泉 精一著より。

南アメリカのインディオ達は、2万年前頃(3～7万年説有り)、ユーラシア大陸からシベリアへ、ベーリング海峡を渡り、アメリカ大陸に渡ったアジア系の人種で、古モンゴロイドの末裔とされ、推定人口は1550万人、メキシコに450万人、アンデス地帯に510万人が居住していた。メキシコ文明とアンデス文明の2つの繁栄地に、960万の人口が集中し、他の広大な地帯に拡散した人口数となっていたのである。

旧大陸の4大文明のように、大河沿いに繁栄した文明と異なり、南アメリカのアンデス山脈の山間部や、盆地や乾燥した海岸地帯にアンデス文明は誕生したのである。

旧大陸のように戦争に次ぐ戦争を繰り返して発展してきた、ヨーロッパ文化と異なり、アンデス文明では争いが少なく、せいぜい棍棒類、石の投石器類(ボーラ)位の軍事に関する武器が有っただけである。(2章「インカ帝国」・P55・投石器写真参照)

16世紀初、アンデス文明の軍事力の貧弱な原住民の弱点突いて、ヨーロッパの文明科学力を駆使し、馬と武器を持った冒険者達が続々とやって来たのである。それはスペイン人の新大陸の発見は、金・銀・財宝の掠奪<sup>りやくだつ</sup>が大目標であり、西インド諸島のインディオの村々へ侵攻し、中南米の国々へインディオ達の金銀を掠めるための軍事行動であった。その侵攻により、金・銀・財宝・香料等をスペイン人に奪い去られ、瞬く間に原住民達の生活を破壊し、その結果、アンデス文明の終焉に至らしめたのである。スペインの征服者達は、インディオから奪った金銀を溶かし、延べ棒にして本国に送り教会建築等の宝飾に使われ、更に、金銀は王室や教会の宝飾に使用され、今日でもその一部がイベリヤ半島の寺院等に残されているという。

しかし、征服者たちがヨーロッパへ持ち込んだ金銀財宝は、一般国民の幸福に結び付かなかった。旧大陸の人々に大恩恵を与えたものは、農作栽培植物の種子と苗は、世界の人々に大きな幸せを齎して、種子や苗の農作栽培植物は瞬く間にヨーロッパや<sup>またた</sup>アフリカの大地へ拡散し、やがてアジア・日本へも齎されたのである。

コロンブスが現地人インディオ(カリブ諸島)から持ち帰ったトウモロコシは、旧大陸の痩せた土地や乾燥大地に適応し、旧大陸の人々の専有農作物栽培植物となったのである。しかし、我々はインディオから掠奪した「栽培種」である事を、長い間知らなかったのである。(文献は『インカ帝国』『砂漠と高山の文明』 泉 精一著より参考)

### 新旧両大陸の栽培植物を拝見

	旧大陸の栽培植物	新大陸から持ち込まれた栽培植物
野菜類	キャベツ、ちさ、ほうれん草、 たがらし、えんどう	キャベツの一種、チャヨッテ(はやと瓜)
根菜類	にんじん、大根	ジャガイモ(240種)、タピオカ芋(2種) さつまいも、ヤム芋、オカ芋、オユコ(芋)、

果実類	りんご、なし、あんず、 さくらんぼ、ぶどう	チリモーヤ(柿類似)、パパイヤ、アボカド、 トマト、チョコレート、パイナップル、イ チゴ、サワーソップ、きゅうり、ラプスペ リー、ブラックベリー(木苺の一種)
種子及び油種 子	くるみ、亜麻の実、けしの実、 カメリヤの実、オリーブ	カジュー、ブラジル・ナッツ、落花生、は しばみ、ヒッコリー(くるみ科)、栗
荳科類(まめ か)	えんどう、レンティル(レン ズ豆)、小豆、そら豆	カニワ(雑豆)、タルウィ(雑豆)、モーエ、 豆類(空豆、小豆をのぞく)
穀類	小麦、大麦、ライ麦、裸麦、 ひえ、米、雑穀類	トウモロコシ、キノア(雑穀)
香料	からし、さとうきび	チリーとうがらし、サトウキビ
瓢(ひさご)	ひさご・ひょうたん	ヒサゴ(多数の変種)
繊維植物	木綿、あさ、大麻、	モメン、リュウゼツラン(208種)
染料植物	あかね(草木染)、インディゴ (藍)、サフラン	えんじ(濃い紅色)、アチオッテ、ヘニパ、 その他多数



左・トウモロコシの多様品種(アンデスのトウモロコシより) 右・ラス・アルダス、アンデス最古の農耕文化の遺跡。ペルー西海岸ビルー河谷かこくにトウモロコシが出土し、放射性炭素  $1150 \pm 200$  と推定、古代アンデス人は多種のトウモロコシを生み出している。(右写真野村哲也が贈る“地球の息吹”より)

アンデス文明(遺跡)・文化(宗教)の歴史を辿る・・・南アメリカのペルー西海岸に沿って、南北 5600 km(コロンビア、ベネズエラ、エクアドル、ペルー、ボリビア、チリ、ア

ルゼンチンの7カ国またがる全長 8000 kmとなる)に及ぶアンデス山脈が走る。この山脈は複雑で、稀に見る景観を呈し、太平洋沿岸は砂漠となり雨が降らない地域となっている。砂漠地帯には氷河を頂くアンデスの山々から、40数本の川が太平洋側に流れ、細い環状のオアシスを形成している。アンデス山脈は海拔 4000m～6000m級の山脈には氷河が<sup>そびえ</sup>、広い高原が開け、そして人口の密度が高い。アンデスの古代人達は、雪解けの水を川や湖水から農作の<sup>かんがい</sup>灌漑用水として利用し、アンデス文明は紀元前 2500 年頃から形成期(土器・農耕産物栽培と神殿が建造)となっている。

「プレ・インカ」とは・・・インカ帝国がスペイン人に征服される以前の時代まで、存続していたアンデス文明・文化を「プレ・インカ」と総称している。アンデスの高地・平地地帯に人類が住み始めるのは、凡そ2万年前と推定されている。

古モンゴロイド系種族が、旧大陸から徒歩でアラスカへ渡り(現在の海面より 100m 低い)、南北アメリカ各地に拡散して、やがて南米大陸へ渡りアンデス文明を興したのである。アンデス文明は旧大陸の河川から興った4大文明と異なり、3～4 km級の山岳地帯や、太平洋海岸地帯へと広がって生まれた文明となっているのである。

そして、南北 4000 kmに及ぶアンデスの高原地帯に、文明(神殿遺跡等)・文化(宗教・神々の自然形態)の栄華を誇っていたのである。

その大地より紀元前 8000 年の層から、インゲン豆の二種、根菜類のオカ(カタバミ属の多年草。ジャガイモに次ぐ芋類)、トウガラシ、ルクマ(果実)の栽培種の実が出土している。紀元前 4000 年頃はジャガイモ、トウモロコシ、ココ等の実が出土し、海岸地方(太平洋側)では、ヒョウタン、インゲンマメ、カボチャ類が栽培され始めていた。

アンデス山脈の雪解け水の灌漑用水路は前 2000 年頃には既に完成していて、ワヌコ地方(ペルー中部ワヌコ郡)の谷間には、リヤマ、アルパカの家畜飼育が始まる。

アンデスの古代神殿の発掘調査には日本の調査隊が目覚ましい活躍して、カラル遺跡の紀元前 3000 年前の遺跡(ペルーのルトウ・シャディ発掘)に続く、紀元前 2000～1500 年頃のワヌコ地方から「コトシュ遺跡」を発掘し、

形成期に於ける土器以前の時代に、神殿が存在したアンデス文明を証明したのである。

※アメリカ大陸に進出した人種の中古モンゴロイド系は、ベーリング海峡を徒歩で北アメリカ



オカの塊茎芋・Wikipedia より



大陸に渡っている。氷河期には海面が現在より 100～120m 低く、海峡を徒歩で渡ることが出来た。拙書『縄文人の「あの世」と「この世」』P3～P6 参照)。

古代アンデス文明(紀元前 2500～西暦紀元前後)の形成期・・・形成期とはメソアメリカ文明及びアンデス文明の考古学編年上での時代編年区分名、土器使用開始時期にトウモロコシ、豆、カボチャ等の栽培を行い、定住村落に神殿が建造文明となる。

【古期・形成期】・・・先土器期は、無土器時代・～紀元前 2100 年。草創期は、神殿造りは前 2100～前 1200 年。先土器期は、前 2500 年～前 1800 年となり、無土器農耕文化が始まりはヒョウタン、豆類、カボチャ、トウガラシ等の栽培が行われ、海岸沿いからは海産物を採取、定住生活が確立していた。紀元前 2500 年頃には、綿、綿糸や綿布の製作が始まり、この時代の同じ頃、ペルー中部海岸地帯に「カラル遺跡」(前 3000～前 2000 年)が見られ、中部山岳地帯に「コトシュ遺跡」(同時期・前 2000 年頃～前 200 年)と、両遺跡に神殿建築が見られる。

【中期】・・・紀元前 1200 年頃～前 500 年頃、トウモロコシ、マニオク、ラッカセイの栽培が始まる。この中期には「チャビン・デ・ワントル遺跡」(前 1200 年頃～前 200 年頃)で大神殿の建造し、チャビン文化が栄える。カラル、コトシュの遺跡が発掘される以前は、チャビン・デ・ワントルが一番の古代の文明とされた。現在初期のアンデス文明遺跡を各地で発掘、その調査報告は無土器以前の神殿文化が解明されつつある。

【古典期・後古典期】・・・西暦紀元前後～後 900 年、ジャガイモ、サツマイモ、ココアの栽培、アルパカの飼育等高い生産力の持つ社会が成立している。大建築を伴う宗教的センターが築かれ、文化については「クントウル・ワシ文化」(前 1000～200 年)、「モチェ文化」「ナスカ文化」(前 200～後 500～800 年)、「ティアワナコ文化」(前 300～後 1200 年)と続く。後古典期は後 700～1533 年頃、北海岸ではモチェ文化をひく「チムー文化」(チムー王国・後 850～1470 年)、南海岸では「ワリ文化」(ワリ王国・後 650～1000 年)、高地では、「パチャカマ文化」(後 800～1500 年)、「シカン文化」(後 750～1350 年)、「チャンカイ文化」「イカ・チンチャ文化」(1300～1500 年)と続く。

このチャンカイ・イカ・チンチャの文明・文化を「天野芳太郎博物館」(ペルーリマ)

で展示している。やがて 1200 年頃より、高地・海岸地帯の諸民族の中からインカ族が強大となり、ペルーのアンデス全土と、コロンビア～チリに跨る「大インカ大帝国」を打ち立てたのである。しかしながら、インカ帝国は、1532 年にスペイン人、F・ピサロ等に征服されてアンデス文明は歴史から消えたのである。

### アンデス文明の曙「カラル遺跡」・（紀元前 3 0 0 0 年頃～前 2 0 0 0 年頃）

ペルーの首都リマの北東約 2 0 0 km、リマ県バランカ郡のスーペ谷に「カラル遺跡」(1948 年発見)がある。アンデス文明の中で、カラル文化及びノルテ・チコ文化とも呼ばれる遺跡となる。発見された神殿には、「コトシュ遺跡」を中心とする、コトシュ宗教伝統に属するものもあるが、規模の面ではコトシュ遺跡より大きい。大神殿はスーペ谷には 8 0 k m<sup>2</sup>の範囲に、9 基の神殿が散在し、神殿遺跡全体では 2 万人が収容できる規模の大神殿となっている。又、現地で発見されたイグサ製のシクラ(運搬袋)が放射性炭素年代測定で、紀元前 2627 年の数字が出た。「シクラ」とは石材やガレ石を入れて運搬して、土嚢袋<sup>どのう</sup>として神殿の盛り土に使われ、2009 年世界遺産に登録された。

カラルはスーペ川流域に発展し、河口から約 3 0 km に位置し、その地域にアボカド、インゲン豆、カボチャ、サツマイモ、トウガラシ、トウモロコシ種が発見されている。



左・カラル・ピラミッド神殿(ペルーユネスコ世界遺産より) 右・大地神を祀る神殿・「(株)世界旅行」より



食糧倉庫址 shozza trip より

カラル遺跡の上空写真 peru 360・新大陸最古の遺跡より

カラルはスペ川流域に発達し、河口から25～30kmに位置し、1994年にペルーの国立サン・マルコス大学が更なる発掘を行い、砂漠地帯から神殿建造物群、円形劇場等の紀元前2500年前後の遺跡を発見した。都市建造物群は、80<sup>3</sup>km<sup>2</sup>の広さを持ち、広場や住居群を備え、食糧生産には不十分な地域であるが、神殿は19基、前2000年代のアンデス地方では最大級の神殿であり、更なる発掘と解明に期待したい。

#### 4800年前の石造神殿「ラス・シクラス遺跡」(紀元前2800～前2100年)

新聞見出し“「米大陸最古級の遺構か」日本人の専門家らペルーで発見”、2006年6月20日、朝日新聞が発表して記事の内容は下記の通りとなる。

«「南米ペルー中部の遺跡群を調査していた日本の専門家グループが、約4800年前の神殿とみられる石造建築の遺構を見つけた。同国最古の都市遺構カラル遺跡(紀元前約2600年)と同時期、それを遡る米大陸最古級の建築遺構の可能性が出て来た。謎の多い中南米の古代文明の起源を解明する手掛かりになるとみられ、19日から本格的な調査が始まった。この遺構は首都リマの北約100kmにある「チャンカイの谷」の一角にあり、「シクラス遺跡」で、アンデス山脈から太平洋に流れ込む川の河岸にある。現場は、高さ10mほどの建造物と見られる小山が二つ並び、内部の断面を調べたところ、アシ(葦)袋状に編んである袋に、小石を詰めた古代の建築補強材「シクラ」や、木炭片、繊維片などが発見され、複雑な工法を使い、儀式で使われたと見られる火の跡が残り、何度も建設が繰り返されていると見られる点などから、神殿は宗教的な施設の可能性が高いと専門家はみている。遺物の6点を日本に持ち帰って放射性炭素の年代測定で調べた結果、シクラ、木炭片の何れでも最大で4800年を越す計測値が出た。全体では約4800～4100年前(紀元前2800～前2100年)と確認され、ピラミット型の石造神殿の様な建築物は、同所で7～8回建て変えられていた痕跡が見つかった。»



左ラス・シクラス遺跡(ペルー倶楽部より) 中5千年前の「シクラ」(葦類で編んだ籠)(ブログ断捨離より)

右「シクラ」(「ペルー中部チャンカイ谷の地形と地質、ラス・シクラス遺跡調査団2007年調査概要報告」より)

「シクラ」・・・専門家を特に驚かせたのは、プレ・インカ遺跡の多くがアドベ(日干しレンガ)や砂で造られているのに対し、この埋没遺跡はシクラを積んで造られていた。

「シクラ」は草の繊維を結った網袋に石を詰めたもので、川の護岸に使われる布団籠(土留め)に似ている。シクラに詰め込まれた石は互いに隙間を保つため、シクラ積みの建築物は一種の柔構造となり耐震性に優れていると考えられる。

### 「コトシュ遺跡」(紀元前2000年～前200年・カラルの時期と重なる)

ペルー中部山岳地帯、リマの北東400km、古代建造物遺構群となり、ケチュア語で「石の小山」を意味する遺跡となる。遺跡の直径100m×高さ14m、十数地層に渡る神殿7基の文化歴史期が認められる。この遺跡で最も重要な事は、地層の最下層に、無土器時代の以前の神殿の遺構が発見された事である。神殿部の階段で結ばれるテラスが独立して建てられ、「交差した手」のレリーフが出土した。1958年以来、東京大学が進めて来たアンデス地帯学術調査団の調査研究によって齎された、4万点に及ぶ考古遺物が出土している。東京大学の第1期東京アンデス地帯学術調査団団長、石田英一郎教授、泉靖一郎教授の面々となっている。



左・コトシュ遺跡の発掘 1963年・東京大学アンデス調査団(『古代アンデス神殿から始まる文明』大貫/加藤/関)

右・ペルー中部ワヌコ西方古代建造物遺構群。ケチュア語で「石の小山」の意となる。

交差した手の神殿・「交差した手の神殿」の入口から向かって左にレリーフが1960年に出土し、その後、崩落して消失した。このレリーフに込められた意味は定かではないが、同時代のセロ・セチン遺跡(紀元前1600年頃)の彫刻にも「交差した手」



コトシュ遺跡・左男の手H376mm・右女の手320mm

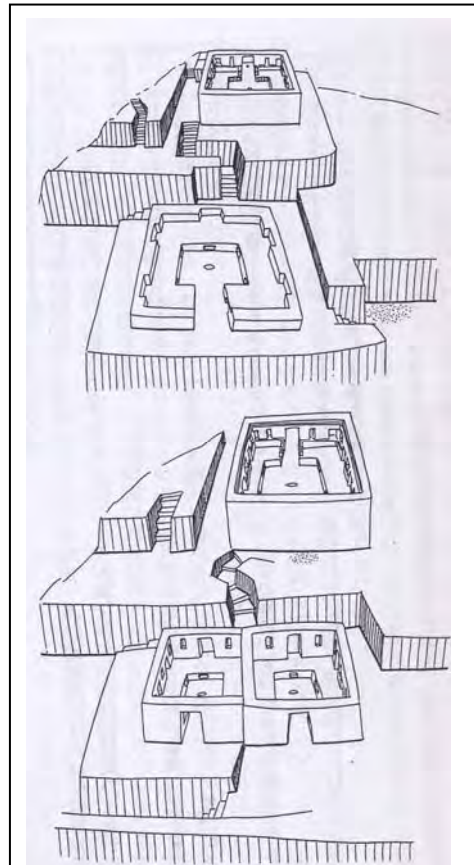
が見られ、しかも上腕部で切断されている事から、人身供養のテーマに関係があると考えられている。これ等神殿の周りからの土器は不出土で、発見された当初から大きく報道され、知名度のある「交差した手」のレリーフとなっている。(アンデス調査団『古代アンデス 神殿から始まる』大貫良夫/加藤泰建/関 雄二編・朝日新聞主版より)

「はじめに神殿ありき」から始まる文明・・・文明とは何か、一般的に時代とは徐々に発達し、食料の生産が余剰を産み、やがて分業から専門職への時代進歩があり、社会の統合の為に階級制度や国家や王が出現して、壮大な記念碑的な公共建造物を造るに至るといふ歴史の道筋が当然の様に受け入れられて来た。しかし、コトシュ遺跡やその他のワヌコ盆地での調査は、大量の余剰を生み出せる様な食料生産が見られない前に、石造神殿を造っていたという事実を、考古学や人類学へ突きつけた事になる。

「はじめに神殿ありき」とは、1960年に「交差した手の神殿」の一部が発見された時、泉 精一先生が発したフレーズである。神殿があればこそ人が集まり、物資や情報が交換され、社会も技術も文化の諸側面が発展して行くというフレーズである。

しかし、神殿がどうしてそういう発展をひき興す事が出来るのか、もう少し詳しい検討が必要であると思われる。右の絵の説明、上の「ニチットスの神殿」の下から「交差した手の神殿」が現れ、神殿埋葬という慣行があったのではないかと云う見方も表明されている。

手のレリーフは砂で覆われ、しかる後に神殿全体が、石と土で埋められていた事もその考え方を支持するよう見えた。しかし埋葬とは、神殿が死を迎えたので地下に埋めるという考え方、あるいは信仰があったという事なのだろうか。



※上の絵「交差した手の神殿」の上に載り「ニチットスの神殿」が上になる。※下の絵「交差した手の神殿」はニチットス神殿の下にある。即ち上の神殿の下に、更に古い神殿が出土。※ニチットス神殿は土器を使っていた時代を指す。『古代アンデス神殿から始まる文明』第1章・先土器時代の神殿を発見・大貫良夫より

又、死を迎えた神殿を埋葬すると、どうしても社会が複雑化する方向へ動いて行くのであろうか。これ等の議論は更なる検討が必要と認識され、更に文明起源の追求のためコトシュ以後の研究方向が模索される。この神殿研究の形成期後期について下記「形成期後期の大神殿」加藤泰建著より参照。（『古代アンデス神殿から始まる文明』2章）

### 形成期後期神殿の研究(神殿建築が紀元前 2500～2000 年)・神殿埋葬=神殿再生

日本のアンデス文明の研究は、形成期(土器と農産物の栽培・定住集落が始る)を中心に研究されてきた。この主題を持って、いくつもの遺跡の発掘と遺物の分析を行い、その都度、何がしの仮説を立てて研究と調査に挑み、形成期の研究は進展をみてきた。

コトシュを選んで発掘を開始したのは、アンデス文明がどのようにして始まったのか、と云う事を研究するためであった。紀元前 2000 年頃は、農業も未発達であろうし、土器も織物もなく、銅も青銅も無い時代、そこからアンデス文明の第一歩が始まる。問題は神殿が、どの様にして文明の発展へと社会が動き始めるという点である。また神殿が文化の重要と見られた時、「神殿埋葬」という習慣があったとも考えられる。

しかし、神殿を埋める事が、どうして文明へと社会を向かわせることになるのか。この点は説明不足であった。つまり、神殿の存在がどうして埋める行為が、どの様にして社会を複雑化していったかという疑問である。

1980 年に入って「ワカロマ遺跡」(ペルー・カハマルカ市、紀元前 1500 年頃形成期)を発掘して、後期ワカロマの神殿基壇では 3 回も造り変えられ、その度に外側へ外側へと基壇の広がりを増すという事実が分かってきた時、神殿の意義に関して別の仮説が生まれたのである。それが「神殿再新」である。

神殿はどの様な理由か不明ながら、意図的に放棄され、その上にかぶせるようにして同じ神殿を築いている。古い神殿から見れば「埋葬」かも知れないが、新たに築く神殿からすれば「再新」であり、「再生」である訳で、そこには新しい神殿を築く、或いは再生させるために、古いものを捨てて埋め尽くすという、考え方があったように思われる。再新の神殿建築計画には、労働力、食糧などのいろいろの準備が必要であると考える。再新の正当化のために、儀礼が更に複雑化になり、更に世代を超えて繰り返して行くうちに、規模が大きくなって行っていったのではなかろうか。

先土時代(土器以前時代)の大神殿を考察すれば、チャビン・デ・ワントル(ペルー中部ワリ郡)に先立つ先土器時代の紀元前 2000 年頃の神殿の発見例が増えてきている。

その代表がスーペ谷にある「カラル」、チャンカイ谷の「ラス・シクラス」等の先土器時代の神殿・公共建造物が発見されることにより、古期(前 4000～前 1800 年)と形成期(前 3000～前 50 年・土器の開始、トウモロコシ等の栽培)の論点が次々と出て来た。

「コトシュ」はアンデスにおける先土器時代の神殿の発見の契機となり、その結果、予想を超えた大規模な建造物の発見、その生成の過程において、神殿の更新という活動がどのような役割を演じたのか、更なる分析と議論が必要になってきたのである。

### 「セロ・セチン遺跡」紀元前 2000 年頃神殿建設～前 1500 年頃まで使われていた

「セロ・セチン神殿遺跡」はペルー北部アンカシュ県のカスマ近郊のカスマ渓谷にあり、セロとは石の丘の遺跡、壁面に線描のレリーフが刻まれて神殿都市となっている。セロ・セチンは3期に亘ってアドベ(日干し煉瓦)で増改築を繰り返している。



左・セロ・セチン神殿入口



右・外壁石彫棍棒戦士や敵の首を描く(ラテンアメリカ博物館より)

最近の研究では、初期の神殿は紀元前 2400 年頃まで遡り、チャビン・デ・ワントルの神殿より 800 年古い神殿と考えられる。

神殿壁の石版には戦士や捕虜の痛ましい姿を描かれ、戦士像の顔や戦いで敵の首を切り取った実情を示している。近年の研究では、このセロ・セチン神殿遺跡・カラル遺跡など、チャビン文化より古い時代の遺跡が複数確認されている。これまでのアンデス文明の歴史が、大きく書き換えられる可能性が考えられる。



セロ・セチン遺跡・左側は兵士か、右側には敵兵の首手か (The World ペルーポリビアより)

セロ・セチンとは・・・神殿は幅 52mの基壇造りは、外壁に戦士像、切断首、腕内臓など切断された人体の各部が、石彫りされてはめ込まれ、神殿内部の土壁に魚や巨大な爪を強調した猫科動物の多彩色壁画を見る。（『ラテンアメリカを知る辞典』より）

### 「チャビン・デ・ワンタル城塞」紀元前 1200 年頃～前 200 年頃まで栄える

ペルーの中部山岳地帯を中核に、北部から中部にかけて紀元前 1200 年頃から、アンデス地方に最初に現れた文化「チャビン文化」は、アンデス山中から興った。首都リマの北約 450 km、アマゾン川の源流部の標高 3200mの地域に、「チャビン・デ・ワンタル遺跡」が荘重(重々しく)な神殿の遺構となる。（The World ペルーボリビアより）

神殿跡には 200m四方に、西、北、南に建物を配し、各入口にジャガー神、奇怪な神人像の石像が祀られ、主神殿の内部には複雑に巡らされた地下通路が走り、そこから多数の祭祀土器等が発見されている。チャビン宗教の世界観は、まだ完全には解明されていないが、多分に神話的な翼を持ったネコの動物(チャビン猫)、鳥、蛇文様を飾り、地下の通路にはランソン像(チャビン宗教の主神)が祀られている。

又、広場に見られる生と死テーマに模したもの、植物起源神話をテーマしたもの、方形パネル状の薄肉彫獣神像や、丸型の獣頭像等が多数発見され、獣神文様は土器、骨貝製品、金属器にも多用され、城塞は宗教の中心都市であったことが分る。



左・チャビン・デ・ワンタル神殿遺跡（『ペルーの天野博物館』より） 右・遺跡の地下は迷路の通路がある

「チャビン文化」はプレ・インカの最も重要な文化で、アンカシュ県(ペルー中西部)にある主神殿は、ペルーの主要神殿のうち、この神殿から神々の言葉を受取る所、神に供物を捧げる人々が遠方より足を運んだ場所と考えられる。これ等を考察すれば、神殿に参拝する巡礼の宗教儀礼はアンデス文明の曙を告げ、この時代から始まったよ

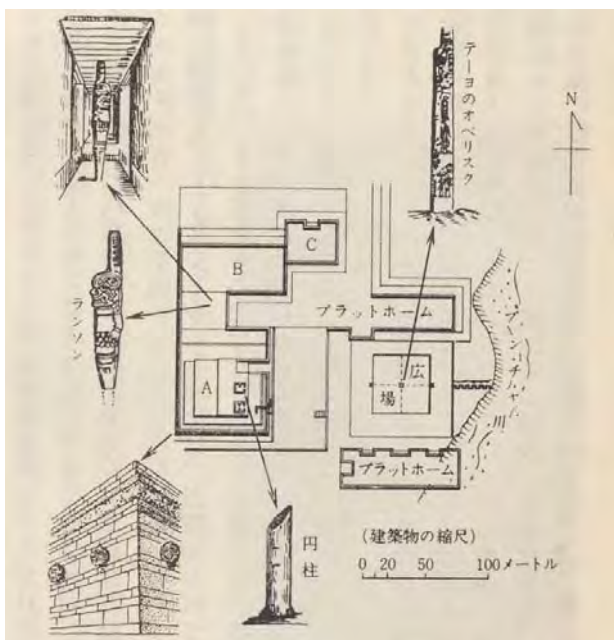


うである。しかし、チャビン文化は紀元前 500 年頃アンデス地帯から突然姿を消す。

前 2000 年頃、中部高地と南部海岸地帯との交易が始まり、その交流が宗教と農産物の発展に結びつき、トウモロコシ、ラクダ科動物の飼育、神権政治、金銀細工、織物等の文化が栄え、ここにアンデス文明の飛躍的な発展の基盤ができたと思われる。



左・ランソン神・全長 4 m の石柱、目は上を向き耳まで裂け口元から 2 本の牙がある。(ペルーの遺跡～神殿地下奥部にいる神より) 中・ランソン神の絵図『古代アンデス神殿から始まる文明』より 右・鳥に似た生物が彫られた石板・チャビン文化の形成期後期 (右写真は「古代アンデス文明展」国立科学博物館より)



チャビン・デ・ワントルの城塞、A・B・Cは半地下式石室の絵図。遺跡はアンデス最古の大石造建築物であるが、完全な図面が作られていない。この図は、リマ国立考古学人類学博物館が作った見取図で、地下の構造を具体的に知る事は出来ない。建物の広さは75×72mの平方メートルで、3つの石室からなり、天上は高さ1、8m、廊下1m、入口は1カ所、中央の廊下に石像がある。『インカ帝国』泉 精一著より



左・A壁面に謎の頭像「カベッサ・クラバ」頭の釘の意味 中・「ライモンディの石」両手に杖を持ち頭に多数の冠を被ったジャガー神像か。xアタノールxより

## 「クントウル・ワシ遺跡」 紀元前 1000 年～前 700 年頃の神殿建設

クントウル・ワシ遺跡の発掘は、東京大学アンデス地帯学術調査団・大貫良夫教授が代表となり 1988 年～89、90、93、94、96 年、6 回の発掘調査を重ねた遺跡となる。

ペルー北部山地の 2300m にある「クントウル・ワシ遺跡」は、1946 年に発見されたが、長い間本格的な発掘調査が行われず放置されていた。東京大学古代アンデス文明調査団・団長大貫良夫氏による発掘は、1988 年～1997 年までの発掘調査となる。この遺跡がチャビン・デ・ワントル神殿と共に、アンデス文明の形成期後期(紀元前 300 年～紀元前後頃)の最重要神殿の一つあった事を明らかにした。

その後、1998 年からは研究拠点を埼玉大学に移して発掘調査を継続、膨大な調査データ分析により、遺跡の学術意味を更に解明を進めた。この発掘調査は、アンデス最古の金製品を伴う墓が発見され、国際的に大きな注目を集める事となった。



角目ジャガー石像(ザ・ワルドより)



山の頂にクントウル・ワシ遺跡がある



左日本の援助で作られた博物館 右 14 人頭金冠、切断した人間頭部像 (左右「遺跡ときどき猫」より)



後の調査に依って石彫、彩色レリーフ、装飾品など数百点に及ぶ工芸品が出土し、博物館(現地村)の必要性が問われ、「博物館」を 1994 年に完成し、日本側から村へ寄贈した。1998 年には再び日本側の支援によって、博物館の増改築計画が進められペルー

政府の認定を受けて本格的な博物館となった。2000年から埼玉大学中心の国際チームにより、「ユネスコ文化遺産保存信託基金プロジェクト・ペルー国クントウル・ワシ神殿遺跡の修復保全」名称して2003年には遺跡公園をも完成した。又、南北アメリカで最古の金製品も出土し、更に3つの神殿構造が明らかになり、形成期後期の神殿建設の過程が解明され、6つの墓から金製品・副葬品が出土した。

遺跡はペルーの北部高地の海拔2300mの山の頂にあり、アンデス山脈西斜面、降雨量が年間500mm、12月から3月に集中し、その他は晴れて乾燥が強い地域となる。



左・金製耳飾り・(クントウル・ワシ期「蛇・ジャガー耳飾りの墓」より出土) 右・金製ジャガー・双子鼻飾り(クントウル・ワシ期「5面ジャガー金冠の墓」より出土) (「遺跡ときどき猫」より)

#### クントウル・ワシの編年は6回の発掘の結果この遺跡の時代区分とした

最初の建設は①「イドロ期」(紀元前1100～700年)に始まる。山を整形し、突き固めた土の上に白い土を塗り固め、その上に石壁の基壇(一段高くした)や建物、広場を建造している。石壁の表には20cmの厚さに粘土を塗り、更にその上に薄く白い土で上塗りをして施している。この時期の建築物は、その後の時代で破壊され、埋め込まれてしまい、全容については解らないが、公共的な祭祀の場と考えられている。

次の時期は②「クントウル・ワシ期」(紀元前700～450年)で、大がかりな神殿建設が行われ、山の四方に巨岩を加工した石壁を12mの高さで廻らし、北東面には幅11mの階段を作っている。頂上部には基壇や方形と円形の2種類の半地下式広場を配置して、床下には石組の排水溝を設けている。中央広場の階段には、ジャガーの顔を浮彫して配し、その他の場所に大小の石彫りを置いている。中央神殿の建築には床下に数人の高位の人物(その時代権力者)を埋葬し、金製品や豪華な服装品を添えている。

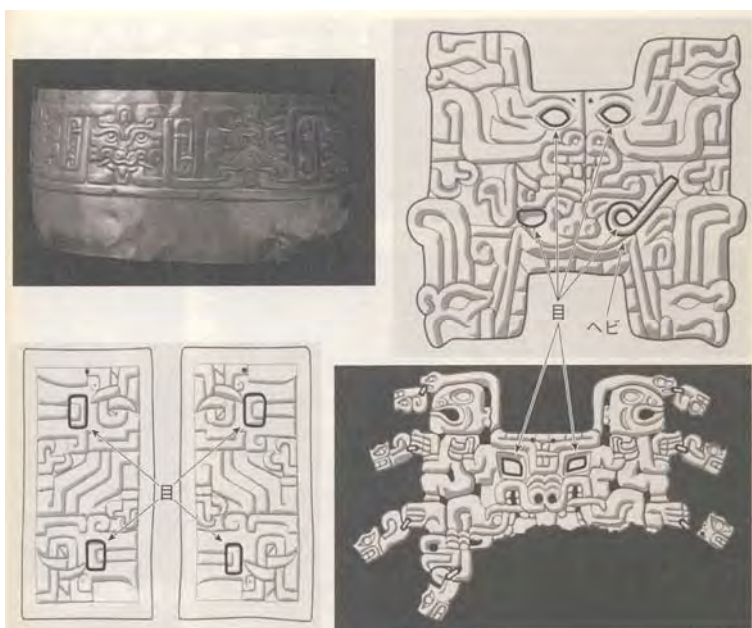
その後の③「コパ期」(紀元前 450～250 年)で、クントウル・ワシ期の神殿を原則として継承し、南西部にも神殿や広場、斜面を上下する石の階段を建造となっている。

最後が④「ソテラ期」(紀元前 250～1 年)で、この時期のはじめに神殿は大きな破壊を受けていて、ソテラ期の建築は殆ど残っておらず、詳細は不明ながら、祭祀活動が行われなかったようである。

発見された墓について・・・1989 年の発掘の時、中央基壇の下からクントウル・ワシ期の墓が発見され、4 人の埋葬者に金の冠、鼻飾り、耳飾り等見事な金細工が出土した。これらは紀元前 700 年よりも少し前に製作されたものであり、ペルーで最古の金の芸術品で、学術調査で出土したものとして内外の注目を浴びた。

クントウル・ワシ期の墓から、カエルの象<sup>あぶみかた</sup>った鏡形壺と、直径 2.3 cm の円盤状胸飾りが見つかった。それと共に、コパ期の墓 2 基からも、金の装身具多数が出土し、2 cm の小さく精巧なジャガーの頭部を模した首飾りや、太い筒状の 7 cm の首飾り玉、毛抜き、耳飾り等が 182 点出土、コパ期(前 5～前 4 世紀)の金細工例が初となる。

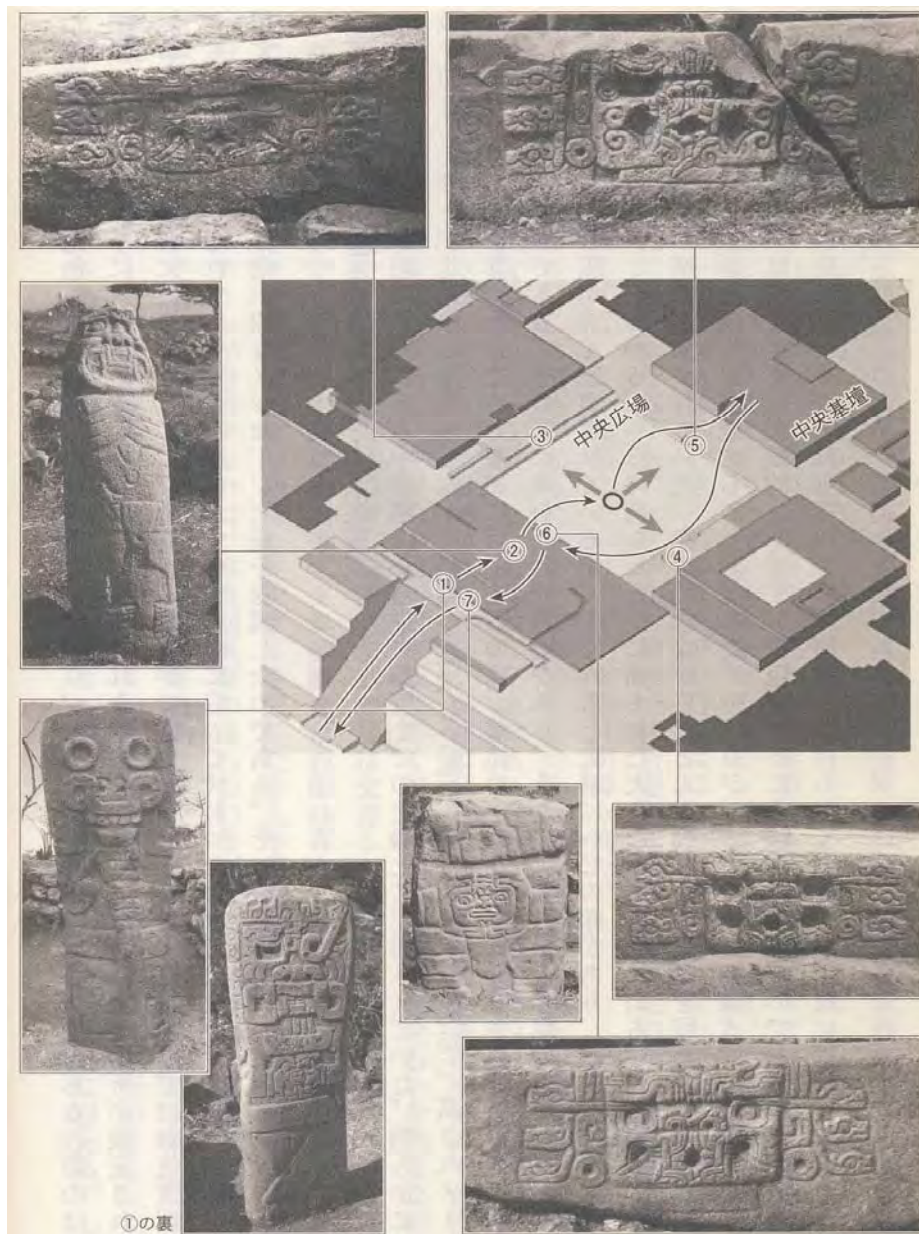
形成期末期(ソテラ期・前 250～前 50 年)この時期には儀礼主義は完全に影を潜め、神殿も宗教的芸術も復興していない。しかし、これを衰退と見るか、あるいは停滞の時期と捉えるのは一面的であり、この点は大いに議論の余地は残されている。



一つ墓に副葬された金製身具にみられるモニュメント・アートのモチーフ。ジャガーの顔や蛇が組み合わされている。  
左上は金製冠。右上は金製飾り板の紋様の書き起こし。  
左下は金製飾り板の紋様の書き起こし。『古代アンデス神殿から始まる文明』より

形成期後期の大神殿クントウル・ワシは全体構造の中に宗教的メッセージが織り込まれている。

クントウル・ワシ遺跡の大神殿の様相・・・



上の絵図は、中央階段を上り、広場を経て中央基壇(1段高い構造)へ至り、中央基壇から戻る帰路を矢印で示す。①～⑦はその行程で目にする石彫となる。①は半人半獣のジャガーが表面と裏面表現され、②は蛇の頭。③④⑤⑥は大基壇の縁にある半人半獣像がある。7つの石彫は、配列や順序にも意味があるのか全体でセットになっている。後期(紀元前 800～前 250 年)には、チャビン・デ・ワントルやクントウル・ワシなどの大神殿が造られ、クントウル・ワシ神殿の石彫から読み取る宗教的メッセージの伝達が見られる。大基壇の正面より中央階段から中央基壇までの主軸上に配列されている。このように大神殿は全体構造の中に宗教的メッセージが織り込まれている。(『古代アンデス神殿から始まる』第2章大神殿の出現と変容するアンデス社会・加藤泰建より)

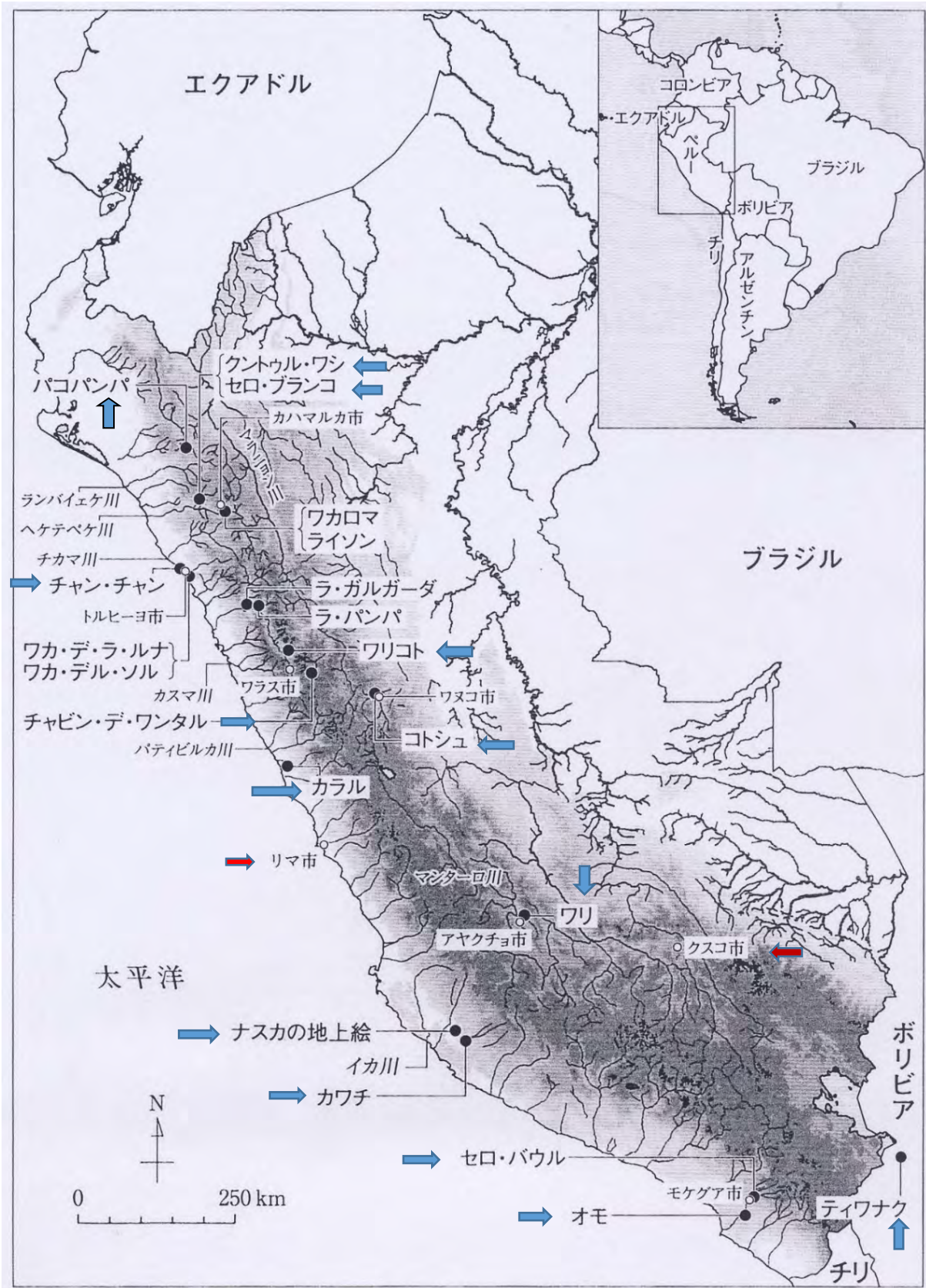
# アンデス文明史年表

古代アンデス文明の編年	絶対年代	時代区分	北海岸	中央海岸	南海岸	北高地	南高地	
採集狩猟	9000	先土器時代	パイハン	チバテロス		↑ ギタレーロ	↑ アヤクチョ トケバラ	
植物栽培・動物飼育の開始	5000					↓ ラウリコチャ		
神殿建設の始まり 漁撈の発達 織物製作	3000	草創期		チルカ				
土器製作	1800		早期	ワカ・プリエタ	カラル	エンカント		↑ コトシュ
			前期	グァニャベ				
神殿の発展 冶金技術の発達	1000	形成期						
	800		中期	クビスニケ				
			後期		アンコン	ミラマル	↑ チャピン	
灌漑農業の本格化	250	前期ホライズン				↑ バラカス		
	BC		末期	サリナール			↓ ネクロポリス	
王国の成立 青銅器製作	AD	中期ホライズン						
	700		地方発展期	ピクス	モチェ	リマ	ナスカ	↑ レクワイ パシャシュ カバマルカ
都市の成立		後期ホライズン						
	1000		地方王国期	シカン チムー	チャンカイ	イカ・チャンチャ		↑ ルバカ
全中央アンデスの政治統一 スペイン人の侵入	1500	後期ホライズン						
	1532		インカ帝国期	← チムー・インカ				↑ インカ
	1821	植民地時代						

『古代アンデス・神殿から始まる文明』大貫良夫/加藤泰建/関雄二編 朝日新聞出版 2010年より

紀元前～紀元後のおもなアンデスの遺跡

→ 印・遺跡



『古代アンデス・神殿から始まる文明』大貫良夫/加藤泰建/関雄二編 朝日新聞出版 2010年より

「パコパンパ遺跡」紀元前800年～西暦紀元前後・・・国立民族学博物館・ペルー国立サン・マルコス大学合同調査団は、2013年8月5日、ペルー北高地パコパンパ遺跡の第一基壇に於いて、約1.6mのジャガー人間石彫を発見した。製作年代は、紀元前800年～前500年頃と考えられ、表面には高彫り技法で、ジャガー的頭部と人間的な身体が組合せの姿が表現されている。形成期の遺跡で石彫を有する事例は少なく、同遺跡では、これまで5体の石彫が確認され、同時代の遺跡としては、世界遺産に指定されている「チャビン・デ・ワントル遺跡」や「クントウル・ワシ遺跡」がある。(パコパンパ遺跡におけるジャガー人間石彫の発見・国立民族学博物館より)



左・石彫り像・高さ1.60m、幅43cm、厚さ24cm。顔面部分は38cm方形、目はつぶれ気味、口は開き牙が見える。ネコ科動物(ジャガー)的表現。胸に両手合わせ腰に帯彫られている。石は石灰岩。  
右・副葬品ジャガーの顔、胴体は蛇を持つ黒色象形鏡形壺、高さ20cm(産経westより)

パコパンパ遺跡におけるジャガー人間石彫の発見・・・ペルー北高地パコパンパ遺跡の第一基壇に於いて高さ約1.6mの石彫を発見した。製作年代は紀元前800～前500年頃と考えられ、表面には高浮き彫りの技法で、ジャガー的頭部と人間的な身体が組合わされた姿が表現されている。形成期の遺跡で石彫を有する事例は少なく、同遺跡では、これまで5体の石彫が確認される。しかしながら、原位置を特定できるものはなく、学術調査で発見された石彫として今回のものが初めてである。遺跡はペルー高地カハマルカ県チョタ郡、海拔2500m。遺跡の年代は、パコパンパI期(紀元前1200～前800年)。パコパンパII期(紀元前800～前500年)。編年はI期もII期もアンデス考古学上、形成期と呼ばれる時代に属する。石彫は、高さ160cm、幅43cm、厚さ24cm。顔面部分は38cm四方の方形。目は円形、鼻は潰れ気味、口は開きのネコ科動物ジャガー的表現し、胸に両手を合わせて、腰に帯が彫られている。石種は石灰岩。(国立民族学博物館・ペルー国立サン・マルコス大学合同調査団より)



「**ナスカ文化**」紀元前後～800年・・・ペルー南部海岸地帯を本拠とした紀元前後～後800年頃に栄えた文化となる。北部海岸のモチエ(モチカ)文化、ボリビア高原のティアワナコ文化(ペルー、チリ、ボリビア高原のアンデス文明)と同時代となる。ナスカ川流域カラチ遺跡がその中心地。狩猟、漁業、農業活動中心とした政治・社会体制となっている。特異なものには、天体観測や星占いの関係があるとされる地上絵がある。



左・ナスカ土器・チチャ酒容器(日・エクアドル外交100年より)右・ナスカ土器(同)(ウィキペディアより)

※高度なナスカ彩文土器には双注口の壺(鐘型壺)、鉢、象形壺等がある。絵柄は写実的で生活に関わるトウガラシ、バカエ、トウモロコシやジャガー、鹿、ネズミ、蛙、魚等多種多様の絵柄がある。



ナスカの地上絵・・・直線、ジグザグ線、三角形、巨大な動物等を描き、120mに及ぶ鳥の絵がある。ハチドリ・ペルー南海岸(『ペルーの天野博物館より)

ハチドリ約90m、その他にコンドル135m、クモ45m、クジラ65m等がある



左・サル60m



右・「人型」加工写真砂漠に描かれた絵は現在でも謎となる(山形大学より)

## 「ティアワナコ文明」アンデスの中の地域文化は前 300～後 1200 年頃

4000m級のアンデス南部高原、チチカカ湖に近い荒涼とした草原に「ティアワナコ遺跡」がある。中部アンデスのチャビン文化より後の文化となる。ティアワナコ文化期を経て、ペルーのワリ文化と共に周辺地域に拡散して、第2の文化の広がりを持ち、ティアワナコイデ期に至る後の100年～1200年の文化である事が知られている。

この遺跡の大宗教建造物はその壮麗さと、巧みな石造技術はスペイン人記録者に早くから紹介されている。「カラササヤ」と呼ばれる180m×135mの基壇には、約4m×3mの板石で造られた「太陽の門」が残されており、その主神「ピラコチャ」の浮彫文様が華麗である。附近から高さ3m柱状石像発見され、主神像として基壇の中央に復原建立されている。ピラコチャ神はインカ帝国が、スペインに征服されるまでのインカの始祖神話に出て来るアンデス文明の創造神となっているのである。



左「カラササヤ」一枚岩の「太陽の門」チチカカ湖近く、後300～500年頃神殿建設が始まり後500～1000年最盛期となる（「ティワナク」より） 右・太陽の門正面ピラコチャ神浮彫（ラテンアメリカ博物館より）



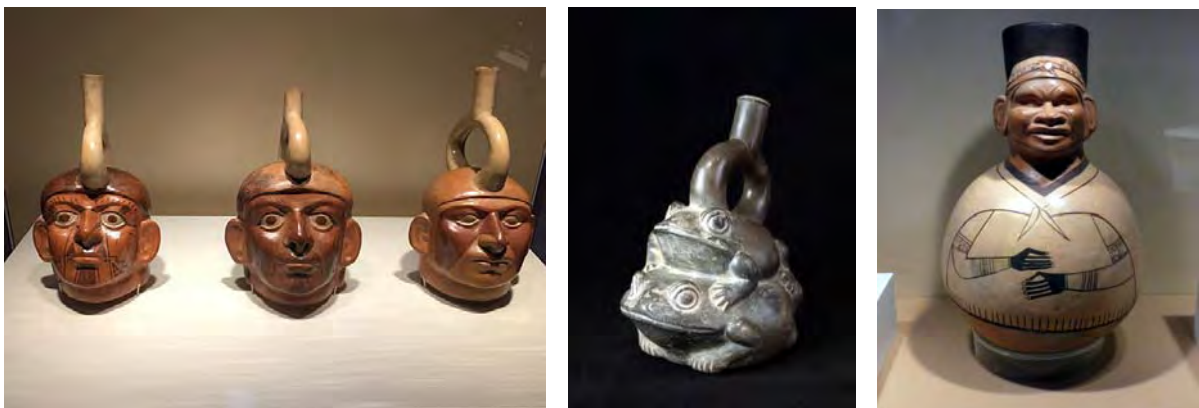
左ティアワナコ遺跡の神域のカラササヤに壁面177個の顔が埋め込まれる。（「ティワナク」より）

中ピラコチャ神はインカ宗教の最大の神・文明の創造者。右インティ（太陽神）ケチュア語で太陽、ケチュア族は太陽神を最上に、太陽神は水、土、火を抑える神となる（中右訳は『ウィキペディア』より）

「モチェ文化」美しく彩色の文化・紀元前後～後 800 年頃・・・ペルー北海岸のチカマ、モチェ、モチカ川の両流域を本拠した文化。チャビン文化の後に、紀元前後～800 年頃に栄えて、ナスカ文化、ティアワナコ文化等に分散して発展して行く。彼らはアドへ(日干し煉瓦)を使って巨大な神殿を建造。又、モチェ文化は美しく彩色された人面像、動物、作物等を象<sup>かたど</sup>った罎型注口土器(あぶみがたちゅうこうどき)と黄金細工などの素晴らしい副葬品の出土で知られている。モチェ文化では美しく彩色され、写実的に人面や動物、作物などを象った罎型注口土器が特徴となっている。



左「太陽のワカ」モチェ文化代表遺跡。底部 345×幅 160×H30m 1億6千万個の日干しレンガで建造  
 右「月のワカ」1段目は捕虜を運れる神官、2段儀式的踊り、3段魔術師の守り神、4段魚を持つ獵師、5段生贄の首を持つドラゴン、6と7段は天空、モチェの創造神。(右写真「遺跡ときどき猫」より)



左・同じ人物の人生3つの顔肖像土器・モチェ文化(紀元前 200～750/800 年頃) 中・罎形注口壺(蛙)<sup>あぶみ</sup>  
 モチェ文化での数少ない黒色研磨土器の傑作。右・肖像土器。(左中右、古代アンデス展より)

モチェ文化が繁栄したのはモチェ川その他、その北方を流れるラ・レチェ川流域から南は中部海岸のワルメイ川流域までの 500km の範囲に及んでいる。1～2つの谷にまたがる幾つかの国家形態があったと考えられている。

「ワリ文化」紀元後 500～後 1000 年頃・・・ペルーのモチェ、ナスカ、ティアワナコ各文化が栄えた 100～800 年の末期に、ペルー中部高地のアヤクチョ付近のワリを中心として成立した文化、ワリ期の織物も海岸地帯で複数発見される。又、ワリの地方遺跡であるセロ・パウルとティアワナクの飛び地であるオモ遺跡群もこの地にある。

これ等はそれぞれ立地条件が異なり、セロ・パウルが山の頂にオモ遺跡群、モケグア川の近く谷底辺に立地し、文化的にはナスカ、ティアワナコの両文化内容を見ることが出来る。ワリ文化の王族墓では座位の姿勢で 6 体の遺体と副葬品も出土している。



左・ワリの上着の文様(西暦 750～950 年) 右・翼を持つ神秘的な生き物が刻まれた金銀製の耳飾り、リマの北約 300 km、エル・カステージョ・デ・ウアルメイ遺跡の王室の墓にワリ帝国の 3 人の女王を含む 63 体の遺骨と共に出土、高貴な女性の装飾品と考える。(top ニュースワリ王族墓より)



左・つづれ織りのチュニック・ワリ文化 右・多彩色の水筒型壺・ワリ文化(古代アンデス文明展より)



**チュニック・ワリ文化の織物**

左・天野プレコロンビアン織物博物館蔵、チュニック=筒形をした衣装の総称。右・死者の葬儀用衣類(ウィキペディアより)



「パチャカマ文化」 紀元後 100～1450 年頃・・・パチャカマと云うのは、ケチャア語で「天地の創造者」という意味で、この地を征服したインカ帝国が古来より造られていた大規模神殿に付けた名前となる。

ペルー国の中央海岸、リマ市に近いルリン河谷にある神殿遺跡は、3世紀～8世紀にかけて成立した古代アンデス文明の古典期のリマ文化(後 200～700 年・ワカ・プクヤーナはリマを中心に日干し煉瓦のリマ文化遺跡)の中心地であった。

その後、10世紀頃になると海岸地方で最も重要な神殿都市に発展し、更にインカ時代には巨大な太陽神殿として発展し、神殿に仕える処女たち住む「月の館」が建造され、クスコ地方を除くインカ最大の宗教中心地域で、各地から巡礼者が集まった。

近年、大規模な発掘調査が行われ、パチャカマ遺跡の歴史や神殿の意味が解ってきた。100年頃からスペイン人達の上陸の1450年まで、「パチャカマ文化」や「イシュマ文化」、「インカ文明」、「リマ文化」など様々な文化がこの地域に栄えていた。

現在は17つのピラミッドが解明され、これらピラミッドと建築物の多くはスペインが侵入する以前の800～1450年に建設されたものであった。

パチャカマ神を信仰から、インカ帝国時代になっても信仰は続き、「太陽の神殿」や「月の神殿(処女の館)」の異文化建造物が混交して、神殿はアドベ(日干煉瓦)で造られている。15世紀後半にスペイン人の侵攻によって神殿は破壊されてしまった。



左パチャカマ遺跡「太陽の神殿」・the worldより 右処女の館(月の神殿)・ラテンアメリカ博物館より

パチャカマ神殿・・・スペイン侵略前まで栄えた神殿都市。インカ帝国時代にも各地から訪れた巡礼地となっている。神殿はピラミッドの頂にあり、金銀の像が祀られ、インカは信仰の「インカの太陽と月の神殿」を建造した。紀元一千年以前より、ここに神殿が建てられ、神体は「魚」だったと推定され、この信仰は神託と結び、海岸地方全体に広がっていたが、スペイン軍は金銀像を奪い、神殿に火を放ったのである。

「シカン王国」 シカン文化 750年～1350年頃・・・ペルー北海岸シカン遺跡は、海岸沿をエクアドル国境まで広がっている。プレ・インカ時代(インカ以前文明)の文化で、「シカン」とは「月の神殿」を意味する。1991年、南イリノイ大学人類学教授の島田泉先生によって名付けられた。シカンは前期・後 750～900年、中期・900～1100年、後期・1100～1375年、(チムー国に征服される)に分れる。

前期のシカンはモチェ文化(800頃滅亡)の末裔と考えられ、遺物の文様に共通性を持っている。中期の時代は、シカン文化では優れた土器や、周辺国からの貝・宝石・金銀・鉱石の交易が盛んであった。又、政治・宗教的中心の王国として栄え、この時期の埋葬には金銀の大杯や、エメラルド、真珠の副葬品がミイラと共に埋葬されていた。後期シカンは、1375年頃のチムー王国による征服されて終わる。シカン文化の人々は黄金で装飾された儀礼ナイフ、トゥミを使用していた。



左シカン王は近親者8名と一緒に埋葬され多数の金や壺が出土 右シカン美術を代表の金属製品(南イリノイ大学考古学調査センターより) 《黄金大仮面は1991年遺跡の「東の墓」から巨大な黄金の仮面が発見、吊り上がった鋭い目、朱に塗られた顔等、3種類の金銀銅の合金はトゥンバガと呼ばれ、黄金大仮面と頭飾りは約100cm。発掘品は「国立シカン博物館」に展示されている》(エイビーロード通信より)

### 黄金仮面が発見されたロカ・ロコ遺跡

ペルー北部のチクライヨ郊外レチェ川流域にあって、神殿がアドベ(日干し煉瓦)で建造されており各地の共通している。

シカンはアドベで枠を組み、枠の中に石や砂・木材を埋めるという工法で建造されていたのである。



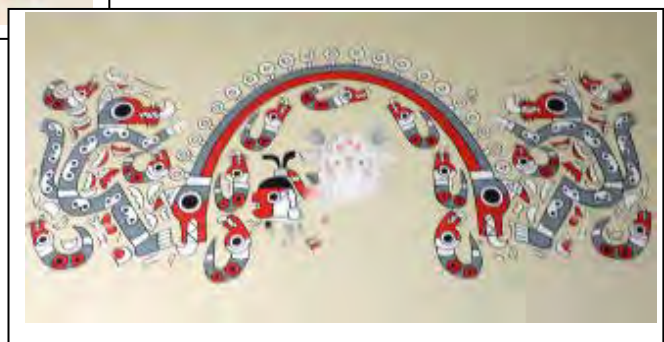
ロカ・ロコ遺跡



ナイルラップが右手に持つのは生贄の首、左手に持つのがトゥミと呼ばれるナイフ。先端が半月状のナイフ、貴族が持つ。

チュトゥーナというワカの壁画。波間に生贄の首とトゥミを持つナイルラップ(シカン唯一の神)この神は海からやって来て、建築技術・金銀銅製品・酒の造り方・農業技術の知恵を授けた。そして死後は海鳥に姿を変え上空を飛び廻り、天に消えていった神となっている。(「遺跡ときどき猫」より)

壁画は遺跡附近から発見された壁画のレプリカ・・・この壁画は、右上のチムー文化のドラゴンのワカの絵柄に似ているという。実に不思議な壁画である。いろいろなアンデス文化が想像されるのである。(「遺跡ときどき猫」南米編より借用)



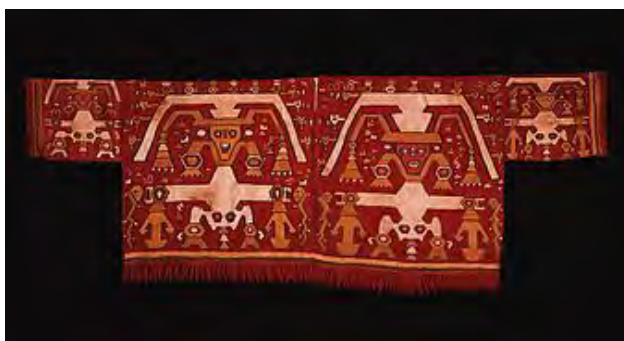
「チムー文化」・チムー王国 850～1470 年頃・・・ペルー北部海岸都市トルヒーヨ近郊ある「チャン・チャン」を中心とした文化となる。インカ帝国に征服されるのは1400 年頃とされ、北はトゥンベス(ペルー北西部)から、南はリマの付近まで、1200 km 及ぶ海岸地帯の広大な版図をもった「チムー王国」を形成していた。

南は文化の違う「チャンカイ」を含む広大な版図を持ち、チムー王国はモチェ(紀元

前後～700年まで栄えた。モチーカとも)の遺民より興されている。チムー王国はインカ帝国の侵攻を止める軍事力を持っていた最後の王国であったが、インカ帝国の侵攻は1470年に始まり、1493年にチムー国は崩壊したと考える。チムーの陶器、精巧な金工で知られ、その金属類の技術力は、スペイン侵攻する前の最先端技術大国であった。泉靖一先生(東京大学第1次アンデス調査団長)は『インカ帝国』チムール帝国の始まりは紀元1000年～1100年間ではないかと推定している。



左・チャン・チャン遺跡 右・日干し煉瓦の壁とレリーフ (タビジン・チムー王国チャン・チャンより)



左ラピスラズリ・トルコ石・石英・貝の首飾り 右チムーの織物 (ダンバートン・オークスはハーバード大学所属機関より)

※上記の写真はペルー北部で発見されたチムー王国の墳墓から出土したものである。墳墓は2000年遡る遺跡の地下建造で、祖先崇拜の儀式的構造様式となっていた。発掘の責任者マシュー・ヘルマー氏は「チムーの貴族階級、アンデス社会の先祖に対する畏敬の念が伺い知れる」と語る。(News 旅文化ニュースより)



「チャンカイ文化」1300年頃～1500年・・・ペルー南部海岸のイカ川、チンチャ川流域に紀元後1000後に栄えた文化で、16世紀のスペイン人の記録によれば、イカ、チンチャ両川の流域に首長制社会が存在していて、チンチャの首長は権威あて、その中心地遺跡として、前者のタカラカ、後者のラ・センチネラがある。記録によればチムー王国と同時代と思われ、15世紀前半にインカ帝国によって滅ぼされる。一般住宅は日干し煉瓦で作られ、半農半漁の生活も達成され、灌漑設備も完備され、<sup>かんがい</sup> トウモロコシ、サツマイモ、豆類、トウガラシ等が耕作されていて、土器や織物は優れる。



左・右は猫科動物、鳥文様縫取製・木綿、獣毛・チャンカイ文化・「アルパカ×綿」織物の起原は古く歴史文化の役割を果す。アンデスの美術を織りなす糸は人類史に於ける古代文明の傑作といえる。

「アンデス美術を織りなす糸 古代織物第1集」「アルパカ×ワタ」東京大学総合研究博物館より。

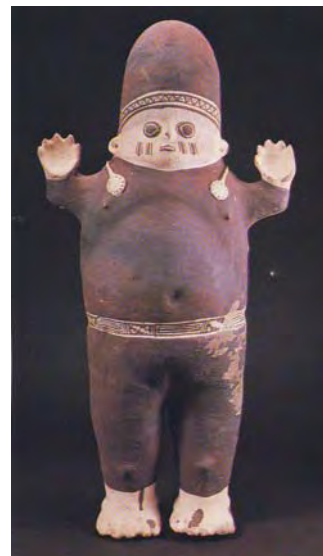


左・インターロッキング文様の古布13×13cm(アンデス文明チャンカイ文化織物) 右・織物27、5×21cm。擬人化した動物か、不思議な形の胴に人のような頭が付いている。上下に足が出ているが、個体が一つなのか二つ付いているのか不明。謎の生物の連続模様。布の上下には小鳥がならんでいる。(ギャラリー鈴木より) (「天野芳太郎博物館」にはチャンカイ文化の土器や織物等を中心に展示あり)

「天野博物館」・・・ではチャンカイ・チムー・インカ文化の土器や織物等を中心に展示の写真となります。拙書電子書籍『南米で事業を興し成功し天野博物館を開設した男』の第3章にも当館の土器・織物の写真を載せてあります。



左チャンカイの白地黒彩土器 中鳥(海鷗) 31 cm 壺(魚) 38、2 cm 右壺(川えび) 30、2 cm



左・チャンカイの白地黒彩土器 H58 cm 中・同 H52 cm 右・同 76 cm

人形の大壺・・・土器はティアナコ式多彩土器から、チャンカイ独得の白地黒模様の土器に変化したものらしい。チャンカイ土器はインカ時代にも、この伝統は長く残っていたようである。大型の<sup>ひとがた</sup>人形壺、ナスカ的コップ、浅底の鉢等に実に変化多い。大型の人形壺はひょうきんな表情、眼が吊り上がっているため、地元の人々はチーノ(シナ人の写真)と呼んでいる。表面はつやを出さないことが特徴で、模様は鳥、魚、リヤマ、アルパカや幾何学的模様となっている。(『インカ帝国』泉 精一著より)

「イカ・チンチャ文化」1000～1476年頃まで・・・ワリ文化が11世紀滅び、新しい文化「イカ・チンチャ文化」は栄え、ナスカ谷の墓地からは織物・土器・副葬品が出土している。埋葬された人の髪の毛を編んで2～5mのカツラをつけていた。

ペルー南部のイカ、チンチャ(川の名前)に栄えた文化で、スペインの征服後の16世紀後半のスペイン文書によれば、チンチャの首長は強い権威を持ち、インカ皇帝も認めていた程であると記録されている。埋葬された頭蓋骨の高度な古代医療の外科手術の頭蓋骨(脳外科手術)、頭蓋変形の技術は当時の医療水準の高さを示している。「イカ考古学博物館」には考古学や人類生物学や古代病理学研究の成果を集めたペルー初の博物館(リマから南300km)として、1946年3月30日に創設されている。



左・頭蓋骨に穴を開け頭部外科術の痕や戦闘の傷等。脳圧を下げる、もしくは病気治療とも考える。(エイビーロード・イカ博物館より) 右・細く長く変形させた頭蓋変形とうがいへんけいや幼少期から頭を板に挟み、長く伸ばす頭蓋変形手術か。マチュピチュ遺跡にも出土、人為的に変形させる身体改造手術か。インカ頭蓋骨脳圧を下げる医術か。呪術的意図は不明。(「ペルーの高度な古代医療技術に触れる」イカ考古学博物館より)



左・トロフィー・ヘッドへ(干し首) 《戦の相手の首を戦利品として加工するだけでなく、神への捧げものとしてトロフィー・ヘッドを作った。脳や眼球を抜き取った後、眼窩がんか(眼球の収まる頭蓋骨くぼの窪み)に布を詰め口が開かないようサボテンの棘とげで唇を縫っている。》 右・紀元1500年頃の女性のミイラ・《農業用の杖と道具、食べ物が入ったヒョウタンの容器、織物、食器などの家財道具が埋葬されていた。刺繍ししゅうがちりばめられた衣装は、彼女が若くして亡くなったことを想定させ、レントゲン検査の結果、彼女が妊娠していたことも分った。》(「たびこふれ」ペルー南部イカ地方博物館より)

## 第2章 インカ帝国初代皇帝から13代皇帝を追う・・・初めてクスコの街

を見たスペイン人の年代記作者は、この景観を驚きの感覚で書き留めている。

« 「吐気やめまい、手足のしびれ、そして鼻血まで吹き出すようなソロッチ(酸素不足・高山病)に悩まされながら、やっとのことでクスコ盆地の上に立つと、突如として、眼下にその大都市が出現する。大都市祭りクスコの都こそ、12世紀から16世紀半スペインに征服されるまで、アンデス一帯に君臨した大帝国インカの首都、その面積は百万km<sup>2</sup>、人口2千万人、北は現在のコロンビア南部まで広がっていた。」 »とある。

そして、インカ帝国を概観すれば次のようになる。

アンデス地帯では、ついに「文字」が発明されなかった。その歴史を明らかにするには、考古学と民族学に頼らざるをえないが、この2つの科学だけでは限度ある。

スペイン人が16世紀中頃に、この地帯に侵入した年代記作者(クロニスタ)による『年代記』(編年史・出来事や事件を年毎に記録した)の記述者が、インカ帝国の伝承者から「インカ帝国の起源に関する歴史・生活習慣」を聞き、詳細な記録を留めた。

従ってほぼ1400年代からの帝国建国の歴史と、周辺の諸地域については、ある程度の文字(侵略後のスペイン語)による資料が残っている。これ等の文献と、考古学的研究との間では、必ずしも一致することはないが、プレインカ時代(スペイン征服以前のインカ)の歴史より、具体的な歴史を見通すことができる。

それ等の記録を総合すると、インカ帝国皇帝の13人の皇帝の即位があり、初代の「マンコ・カパック」をのぞき、12人の皇帝は実在の人物のようである。この系譜から逆算すると、インカ帝国の成立は紀元1200年頃と推定されるのである。2代皇帝から8代皇帝に亘る200余年の間は、帝国というよりも、部族と呼んだほうが相応の国となっている。彼らはクスコを中心として、数10km以内の諸部族と戦闘を交え、徐々に強国になっていったようである。

その後、長年に亘る仇敵の「チャンカ族」と交戦して勝利すると、インカ部族は急速に他部族を征服に乗り出した。第9代「パチャクチ皇帝」と皇子「トパ・インカ」(第10の皇帝)は、30年間にアンデス地帯の大部分を占領し、他の部族をインカ帝国の版図に組み入れた。第11代皇帝「ワイナ・カパック」は領土を更に拡張し、1千万km<sup>2</sup>に及ぶ大帝国を打ち立てた。しかし、11代皇帝の死後、皇位篡奪の争いが起こり、側室側の子「アタワルパ」の勝利となるが、その頃、スペイン軍が迫る話はP43より。

ペルー国の気候風土は・・・地形は太平洋の乾燥地帯(コスタ)、アンデス山脈高原地帯(シェーラ)、東のアマゾン源流の熱帯雨林地帯(モンターニャ)と、一つの国で、気候も風土も全く異なった「3つの地域」から成り立っている。

ペルーの太平洋側の海岸線は 2500 km に渡って砂漠化になっているのは、南極から北上する冷たいフンボルト寒流と、太平洋からアンデス山脈に吹き上げる風の気象条件によっている。南北 7500 km、幅 750 km に及ぶアンデス山脈は、ペルー附近で東側の白アンデスと、西側の黒アンデスに分れ、この2つの山脈の間がシェーラと呼ばれ、標高 3000~6000m の高原地帯で、南のボリビアに向かって広がる。高原地帯は寒くて樹木が育たず、イチウ(イネ科の草)の草が一面に生え、リヤマ、アルパカ、グワナコ、ビクニーヤが草をはむ。インカの国土は「タワンティンスーユ」といい、タワンティンは「4」、スーユは「州」の意、4つの国と環境条件がインカの国を形成している。

1492年、コロンボスの新大陸到達時のインディオの人口は下記に推測する

地 域	推 定 人 口 (人)
メキシコ以北	1、000、880
※ メキシコ	4、500、000
西インド諸島	225、000
中央アメリカ	736、000
※アンデス地帯	6、131、000
その他南アメリカ	2、808、000
	15、490、880

※アメリカ古代文明の中心地域は、1492年インディオの推定人口1550万人、その内450万人がメキシコに、610万人がアンデス地帯に居住して文明・文化が開かれたのである。



南アメリカ大陸7カ国に跨る世界一長いアンデス山脈は8千kmとなる。(雑学カンパニーより)

アンデス地帯で家畜化され運送に活躍していた動物



左・リヤマ(ラマ・ヤマ・ラクダ科)はアルパカより大型耳が長い体高約 120cm 右・アルパカはリヤマより小ぶり耳が小さくラクダ科、体高約 90~100cm、ビクーニャよりやや大きい



左・グアナコ(ラクダ科ラマ属) 頭まで1、5~6m、全長1、6m位、体重48~96kg 右・ビクーニャ(ラクダ科)体長120~190cm・体高70~110cm、外観はグアナコに似る、頸の下30cmの毛垂れる。



★「リヤマとアルパカのの違い」絵図参照  
このアルパカ、リヤマは、アンデス原産動物で、インカ時代以前から荷運び、ラクダ科の毛は織物に利用された。

リヤマ →

← アルパカ

インカ農民の1年の暦(こよみ)・・・アンデス文明は農業にその基盤を持っているので、暦法が存在している。マチュピチュ遺跡には、太陽の神殿による観測所があり、冬至・夏至を正確に「暦・こよみ」を示して、農民達への1年の農耕サイクルを皇帝の管吏が農耕の耕作時期を管理していたのである。

農耕作業は、タクリアと呼ばれる「足踏み鋤」(鋤先青銅製・現在でも使用)で土を掘り起こし、農具と云えばこれだけである。8月祭りが終わると、男たちは一斉に畑に出て、土を掘り起こし、その後から女子供が土を砕き、耕作が始まるのである。

農民たちは皇帝の土地から作付けをし、太陽(生産物を太陽神・皇帝に捧げる)の土地の作業を終えてから、自分たちの土地に耕作を始める。1年12カ月の内、農民達に自由になる月は3カ月で、残りの9カ月は国家のために労働を提供しなければならない。耕作以外に道路工事(インカ道)や宮殿や神殿造営への労働提供(ミタ・賦役)等が課せられている。この農業の1年の基本が、彼らの「暦法」「大陰暦」の証として神殿や祭壇、石で組んだ日時計があったのである。1年12カ月の祭りは次の通りとなる。



左・マチュピチュの「太陽の神殿」に2つの窓があり、正面の窓から陽が差し込む時は冬至(右写真・太陽の陽が入る・BS マチュピチュ大中継 '21・7/4)、右・窓(西側)から陽が差し込む時は夏至となる。

### 「インカの暦法」は次の通り (『インカ帝国』泉 精一著・岩波新書より)

12月 (カパック・ライミ)	壮麗な祭り
1月 (ウチウイ・ポコイ)	みのりの小祭り
2月 (ワツン・ポコイ)	みのりの大祭り
3月 (パウカル・ワライ)	花の衣
4月 (アイリワイ)	若いトウモロコシの踊り
5月 (アイマ・ライミ)	収穫の歌
6月 (インティ・ライミ)	太陽の祭り

7月 (カナ・ワルキス)	土地の浄化
8月 (ヤパキス)	浄化供犠
9月 (コヤ・ライミ)	皇妃の祭り
10月 (アウマ・ライミ)	水の祭り
11月 (アヤマルカ)	死の行列

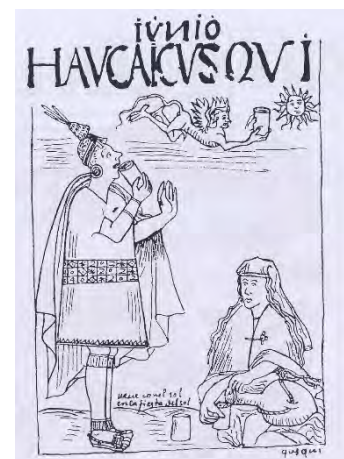
南半球のペルーは、日本と季節が逆になるが、ハッキリとした四季ではなく、乾期が5～10月(乾期が日本の冬に当る)、雨期が11月～4月(日本の夏に当る)2つの季節に分れている。

1年の始まりが、12月(雨期の最盛期)であったのか、6月であったのかについて、疑問は残るが、暦の計算法は月の満ち欠けによる。太陰暦(月の満ち欠けの周期を基にした暦)であったが、実際の季節とのズレを、どの様に修正したかは知られていない。

1年で一番で重要な月は12月(夏至)と6月(冬至)の太陽の祭り(ペルー最大の祭典)が開催される。5月の収穫が終わると、6月に国をあげて太陽の祭りが催される。1カ月間は皇帝から農民まで、全ての人々が豊穰を太陽の神に感謝を捧げる。

太陽の処女たちは「チチャ(トウモロコシ酒)」を聖火に注ぎ、灌漑用水路へ豊富な水流し込む。贅沢な山海の珍味を集まった貴族や庶民に配られ、この月だけは、チチャに酔い痴れ、歌い踊りリヤマの肉をたらふく食べて1年の疲れを忘れるのである。

7月に畑の割り当て、8月に鋤入れ、9月にはトウモロコシの種まき、10月～11月ジャガイモ、の種芋を植え、雨乞いの儀式を行う。未亡人や病人の働き手のない畑は、「プリク=村の青年男子」による共同作業の助けが入るのである。



左・サクサインワマン岩前6月「太陽の祭り」(ペルー旅行ラティーノより) 右・太陽を称えインティ・ライミ(冬至儀式)が盛大に施行され、金・銀を捧げる。『インカ王族の子孫の記録者による挿絵』女澤史恵訳より



インカ帝国の成立ち・・・インカ帝国皇帝は、初代から13人の皇帝が即位したとあるが、初代皇帝のマンコ・カパックをのぞき、12人の皇帝は実在の人物のようである。この系譜から逆算すると、インカ帝国の成立ちは紀元1200年頃と推定され、2代から8代に亘る200余年の間は、まだ小国であってケチュア種族のインカ部族と呼んだほうがふさわしいと思われる。

彼らはクスコを中心とした数十km位の近距離の諸部族との戦闘を交えていたに過ぎなかったが、やがて仇敵のチャンカ族(約1万年前にアンデス地帯の住み着いていた民族)と戦って勝利すると、インカ族は急速に強い軍事力を持ち、他部族の征服を開始した。第9代のパチャクチ皇帝と、皇子のトパ・インカ(第10代皇帝)は、30年程の間にアンデス地帯の大部分を占領し、インカ帝国の版図を確立したのである。

第11代のワイナ・カパックは更に領土を拡張し、100万km<sup>2</sup>(南北距離4千km)に及ぶ大帝国を打ち立てた。カパックの死後間もなく皇位<sup>きんたつ</sup>篡奪の争いが起こり、側妻の子アタワルパの勝利に終わった。が、その同時期に、スペインの探検者フランシスコ・ピエロが、インカの北端ツンベスに上陸していたのである。

インカ帝国皇帝の在位年表

(年代は紀元) 在 位 年 代

皇帝の名前	名前の意味	サルミエントの年代(1572年)	バルボアの年代(1586年)
1・マンコ・カパック	最高にして権力ある族長	565～665	945～1006
2・シンチ・ロカ	力の強い領主	665～675	1006～1083
3・リヨケ・ユパンキ	左ききの賢者	675～786	1083～1161
4・マイタ・カパック	逞しく強力な族長	786～890	1161～1226
5・カパック・ユパンキ	賢い族長	890～980	1226～1306
6・インカ・ロカ	力強く雄々しいインカ	980～1088	1306～1356
7・ヤウル・ワカ	血の涙を流す男	1088・1184	1356～1386
8・「ピラコチャ」(アツン・ツパック・インカ)	色白く高貴なインカ	1184・1285	1386～1438

9・パチャクチ	地震の様に大改革 を行う賢いインカ	1285・1388	1438～1471
10・トパ・インカ	練達の賢者	1388・1455	1471～1493
11・ワイナ・カパック	若い徳望のある族 長	1455・1515	1493～1525
12・ワスカル・インカ	非凡にして朗らか なインカ	1515・1532	1525～1532
13・アタワルパ		1532・1533	1532～1533

※各皇帝の在位期間に不合理な点はある。『インカ帝国』泉 精一著 岩波新書より

インカ帝国皇帝の在位・・・インカ帝国の実年代に関する年代記作者(クロニスタ)の記録は2つしか残っていない。『サルミエント・デ・ガンボア』(スペイン航海者・副王トレドの要請を受けスペイン人のペルー征服の正当化を著す)と『カベーヨ・バルボア』(スペイン人・インカ帝国記録者)のものが残され、インカ帝国の始祖から13代皇帝までの記録となっている。初代マンコ・カパックは、ケチュア語(南アメリカ言語)で「最高にして権力ある族長」と呼ばれ、名声が有るが伝説の人物のようである。スペイン人が侵入した時、首都クスコには、2代から11代までの皇帝のミイラが保存されていたが、初代皇帝の「マンコ・カパック」のものだけは存在していないのである。

インカの一つ目始祖伝説は・・・インカ帝国には2つの始祖伝説が残されている。

クスコから東南に向かって28km離れた所に、「下の宿場」(パカリ・タンブ)という場所があって、そこに「窓の宿場」(タンブ・トコ)と云う3つの穴が地面に開いていた。

その中央の美しい穴から、帝国の創設者たちが湧き上がったのである。両側の穴からインカ帝国の主だった氏族の祖先が湧き出て、中央の穴から現れた者が、マンコ・カパックと3人の兄弟が出て、アルヤ(野生のキノア)・アウカ、アヤル・カチ、アヤル・ウチュと4人の姉妹が出てきて、そして、ママ(母)・オクヨ、ママ・ワコ、ママ・コラ、ママ・ルーナが出て来たのであった。

マンコ・カパックも本来の名は「アルヤ・マンコ」と呼ばれ、8人の同胞は両側の穴から湧き出した後に、10の氏族を曳き従えて、クスコの河谷に向かって移動を開

始した。その旅は数年かかり彼らは道にある村々に1～2年程留まり、2代目の皇帝シンチ・ロカは、旅の途中にマンコ・カパックと、一番年上の妹のママ・オクヨの間に生まれた。アヤル・カチは豪気な男で、他の兄弟に恐れられ、彼はワナカウリの山に登り、山頂から投石器(紐に石を付けた道具P55参照)で石を投げた所に、新しい谷ができた。この時からインカ皇帝の子供たちは、その力を示すために、この山に登らなければならないという、掟が出来たのである。

他の兄弟は、彼を元の穴に引き返させ、秘密のリュマ(ラクダ科)を連れて来るように命じた。そして、後から皆とって返し、カチ(アルヤ)を穴に封じてしまい、人々は今もなお彼がそこに居ると信じている。ウチュはワナカウリ(地名)に留まったが、やがて石に変化して、今では「ワカ」(信仰の神聖な場所)が残っているという。

アウカはクスコに赴いたが、そこで石のワカになってしまった。残ったのは、ただマンコ・カパックだけで、彼とその姉妹達は、尚もクスコの河谷を歩き、黄金の杖で土地を掘り返して見ると、現在のクスコのやや東の方に、肥沃の大地がある事を知り、そこに腰を落ち着ける事にした。当時、谷間には既に多くの住民たちが居た。

しかし、インカは太陽神に依って選ばれた民であり、トウモロコシとリュマのための土地が欲しかった。その地の小さな部族や氏族が攻撃して来たが、彼らを苦も無く追い払った。ある日、男まさりのママ・ワコは投石器で一人の男を殺し、その足を切ったら、周囲の住民は恐れをなして逃げ去った。そこでマンコとその4人の姉妹は、黄金の囲いで最初の宮殿を建てた。その後「太陽の神殿」をその大地に建てた。



※ワカというケチュア語、その語源的な意味は「神聖な神殿」太陽、月、星、雷、奇石、泉水等の奇異な力の場所、即ち「ワカ」(アンデスの神の誕生所)の信仰の対象となる。因って自然の丘、泉水(いずみ)又は石積所は様々のワカが存在する。写真・チチカカ湖遠望(旅行ガイドチチカカ湖より)

チチカカ湖遠景

二つ目の始祖伝説は・・・高原の湖チチカカ湖(ティティカカ湖とも・ボリビア西部に跨る淡水湖)の太陽の島で、マンコ・カパックとその姉妹が、太陽の神に因って生み出された。当時のインディオ達は、野蛮な生活をしていたので、太陽の神は彼らに人間の

生活の仕方を教えるように命じた。マンコは姉妹を伴って、神の教えに従い、黄金の杖を持って旅に出たのである。チチカカ湖から北に向い苦しい旅が続いたが、處がクスコの谷に入って、黄金の杖を地面に投げると、杖はみるみるうちに地中に沈み、太陽の神の言った、豊かな土地に都を作るためにこの土地にやって来たことが分かった。彼らは先ず仮の住居を作り、マンコは住民に農業を教え、姉妹達は織物を教えた。ここに人間の生活が始まるのであった。

### インカ帝国初代皇帝「マンコ・カパック」始祖 170 歳

インカ帝国は13世紀初頭から15世紀に最盛期の帝国となり、ケチュア族の「インカ部族」が打ち立てた帝国、首都クスコ(標高3400m)、アンデス文明を継承し、インカ文化を繁栄させた。挿絵の出で立ちは頭に緑のターバン、金のパラソル姿である。インカ神話に依れば、クスコ王国の初代国王で、出自については複数の諸説がある。マンコは太陽神インティの息子、天の神パチャカマック(カマック=創造者、パチャ=天地)である。その神殿はリマの南東に40km、パチャカマック遺跡にパチャカマ神殿(天地の創造者)がある。西暦



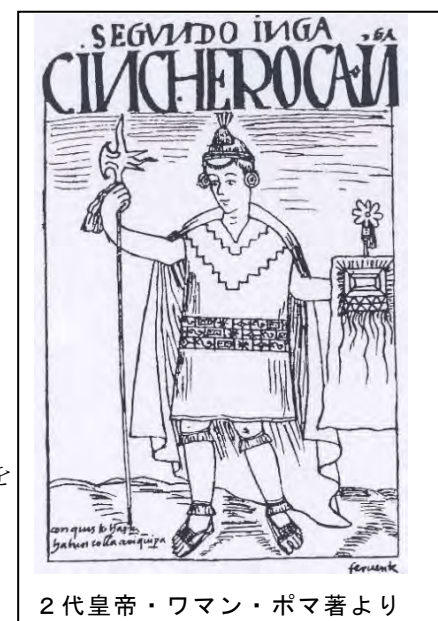
『インカ王族の子孫の記録者による挿絵』ワマン・ポマ著女澤史恵訳

200年頃から崇められた太陽信仰となり、パチャカマ神殿はインカ以前の時代からスペイン征服されるまで栄えた神殿都市であったのである。

### インカ帝国第2代皇帝「シンチ・ロカ」

「力の強い領主」の意で、ケチュア語で勇敢・寛大という意。マンコ・カパックの長男で、実在の人物と云われている。立ち姿は勇敢な顔立ち、肌は褐色、右手に斧槍(先端に斧刃が着く)、左手に楯と石斧を持つ。

彼はクスコの谷に彼の家族と定着したと伝わる。又、谷の土壌を改良するために多量の客土(他所から良い土を入れる)を運び入れ土地を肥沃にした。年代記作者は彼が姉妹と結婚の有無について疑問あるとしている。



2代皇帝・ワマン・ポマ著より

### インカ帝国第3代皇帝 「リョケ・ユパンキ」

「左ききの賢者」の意、<sup>ゆが</sup>歪んだ鼻、大きな目、小さな唇、右手に斧、左手に楯を持ち、頭に王家の記章をつけ醜い顔で悪人とも伝わる。彼はクスコの公設市場を確立し、アクリャワシ(神殿)という「処女の館」を建てたと伝わる。インカ帝国時代には、この施設に帝国全土から処女が集められ、貴族や戦士などの側室として皇帝から下賜されたのである。その他の処女たちは一生を太陽神インティへ信仰を捧げ、儀式用の衣服の織物や、酒(チチャ)の造り手として、館で過ごしたと伝わる。



### インカ帝国第4代皇帝 「マイタ・カパック」

「<sup>たくま</sup>逞しく強力な族長」の意。彼は少年時代から戦闘に優れていた。彼はチチカカ湖など遠方を征服した偉大な戦士と云われるが、彼征服した地域は、クスコ周辺数kmと思われる。彼の皇妃は妹であったか解らない。出で立ちは醜い顔で、痩せていて寒さに弱く、勇敢な性格で財を残した。彼は即位すると、帝国全土を巡行したという。これ以降に、統治地域を歴代の皇帝の大切な行脚行事となって行くのである。



### インカ帝国第5代皇帝 「カパック・ユパンキ」

「賢い族長・血の涙を流す者」の意。彼はアイマラ族やケチュア族の地域まで統治した。武器を持ち、王の象徴する装飾品を頭に被っている。父なる太陽に祝杯(ケロ=黄金のコップ)を挙げ、偶像(祖先神の神々)に崇拜壇前に食物添える事を始めた。彼は長男でなかったが、長男が醜かったので、父が死に際に指名を受ける。彼の治世は短く単純で、クスコ河谷の外に遠征を試みた最初の皇帝となる。征服の範囲は、20km位と推定される。



### インカ帝国第6代皇帝 「インカ・ロカ」

「力強く雄々しいインカ」の意。彼は、大柄で力が強く、多弁で、賭け事が好きな好色家でもあった。息子を可愛がり手をつなぎ連れて歩いた。この時代からインカではコカの葉(葉からコカインが抽出)を噛むようになり、今日でもコカの噛む習慣は残る。彼は近隣部族と戦い、クスコの南方20kmの村々を侵攻した。

彼はクスコの美食を愛し、生来怠け者であったが、3人の皇子を持ち、皇子のチツ・タイシ・ワルパが即位して、ヤワル・ワカ「血の涙を流す男」と名前変えた伝説は残っているのである。



### インカ帝国第7代皇帝 「ヤワル・ワカ」

「血の涙を流す男」の意。彼の母はママ・ミカイ、“美しいニコニコ顔のお母さん”ワイヤカ族の女。彼女は近隣のアヤマルカ族長と結婚する約束があったが、その約束を破ってインカ部族長と結婚した。アヤマルカの族長は怒りの戦争を仕掛けてきたが、逆に族長を敗北させた。

ヤワル・ワカは力が強く大きな目をし、貧しい人々に優しく、音楽を愛し性格は良かった。病気や疫病を予防するために断食と罪の償いを始め、人々の不幸な出来事が早く終わるように、祈祷師に偶像(祖先神)に祈らせ儀式を執り行った。



### インカ帝国第8代皇帝「ビラコチャ」(アツン・ツパック・インカとも呼ばれた)

「色白く高貴なインカ」の意。第8代ヤワル・ワカの息子の中からアツン・ツパック・インカが選ばれた。彼は「ビラコチャ神」(創造の神)という称号で呼ばれ、祖先神を奉り、歴代の皇帝で最も優れた一人であった。彼は最初の帝国主義者、インカ以外の土地と人民を恒久的に支配する計画立案者で、征服した地域に軍人や官吏を置かなかったため、征服地は元に戻っていたが、これ等を組織的なインカ帝国に組み入れた。

彼は晩年を迎えた時、彼よりも有能で、帝国主義意欲に燃えた有能な息子のパチャクチが現れた。

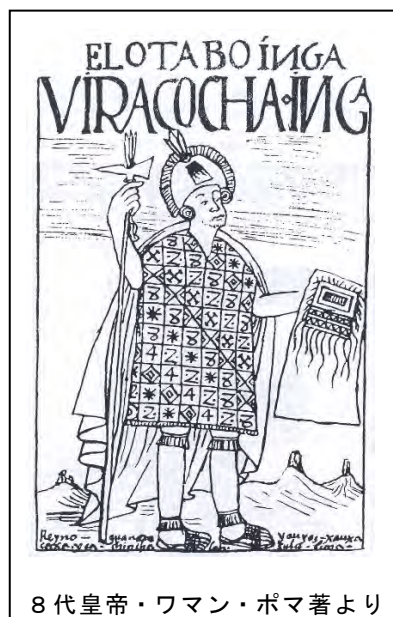
### インカ帝国第9代皇帝 「パチャクチ」

「地震のように大改革を行う賢いインカ」の意。チリまで領土を広げ、アンデス山脈一帯を治めた。この時代のクスコ王国は、年代記作者の説と異なるが、クスコ王国の西に、ケチュア国とチャンカ国の争いが起き、チャンカ国が勝利し、その勢いでチャンカ国が大軍をクスコに進軍して来た。クスコ王国の攻防戦は「投石器」(写真はP55参照)による石が飛び交う激しい戦闘となったが、この戦いはインカの将軍達の渾身の努力に拠ってインカの勝利に終わり、チャンカ国は滅亡した。

パチャクチは即位と同時に荒廃したクスコ街を再建し、彼は王国の権威の象徴として、国租マンコ・カパック宮殿と、太陽の神殿(コリカンチャ=黄金の場所)や、サクサイワマン<sup>とりで</sup>砦も建造した。「マチュピチュ遺跡」も彼の時代とかさなり、7代に亘る祖先ミイラを安置(埋葬)する事を僧侶に守護を命じた。近年の研究では、祭祀を司る王族が皇帝であるが、パチャクチ以降の皇帝は体制変革の帝国になって行く。彼は大柄でライオン様な目つきで大飲食家で戦好き、何時も勝利を収めて帰り、絵は右手に黄金の石投器持ち、太陽の神殿宮殿を建造した。

### インカ帝国第10代皇帝 「トパ・インカ」

「練達の賢者」の意。トウパック・インカ・ユパンキとも。父は9代パチャクチ、子に11代ワイナ・カパックがいる。パチャクチは33年在位後、紀元1471年に皇位をトパ・インカに譲る。9代皇帝のインカ国の版図は面積にして約1千倍に拡張した。進軍するインカ軍は、まず南方のプカラの山地を占領、更にチチカカ湖南岸のパカサとルバカとの戦いにも勝利し、南のチリ国のマウレ河畔に進出、彼はここを帝



8代皇帝・ワマン・ポマ著より



9代皇帝・ワマン・ポマ著より

『インカ王族の子孫の記録者  
による挿絵』・ワマン・ポマ著  
女澤史恵訳より

国の南の果てと決めた。その決断はアラウカニ・インディオ(拙著『中南米で事業を興して成功しペルーに天野博物館を開設した男』第2章「南米史話アラウカノ族の如く」参照)の抵抗がインカ軍を阻止し、アラウカニの勇敢な部族で、スペイン人の植民地後も、1883年までも抵抗を続けた戦闘民族であった。彼の軍事活動はこの地で進軍を止めた。彼はクスコ街を守る防塞「サクサワマン砦」(石積の延長は360m 3万人石工が80余年の建造物)を建造している。彼は帝国統治組織強化の手腕を揮い、



「クラカ」(貴族管理役人創設)や、男女の生産確保の「ヤナコーナ」(青年徴用制)、「アクヤコーナ」(処女の徴用制)等を制定した。彼は85歳の長寿で、2人の嫡出皇子、側室の子に男80人、女30人がいたと伝わる。

#### インカ帝国第11代皇帝「**ワイナ・カパック**」(サパ・インカ=君主号)

「若い徳望ある族長」の意。彼の治世は長くその間にインカ帝国の版図は最大に達し、彼は父親のような大征服者でなかったが、この時代征服すべく地域(他族)がなかったが、南方(チリの北)はアラウカニ(スペイン軍に19世紀末迄で抵抗した部族)族によって前進を阻まれた。



東方面の密林地帯は未開のインディオが居たが、異種の文化生活を持つため侵攻出来なかった。この時期にペルー北方のキット(エクアドル)から飛脚(チャスキ)が反乱の情報が入った。皇帝は大軍を集結して2人の妾腹の息子と共に北方へ進軍した。2人の内の一人がインカ帝国最後の皇帝になるアタワルパであった。

エクワドルのバスト族と戦ったが容易に勝利が出来なかった。更に北方のカャンビ(エクワドル東北のカラカ諸部族)は城塞を造り抵抗したので、インカ軍は大苦戦の状況に陥り、皇帝自身も棍棒(武器)で叩かれ捕虜寸前であった。しかしながら、皇帝ワイナは迂回部隊を城塞の背後に回り込み、キャンビ族の要塞は背後が弱かったので陥落となってしまった。



ワイナ・カパックの死の直前の 1523 年に、ボリビア国境線に白い肌の人間たちが、スペイン人(フランシスコ・ピサロ、P 5 1 地図参照)が黄金を求めてなだれ込んで来たが、その情報を皇帝は得ていなかった。彼はエクワドルのキト(現エクアドルの首都)が好で、この地で過ごし、ワイナ・カパックはキトで死去(瘡瘡説)した。彼には 2 人の秀れた息子がいて、一人は皇妃(コヤ)と、正統の跡取り息子「ワスカル」と、もう一人は側妻の子「アタワルパ」が居たのである。

クスコはワスカルが治めたが、アタワルパが治める関係にあったので、この関係がインカ帝国の抗争分裂をきたし、第 1 2 代インカ皇帝の正当な後継者であるワスカル軍は、キト(現エクアドル首都)のアタワルパ軍と、リオ・タンボ(アンデス山脈東側)で激突した。戦闘の結果は、キトの皇帝の戦闘経験豊かな將軍隊を受け継いだアタワルパが勝利し、やがてワスカルは捕虜となり、クスコ軍は降伏した。キスキス(アタワルパ軍名將)は、クスコの主だった將軍、僧侶、貴族を捕えて石打の刑で殺害した。アタワルパは今や堂々の第 1 3 代インカ皇帝となったのである。アタワルパはこれより貴族となり、自信過剰と残忍性を帯び、年代記作者のサルミエントは次のように語る。

《「或る日、アタワルパは老僧に将来を占ってもらった。ところが凶で何か恐ろしい事が襲って来るに違いない」と占いに出了と、王に伝えた。》この言葉にアタワルパは激怒して僧侶の首を刎ねた。この時、現在ペルーの北のツンベス(トゥンベスのスペイン語・P 51 地図参照)に白い人間が、雷(鉄砲)を持ち、半獣半人の戦士(騎馬兵)が上陸したという情報を受けたが、皇帝アタワルパとインカ帝国軍は緊急の危機が迫っている事情とは誰も解らず、その緊迫状況は 1532 年 7 月の事であった。

### インカ帝国第 1 2 皇帝 「ワスカル・インカ」

「非凡して朗かなインカ」の意。父帝ワイナ・カパックは、ワスカルが首都クスコ中心に帝国の大半地域(コヤ・スウユ、アンティ・スウユ、クンティ・スウユ)を支配するサパ・インカ(皇帝)に、異母兄弟のアタワルパを第 2 の首都、キトを含む北部(チンチャ・スウユ)の総督(皇帝)を想定していたが、上記の如くアタワルパの勝利で終了し、部將キスキスに送られワスカルは処刑



された。彼は11代ワイナ・カパックの妹を正妻としていたが、捕えられて紐<sup>ひも</sup>で縛られて連行され、絵図の如くとらわれの姿となる。そして、クスコのアンダマルカ河に突き落とされたと伝わっている。

### インカ帝国第13代皇帝 「アタワルパ」 幸福な鶏(にわとり)の意

インカ帝国最後の皇帝。ワスカルは11代ワイナ・カパックの妹を正妻との間の子で、自らが正統なサパ・インカであると考え、アタワルパに自分への忠誠を誓うよう要求。これをアタワルパが拒否して、内戦が始まり戦いの始めは帝国の大半を押さえたワスカル軍が戦況有利に動き、ワスカル軍にアタワルパは捕えられトキに幽閉されたが、ある少女の助けによって脱走に成功した。彼はトキ軍のチャルクチマ將軍とキスキス將軍と合流させ、キペペの戦いでワスカル軍を破り自身による、第13代インカ皇帝を宣言した。第13代皇帝の歌言葉に、

「余の許<sup>ゆる</sup>しなくして、鳥一羽とべず

木葉一枚そよぐこともできない」とある。



13代皇帝・『インカ帝国』

泉 精一著より

### アタワルパと皇帝軍はスペイン軍の行動情報を何処まで理解していたのか

13代皇帝アタワルパに進言された情報は、西の海から風に乗ってやって来た肌の白い人間を、出逢った地域のインディオたちは、その人間を「ビラコッチャ」(インカの最重要神)であると報告をした。彼らは銀の足(馬の蹄鉄)をした、大きな羊(馬)の背に乗り、天上まで響くわたるイリヤパ(雷と理解・火縄銃)発してやって来たのである。

「ビラコッチャ」とは、インカ民族の創造神、太陽神と並ぶ神であり、神話では無秩序だったアンデス地方の人々の生活様式を教え、慈愛・親愛を説き、ビラコチャ神は人々に農作・灌漑<sup>かんがい</sup>・家畜の飼い方も教え、行く先々で数多の病人をも治療する神で、その容姿は白人のあご鬚<sup>ひげ</sup>をはやし、大柄な男と伝わっていたのであった。

その様相<sup>ようそう</sup>は、ナスカ地方の村で見慣れぬ白人に恐れた村人が、石を投げると不思議な武器を使いこの場を凌いでいた。その後、ビラコチャは海中へ泡へと消えたのであった。この事情からインディオ達はこの人間をビラコチャ(海の泡)と呼んだ。正式名

は「アプ・コン・ティキ・ウイラ・コチャ神」、神話では「ビラコッチャは海上へ去り、再び海から戻って来る」という伝説が生まれていた。

情報を受けたインカ皇帝たちは、それが真実なら、創造神ビラコッチャに違いないと思ったのである。ビラコッチャが帰って来たと、インカ民もインカ軍も、皆そう思い、アタワルパ皇帝は自分を助けるために再来したビラコチャ神であると確信したのであった。しかし、インカ大帝国を一朝にして蹂躪したスペイン軍の征服者、フランシスコ・ピサロ軍だとインカの人々は誰一人として想像が出来なかったのである。

スペイン軍がインカ領土に侵攻の経緯とビラコチャと呼んだ理由は・・・『インカの反乱』被征服者の声、ティトウ・クシ・ユバンギ述・染田秀藤訳から拝見する。

「・・・インカ軍がスペイン人のペルー領土に足を踏み入れた事を知ったのは、カハマルカから20レグア(約100km・P51地図参照)ほど離れた南の海(太平洋・P51地図)に面した、インディオのタリヤン人(現ピウラ及びトゥンベスの住民)であった。

そのタリヤン人の口からスペイン人の到来は、ビラコチャ(万物の創造主・正式にはテクシ・ビラコチャン、万物の源の意)の様だと言った。インディオたちの話では、「銀の足を持つ巨大な獣に乗っている」と。銀の足とは、陽映えて輝く蹄鉄の事であり、インディオが彼らの事をビラコチャと呼んだのは、さながら話し相手が居るかの様に、手に白い布切れを持ち、独り言を呟っている姿を目撃したからである。実はそれは、スペイン人が書物や地図を見ていた様子だったのである。ビラコチャと呼んだ理由には、「威風堂々としていた」、「容貌が立派であった」そして「黒いあごひげ」や「赤いひげ」の形相のいで立ちであった。又、その人たちは、銀の食器で食事をするのを目撃され、更に、彼らが「イリヤバ」を持っていたからである。イリヤバとは、「雷鳴」のことで、土民がイリヤバと言っているのは実は「火縄銃」の事で、土民たちは、火縄銃を天に轟く雷鳴だと思ったからである。>

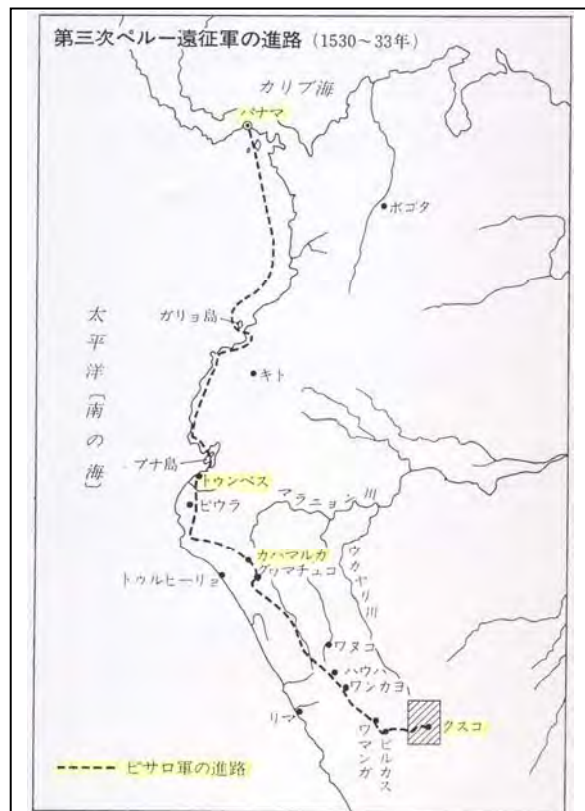
迫るピサロ軍の進攻計画の概要・・・海からやって来た「ビラコッチャ神軍」に、アタワルパはその様子に苦慮し、10頭のリヤマと極上のチチャ酒(クチカミ酒)とケロ(黄金のコップ)を持たせてピサロに送った。ピサロはインカ軍の監視下に置かれている状態を理解し、ピサロは通訳を通じて、「贈物に感謝します。私は海の彼方のスペイン

という世界で一番強い国から、アタワルパ皇帝にお目に掛かりに来ました。皇帝の名前は、世界中に知れ渡わっているのに、スペインの皇帝は是非、陛下に御協力したいと申しております。なるべく早く面接の機会を得たいと思って居ります」と伝えた。

これは大きな陰謀の前奏曲であったのであるが、だが、アタワルパはピサロの言葉の真意が掴めなかったのである。

これより先、1529年にピサロは、数人のインディオと、3頭リヤマ、金銀細工品を持参してスペインに帰国していた。そして、スペイン・カルロス5世国王に会い、インカ帝国を征服する特約の覚書を交していた。

インカ帝国征服が正式に決まり、ピサロはスペイン軍の総督兼司令長官に任ぜられていたのである。その時ピサロはアステカ帝国(メキシコ・メソアメリカ)征服者コルテス将軍から、重要な<sup>㊟</sup>征服作戦のインカ侵攻計画の作戦指導を受けていたのである。



『インカの反乱』 染田秀藤訳・岩波文庫より

<sup>㊟</sup>指導とは「王を捕まえれば我が方の軍勝ちだ、王を野放しにすれば、彼らは最後の一人まで戦うだろう」と、コルテスのインカ帝国征服作戦を伝授された。この時ピサロはインカ帝国攻略の行程計画はこれで決まっていたのであった。

ペルー国北部のカハマルカの町へ・・・1532年11月15日、ピサロは歩兵110人、騎兵76人、火縄銃13挺、弩20張(いしゆみ、おおゆみ・古代中国秦代の伝来。次頁参照)の兵力装備を持ち、カハマルカの町(地図参照・北部太平洋から約120km)に入城したのである。そして、ピサロの使節者はピサロの書状を、通訳がケチュア語でアタワルパに向かって読み上げた内容は「我らはキリスト教を広める平和使節である」と伝えた。

余裕のあるアタワルパは、明日、答礼にスペイン軍の陣営を訪問すると告げた。当日、早朝にピサロは全員をカハマルカの広場に集め、本日アタワルパ皇帝が我軍を訪問するが、交渉次第では一戦交える事もあると告げ、歩兵を広場の周囲と建物中に騎

兵を2隊に分け、木の陰に火縄銃と弩は町の辻角や未透視のきく所へ配置した。アタワルパ皇帝は「黄金の玉座」に座り、太陽の光に玉座は輝き、玉座の後ろには、美女と4千人従者(人数に多説有り)を従えて静々と城内に入って来た。その時玉座の前に進み出たドミンゴ教会修道士ビセンテ・デ・バルベルデは、手に聖書と十字架を持ちアタワルパにキリスト教に帰依するよう強要した。修道士は聖書を差し出したが、アタワルパは怒り聖書の数枚を破り地上に棄てた。

この瞬間に、「サンティアゴ」(聖ヤコブ)の合図と共に火器は火を噴き、インカ従者衆に一斉射撃を加えた。突撃ラッパの合図と共に騎兵も歩兵も飛込みで斬りかかり、平和なカハマルカ広場は一瞬にして殺戮の場になったのである。

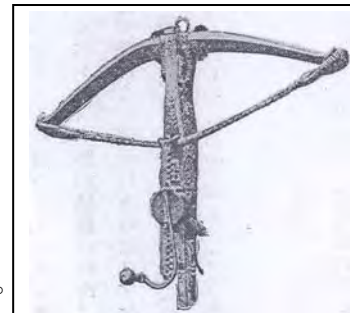
インカ従者たちは素手で戦い、やがてアタワルパは頭髪を掴まれ引き倒され捕虜になってしまった。戦いは日没と共におさまり、その夜、ピサロは何気ない顔して、アタワルパを晚餐に招待し、皇帝に問いかけた。「貴方(皇帝)の神よりも、私(スペイン)の神の方が強かったですね」と、皇帝は「太陽の神は、必要な時に助けてくれなかった・・・」と呟いたという。

カハマルカ街の暗い石部屋に幽閉されたアタワルパは、名案を考えてピサロに告げた。「この部屋一杯の金銀を与えるから朕を釈放してくれないか」と申し出たのである。

ピサロは皇帝に喜び承知したかの様に見せかけた。その火急伝令は皇帝のチャスキ(飛脚)を全土に走らせ「金銀を至急集めよ」の伝令を隈無く(余す所なく)伝えたのである。

命令はやがて全土から続々と、カハマルカの町にキープ(結縄=結び目や紐の情報伝達)と共に、金銀が運ばれて来たのである。

金銀は見る見るうちに石部屋一杯になりピサロはそこで考えた。アタワルパを釈放したら、インカ帝国軍は再編成されスペイン軍に向かって襲い掛かって来るだろうと。そうならば、ピサロは早くアタワルパを早く殺す計画を考え、ピサロは形ばかり



バリエスタ(大航海時代叢書1より)「いしゆみ=弩弓は古代ルーモ人に遡る。4世紀西洋に伝わり改良されバリエスタの兵器とな



1533年カハマルカで処刑されたアタワルパ皇帝・アートプリントより

の裁判を開き、皇位の篡奪(実権を奪う)を狙い、その刑罰の立証は、偶像崇拜、反乱の使噓(悪事)、近結婚=姉妹との結婚等々の強姦罪の名等を与え、火炙りの刑の判決を下したのである。

皇帝は何故に自分は処刑されなければならないのか、と、猛抗議をしたが、ピサロからは、どうしても助命させない事が判ってきた。そして、司教はアタワルパに改宗に応じ応じるように諭して来たが、インカ帝国の文化に於いては、火炙りの刑を受ければ、靈魂はこの世に生き帰らず、来世にも生きられず、この天上天下に生まれ変わることは絶対に出来ない文化であり、それは埋葬もされない皇帝となるのである。

苦渋のアタワルパ皇帝は、1533年8月29日、「フランシスコ」というキリスト教の洗礼名を受け、形式上は絞首刑となった。そして、身代金の集められた金銀額は現在の金額で30億(150億とも)余、クスコの街で掠奪した額も30億余、驚くべき額となる。この事件はスペイン人が行った最大の罪悪行為であり、アンデス文明を破壊したが、インカの文化は死ななかつたと、泉精一先生は『インカ帝国』で述べている。



左アタワルパの火刑 右皇帝幽閉小部屋、身代金の小部屋幅4m×奥行7m(左右は『ウィキペディア』より)

フランシスコ・ピサロの出自・・・スペイン国のエストラマドゥーラ州ツルヒーヨで生まれ、出生日付ははっきりしないが、1471年頃とされる。彼は私生児で、父はゴンサーロ・ピサロといい、歩兵大佐で、母はフランシスカ・ゴンサーレスというツルヒーヨの町の売笑婦であったという。幼少時の伝説に、教会の前に棄てられたとか、牝豚から乳を貰って成長したとかいう話は残る。どの様な経路を辿ったか明らかでないが、39歳の時(1510年)に新大陸(南アメリカ大陸)へ渡っている。紆余曲折の17年後、1527年の2~4月頃に、インカ帝国の情報を入手し、パナマのインディオの通訳から、「遙か東に強大な国があつて、都には黄金が満ち満ちている」と知らされた。

処が数年前に南方の地に更に強い国の軍隊が来てこの国を占領してしまった。このことは、ワイナ・カパック(第11代皇帝)のキト(現エクワルド)攻略の物語になろう。

1532年1月、ピサロ軍はパナマを出港し、スペイン軍総司令官となり、黄金と銀の一切の財宝を掠奪する権利を持っていた。そして、軍隊に抵抗するインディオたちを抹殺する権利も同時に持っていた。既に述べたようにメキシコの征服者コルテスから、「王を捕まえれば勝ちだ。もし王を野放しにしておけば、彼らは最後一人にいたるまで戦うだろう」と、征服実践学を教授されていた。ピサロは堂々とツンベス(現トゥンベス・P51地図)に上陸し、同年11月15日カハマルカの町に入城した経緯となる。

アタワルパ皇帝の入場場面の確認・・・今一度この襲われた広場を検証すれば、皇帝は金の玉座に腰を下し、400人の高官を従え、5000人の従者と美女を従え、宝石を散りばめた王冠、緋(濃い紅色)のターバンを巻いて現れ、広場に入るとラッパが鳴り響き、ドミニコ会のビセンテ・デ・バルベルデが皇帝の前に進み出て聖書と十字架を持ち、皇帝にキリスト教に帰依を強要し、修道僧に再度帰依を進められ、皇帝は怒って聖書を破り地面に棄てた。この瞬間、一発の銃声を合図に広場の火器が一斉に火を噴き、平和なカハマルカの広場は殺戮の場となったのである。



左アタワルパの処刑、十字架を手にするアタワルパの刑罰。(ポマの『新しい記録と良き統治』より)

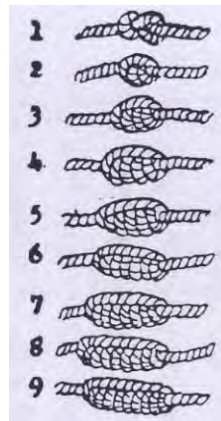
中フランシスコ・ピサロ 1470~1541年(『マチュピチュ探検記』青土社)

右後にピサロはアルマグロ(ピサロの仲間)の息子にリマで殺害される。ピサロとアルマグロはペルーのトキ、ツンベス、カハマルカで黄金の掠奪部隊を結成する。ペルーからチリまで侵攻した。

<sup>とうせきき</sup>**投石器**・・・片手で握れる程度の石を遠投する紐状の投石器は敵や害獣を追い払いに使用した。スリング、投石具、投石紐とも云う。アルパカの毛糸で編んだ投石器（ワラカ）もある。先住民たちの戦いは、この投石器が中心となっていた。



「キーブ」はインカ帝国各地域への連絡・情報伝達に使用した・・・



左「キーブ」情報伝達紐・紐の結び紐の色、紐の結び癖で1、10、100～十進法を用いる(天野博物館より)  
中縄結び1～9まで表す(『インカ帝国』) 右インカの飛脚「チャスキ」ワマン・ポマ挿絵より

スペインによる占領政策・・・アタワルパ皇帝の死後、スペイン王室に依って任命された総督は、数千年に亘って築き上げたアンデスの文明と、文化を破壊させる事に躊躇ちゅうちよしなかった。彼らの植民地政策の根本をなすものは、掠奪りやくだつと商業的利益のみ追求が求められた。

アンデスの住民の蓄財を奪い、次に国土からの銀の鉱山に目を付け、その開発に必要な労働力を確保するために、スペイン王室は功労者や貴族の植民者に、労働者を無償で与えた割当わりあての奴隷集団を「レバルチミアン」と呼び、そのインディオ割当所有者を「エンコメンデエロ」といい、制度を「エンコミエンダ」(植民地住民支配制度・キリスト教徒に改宗させる目的の義務を持つ)と呼んだ。現実にはインディオたちを改宗させず銀鉱山に送り、十分な食料を与えず激しい労働に使役した。

その結果、1574年までの42年後には、インディオの人口は50～75%に激減(疫病含む)したと伝える。(『インカ帝国』「VII血ぬられた山脈」岩波新書より)



インカ征服後の原住民の人口の推移は・・・1530年、即ちスペイン人侵略直前のペルー人口は、中南米大地に約1600万人の人が住んでいたが、その18年後の1548年には825万人と半減し、1570年には274万人まで減少した。その後17世紀には幾らか持ち直したが、18世紀に入り人口減は続き、1796年には、約108万の人口になってしまった。これら数字程、スペイン人がインディオ民に与えた災厄<sup>さいやく</sup>を物語るものはない。

スペイン人はインカ征服後も、更なる金銀黄金郷を求めて、インディオを動員させ、荷担ぎ運搬に酷使し、そのインディオ民の大部分を死滅させたのである。それに輪をかけたのが、旧大陸から持ち込まれた病原菌やウイルスに、インディオ民は疫病免疫もなく、天然痘、麻疹、ジフテリア、マラリア、腸チフス、コレラ等々に多くの人々を死に追いやったのである。

スペイン人がインカ領土の管理をすると、スペイン王国にとって都合よい政策統治が開始され、その過程は「エンコミエンダ」という制度で、一定地域内の現地住民を管理委託し、キリスト教教育と保護を任せるかわりに、彼らから税金を取り立て、鉱山等で使役する事を認める制度を、国王側から認可を与えられていた。これ等のインディオの使役は、土民を奴隷同然の銀山労働に使役した。その最たるものは、1545年ボリビア高地(当時はペルー領内)で発見された「ポトシ銀鉱山」であったのである。

**ポトシ銀山**・・・発見されたポトシ銀山は、当初はなかなか生産コストが安価ならず、生産工程に悩んでいたが、1563年、リマの近郊で発見された、ウアンカベリカの水銀(東南東250kmアンデス山脈中ワンカベリカ川中流)が使われた。この銀鉱山の水銀技法は「水銀アマルガム法」(銀鉱石を砕石に、粉末して水銀と混ぜ水銀アマルガムを作り、それを熱して銀を得る方法)が普及した。その行程は銀鉱石と水銀を採掘工場に運搬し、精錬所を作り、水車を動かす水を得るためにダムを作るといった、銀生産工程の流れの開発に成功したのである。

ポトシ銀山にはインディオ(1万2千人が採掘に従事・最盛期は16万人)の労働力を使役し、銀の大量生産に成功したのである。新大陸の銀は「スペイン銀」(メキシコ銀)と呼ばれ、スペイン銀貨となり、ヨーロッパ、東南アジアに広まり、日本へも達していたのである。

その後、スペインはフィリピンのマニラに拠点をつくり、メキシコのアカプルコを

結ぶ「ガレオン貿易」(1572～1815年スペインはガレオン船でアカプルコとマニラの太平洋貿易開設、新大陸から銀を東南アジア輸送)を開設したのである。東アジア、中国、日本等へ東アジア貿易の銀資金なっていく。

しかしながら、「水銀アマルガム法」を「ミタ労働」(16の地区の18～50歳までの男子を1年交代で働かせる制度)は、やがて鉱山過酷な労働使役は、粉塵の吸引きゅういんによることによって、水銀中毒者が多くの命を落したのである。ポトシ銀山は「地獄の入口」「インディオの墓場」と云われ、生産する銀はインディオの血と汗の結晶であると、歴史学者は指摘している。「ポトシ銀山」については第4章P79～81で再度述べることにする。

キリスト教布教に付いて・・・キリスト教布教と植民地行政政策は、スペイン国王による1501年～08年、ローマ教皇大勅書ちよくしよ(教皇が出す勅令書)によって、新大陸における広汎な教会指揮権こうはんを与えられており、聖職者の叙任、教区の設定、聖職録等を決定する事ができた。

布教は国王の植民地行政の一翼を担うものとして構想され実行されるのであるが、町での布教は、在地司祭の宗教活動はリマ(首都)を中心行われていた。布教には農村や高地の農民たちが、素直に布教を受けずに困難がともなった。それは、うわべでは改宗したように見せ掛けて土民たちは「土着宗教」を根強く守っていた。

1608年、リマ南東部のワロチリ地方で、土民たちの偶像崇拝が発見された以後、偶像崇拝撲滅運動が始まり、偶像信仰は禁止されていたのであるが、インディオたちの頑強に抵抗する伝統的宗教に付き、教会側も手を焼き禁止運動を中断した。その結果、アンデス高地の農民の間には、今日までも土着宗教の慣行が残っているのである。

(『ペルー太平洋とアンデスの国』増田義郎/柳田利夫著より)

※・第1～2章の参考文献。

『インカ帝国』泉 精一・岩波新書/『インカ黄金帝国』ハイラム・ビンガム他・浜 洋訳・大陸書房/『泉 精一著作集4・アンデスの古代文化』読売新聞社/『インカの反乱』ティトウ・クシ・ユパンギ述・染田秀藤訳/『アンデス・シャーマンとの対話』実松克義著/『太陽の道』V.W.フォン・ハーゲン・勝又茂幸訳/『古代アンデス・神殿から始まる文明』大貫・加藤・関二編/『アンデスの記録者ワマン・ポマ』染田・友枝訳/『マチュピチュに村を創った日本人』野内セサル・稲村編/『ラテン・アメリカを知る辞典』。

★新情報からインカ帝国最後の都市を観てゆく



インカ帝国最後首都・現在の「エスピリトゥ・パンパ遺跡」が、「ビルカバンバ」で、1572年までトゥバック・アマルが処刑されるまでここが首都であった。BS-TBS「大沢たかお・インカ帝国隠された真実に迫る」の番組を見て大変感動した。写真はテレビ画像より撮りました。



エスピリトゥ・パンパの遺跡(ビルカバンバ)



同遺跡、14の窓の神殿より次頁の陶器が出土し、ビルカバンバは都クスコから500 km離れた山奥あったのである。その遺跡より陶磁器が発見されものが、次頁の写真となる。

### 発掘された陶器の絵柄に「馬とスペイン人兵士」あるではないか

ビルカバンバの歴史が描かれている。正面に「馬とスペイン人兵士」が描かれており、筆者が思う事は、「インカには文字がないと云われるが、スペイン軍に最後まで、抵抗を続けた、インカの人々の口伝(考証)の証<sup>あかし</sup>が描かれているではないか」。今迄に見てきたアンデス文化の土器の絵柄は、アンデス文明の神の化身ばかりではなく、絵柄によって、スペイン軍への抵抗し続けた実情が伝わり、征服記録の経緯が残され、伝承が生きていることが見られるではないか。



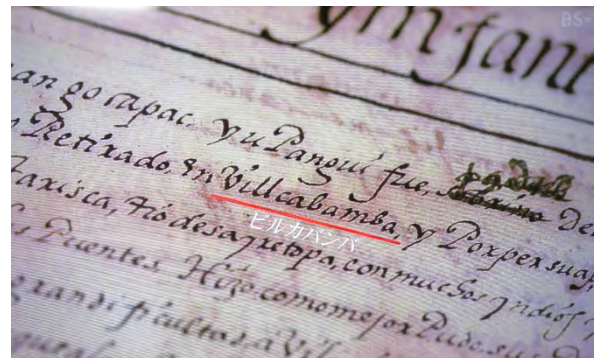
陶器の絵柄は馬とスペイン兵が描かれている



拡大した絵柄



「ナショナル ジオグラフィック」(1913年)



『ナショナルジオグラフィック』創刊 1888 年、地理学・人類学・自然・環境学・歴史等の記事を掲載

## 山形大学からの新情報「インカ帝国最後の都ビルカバンバの景観構造」より

《ビルカバンバの主要建物の一つ、「太陽の神殿」について、興味深い事実が明らかになった。ビルカバンバの地図と周囲の景観を検討した結果、この神殿は「中央広場」から「聖なる山(インカ王の妻と同一視される山)を望んだ方向に存在することが判明した。更に、旧都クスコの太陽神殿から見た、冬至の日没方向上に、ビルカバンバの太陽神殿が存在することも分かった。クスコの太陽神殿は、周囲に300ヶ所以上の礼拝所を、放射状に配した中心的な存在であったので、ビルカバンバでも太陽神殿が中心的な役割を果たした可能性が高い。太陽はインカ王の祖先に比定される存在であり、太陽の祭りは冬至に実施されたもので、冬至の日没方向上に太陽神殿を建設することで、ビルカバンバに遷都したインカは新都の正統性を効果的に演出したと考えられる。

このことは、インカ社会において文字は発明されなかったが、特定の情報を組み込んだ景観を形成することによって、情報が物質化されていたことを示す。この物質化によって、そこに組み込まれた情報は繰り返し参照することが可能となった。

また、その情報は言語と対応していないため、多言語国家であったインカにおいて情報伝達の媒体として有効な存在として認知されていたと考えられる。》(KAKEN・2007年度実績報告書「インカ帝国最後の都ビルカバンバの景観構造」山形大学人文学部研究より)

## 探検家ハイラム・ビンガム3世はビルカバンバの地を調査に訪れている

ビンガムはビルカバンバ遺跡を調査したが、マチュピチュ遺跡こそが「ビルカバンバ」であると結論に至り、マチュピチュへ移動して調査の経緯となる。後、地元の歴史家の調査結果、このビルカバンバの地が、最後のインカ国の終焉の地と判明した。インカ兵士軍の記録も発見し、エスピリトゥ・パンパは、ビルカバンバ遺跡と記録が一致し、インカ帝国最後の王はビルカバンバの地に身を隠していたことが判った。



マチュピチュのフレイムと題で「古代インカの首都の遺跡」とある  
1913年・礼儀  
jbcarey.net より

### 第3章 インカ帝国の残影・城砦・ワカ(聖地)を視る

サクサイワマン=ケチュア語で満腹のハヤブサの意・・・インカの遺跡での目的は城砦(城塞と宗教施設がその双方を兼ね備えた建造物・諸説有り)この遺跡は、9代皇帝パチャクチの時代から始まり、10代皇帝トゥパック・ユパンキが完成したと伝える。遺跡の石組は巧みにデザインされ、リヤマ、ヘビ、カモ、魚等の動物を象(形をまねる)箇所もある。かつては東西に並ぶ3つの巨大な塔が建っていたが、スペイン人の侵略によって悉く破壊されたが、現在はその石の基礎のみが残っている。



左クスコ(臍)・クスコの都市「サクサイワマン城砦跡」最大360t巨石、壁面の長さ360m、3万人の石工人で約80年を要した。(2005年3月筆者) 右クスコ街の12角石(ぶろぐ村ランキングより)

モライ考古学遺跡群は高低地の農産物研究所であった(アンデネス=段々畑)



左・モライ遺跡(写真で見る世界の様子ペルー帝国書院)ケチュア語「下にある円形」の意。右・拡大、トウモロコシ、ジャガイモの農業実験場。アンデネス(段々畑)山の頂きから谷底までを覆いつくす。

アンデネス・・・山岳民族の農耕の歴史を強く思わせる遺跡となる。熱帯気候に属するペルーでは、古来より高地に様々な作物が作られ、標高2000~3000mでは、トウモロコシや豆類を栽培し、3000mを超える場所では多種多様なジャガイモが栽培されている。インカ帝国による領土拡大と共に膨れ上がる人口を支えるため、農作物の収穫量

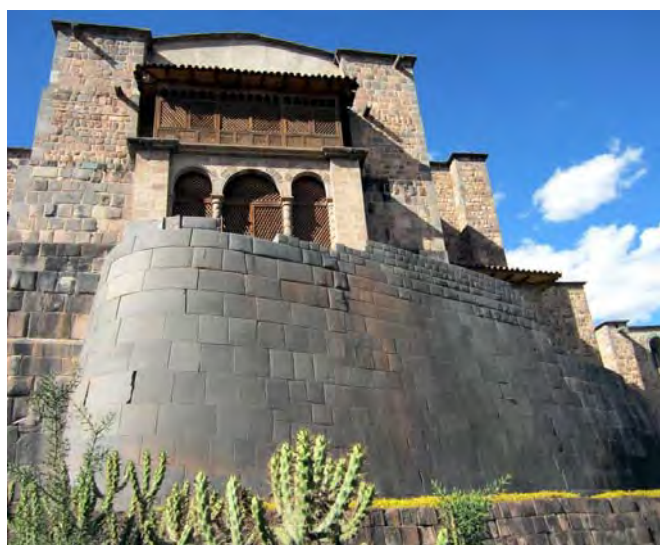
を増産の必要があった。現代にも通じる農業専門の研究試験場になっている事に現代人は驚くのである。（インカの農業実験場「モライ遺跡」・ガイド通信より）

**ワカのタンポ・マチャイ・聖なる泉**（クスコの郊外の「ワカ」は神聖場所=神やどる）



左・スペイン語の「タンポマチャイ」はケチュア語の「宿泊施設・休息所」の意で「聖なる泉」と呼ぶ、聖泉のワカの信仰=インカ時代以前から神聖所となる、奇跡の泉源は現代でも枯れることはない。

**インカの首都クスコに太陽神殿の基礎石上に教会が建っている・・・右・現在のサント・ドミンゴ教会の基礎石部は、「太陽寺院の跡」の基礎部分の上に建造られている。地震で教会部分は崩れたが、インカ時代の基礎石はビクともしなかったという。左・写真は、天野芳太郎氏がクスコで撮ったものである。（拙著・電子書籍『中南米で事業を興して成功しペルーに天野博物館を開設した男』参照）**



左サント・ドミンゴ教会「太陽寺院の跡」天野芳太郎氏が撮影。出典『あちら・こちら物語』<sup>チリ</sup>智利國・天野芳太郎・誠文堂新光社・昭和11年 右コリカンチャ・太陽神殿、旅行提案サービス Tavitt より

右の「太陽神殿」写真は・・・インカ帝国時代の太陽信仰を司る宮殿となる。「コリ」とは「黄金」の意、「カンチャ」とは「居所」の意。コリカンチャはインカ時代には各地に建造されが、その中で、クスコのサンド・ドミンゴ教会にあるものが、現存するもので最も古く有名である。建造当時は金の板で神殿全体に装飾が施され豪華でしたが、スペイン人の征服に後に、<sup>きんぱん</sup>金板は略奪されてしまった。今日でも、精密に組み立てられた石垣に、当時のインカ帝国の石工技術力の高さを見ることができる。

マチュピチュ遺跡の謎を覗く・・・マチュピチュ遺跡は15～16世紀始め頃のインカ帝国時代の遺跡となる。アンデス山麓<sup>さんろく</sup>のウルハンバ谷に沿って、山の尾根<sup>つた</sup>伝いに、標高2430mの所にある。クスコの街の方が高く標高3400mとなっている。

1911年7月24日、合衆国エール大学を卒業するとすぐ「ハイラム・ビンガム」がマチュピチュ遺跡を発見した。これはアンデス文明の考古学史上の劇的な発見となっているのである。この遺跡の背後に見える尖った山は、ワイナ・ピチュ=若い峰は、2720mが聳え立ち、山腹には太陽の神殿、月の神殿が、遺跡の面積は約13km<sup>2</sup>、石の建物200戸の基礎石が数えられる。

ハイラム・ビンガムが、1900年7月に地域のインカ古道を探索していた時、現地の案内のインディオ指示で、この遺跡を発見することができた。この遺跡は実に400余年もひっそりと眠っていたのである。その後、ハイラム・ビンガムは『失われたインカの都市』、『マチュピチュ・インカの要塞』、などの論文発表し、説得力のある決定的世界的な遺跡論文の発表となったのである。



ウルバンバ谷オリヤンタイタンボ遺跡・松井章のブログ      マチュピチュ遺跡(2430m)2005年筆の撮影

マチュピチュ遺跡・・・何時の時代の遺跡なのか、誰が建造したのかについて多くの謎は解明されておらず、考古学資料と年代記作者の記録から推測する方法しかない。



マチュ(古い)の嶺と、ワイナ(新しい)の嶺の鞍部(鞍のように低くなった山の尾根)にあって、遺跡の下の山腹斜面には100以上の段々畑(アンデネス)が整備されており、奇跡の景観を造っているのである。



左「インティワタナ」太陽の日時計 右遺跡のシンボル、コンドルの神殿(マチュピチュ遺跡を散策より)

遺跡の周りは・・・<sup>かんがい</sup>灌漑用水路が走り、山から流れる水源(最近の研究では16カ所、水源から流れる水勾配は3%と緩やかとなる)は、水路勾配を現代科学の数値でも難解な勾配で造られていて、段々畑には水路が張り廻らされて流れている。遺跡の建造物は白花崗岩(御影石)造られ、ビンガムはこの遺跡を次の様に考察を述べている。

《「マチュピチュの元の名はタンプ・トッコ(インカの誕生神話)の呼名であったが、伝説インカの<sup>ようらん</sup>揺籃(ゆりかご)の地、最初の皇帝のインカ王、マンコ・カパックの生誕の地であったこと、更にインカ最後の秘密都市の一つで、太陽の処女と僧侶たちの秘密の隠れ場所であった」》と、推測しているのである。

※1912年、ハイラム・ビンガム同行したエール大学古学者と共に、遺跡の洞窟からミイラ発見して詳細に調査した。ミイラは全部で143体、その内容は若い女性102体、少女7体、嬰兒5体、少年5体、青年男子17体、性不明骸骨7個であった。

これ等のミイラ年代は、当初、スペイン人侵攻時代のものと推測していたが、最後のインカ皇帝一族は、クスコからビルカバンバ山奥(インカ帝国最後の都市ビルカバンバ遺跡・2章P58~60参照)に逃延び、太陽の処女達の集団自殺の場所は、ビルカバンバ遺跡で終焉を迎えたのではないかと推測していた。



1912年代の撮影・ビンガムに発見された当時のマチュピチュ遺跡景観となる

ビンガムの当初の考察は・・・「女性は太陽の処女と貴族の妻・妾であった。嬰兒や少女はその子供達であり男は僧侶であろう、太陽の神殿と生死を共にするように運命づけられている」との推測の結論に至るのである。

これ等のミイラはスペイン軍に追われ太陽の処女たちの最後の自決した終焉の地は、「マチュピチュ遺跡」であると考察したのであるが、しかしながら、最近の新研究では出土骨の分析によれば、結核や寄生虫のケースの病気が見られ、又、トウモロコシの食生活による歯の損傷も見られ、ミイラは大人の50歳以上の年寄が多くみられ、その結果、此処の生活は普通に生活を送られていた事が解ったのである。

推察すれば、インカ帝国の王室管理する気象研究者たちの住んでいた場所となっていた。即ち、スペイン軍の侵攻に追われた危機感はなく、普通の気象学者たち生活していた事が裏付けられた。

イエール大学の近年研究成果では、この遺跡は高地ある事、両側が切り立った崖上ある事、これ等を考え合わせると、気象・太陽観測に最も条件が適しており、かつ宗教的理念に於いても、太陽が近い所である事など、太陽気象観測所に適していた場所であったことが結論づけられたのである。



ハイラム・ビンガム3世の探検の雄姿

(1911年『マチュピチュ探検記』)

急斜面の遺跡の頂上には、太陽の神殿、更に上にはインティワタナ(日時計・太陽を繋ぐ)が装置とされ、夏至と冬至が正確に分る窓があるなど、太陽暦と気象観測所と推測されるのである。マチュピチュ遺跡には、神殿の段々畑で栽培された農産物は、神への供え物として栽培されていたと考えれば、宗教儀礼的意味合いが理解される。



マチュピチュ遺跡にある「インカ古道・丸太橋」(2005年3月)

インカ道の丸太橋・・・遺跡のガイド者の説明では、この時代にマチュピチュ都市を攻撃する敵が攻めて来れば、3人の守備兵で充分である。インカ道は、空中都市(下からは都市が見えない)周りの自然が城壁となっているので、守る側のインカ兵は、外敵の攻撃にオンダ(投石器)の石を使い、石を下に落とせば、インカ道の丸太橋は落ちてしまい、敵の攻撃はこの場所で止まる。と、説明された。



左・マチュピチュ遺跡・ワイナ・ピチュ山背景に筆者、1988年1月



右・マチュピチュ北30kmにあるピサク村の市場にて、1988年1月

## 第4章 インカ帝国滅亡後のインディオ民の抵抗

1533年8月、アタワルパ皇帝(インカ帝国13代皇帝・最後皇帝)の絞首刑により事実上インカ帝国は崩壊した。その後、スペイン王国はインカ帝国の維持目的のために、傀儡政権をアタワルパの弟マンコ・インカ・ユパンキー(下級貴族説有)を擁立した。

その後、首都クスコでインカ・ユパンキーは1533年余まで抵抗を続けていたが、残党のインカ王族たちは、ビルカバンバ(クスコの北東約500kmアマゾン源流部、第2章P58～60参照)に移動してインカ帝国は抵抗を続けていた。

その後、マンコ・インカは1544年にスペイン人に暗殺され、王族の血を引くサイリ・トゥパク、ティト・クシ・ユパンキ、トゥパク・アマルと受け継がれ、1572年、第5代ペルー副王ドン・フランシスコ・デ・トレド<sup>注</sup>に武力鎮圧された。ここにインカ帝国は完全に消滅したのである。その後、スペイン人によるインカの歴史記録によれば、スペイン人の支配体制について厳しく糾弾する文書を、スペイン国王宛てに書簡を書き上げたインディオ出身の人物が現れた。それは黄金の獲得に狂奔<sup>きょうほん</sup>するスペイン軍人、植民者、官吏(植民地管理)等と対立しながら、インディオ住民の救済を叫び、フェリペ・ワマン・ポマ・アラヤという文字を持たないアンデス大地に生を受けた一人のインディオの末裔が現れたのである。



マンコ・インカ・ユパンキ、マンコがスペインの教会に火を放つ

『マチュピチュ探検記』青土社より

注・第5代ペルー副王ドン・フランシスコ・デ・トレド、在位1569～1581年、スペイン人同士によるペルー征服の是非と、先住民の支配権を巡り、宣教師達と激しい神学論争が行われた。16世紀に於ける神学的論争は、インディアスで宣教活動の宣教師達に多大な影響を与えた。彼は、『バルトロメ・デ・ラス・カサスに反論するユカイという匿名の覚え書』を1571年に出版し、一般に『ユカイ文書』いう。スペイン王室が副王派を通してインディアス大地を支配する正当性の実証を示し、ラス・カサス(第5章『簡潔なる報告』P82より)の思想や著書論文を批判したのである。トレド副王派對ラス・カサス派に分かれて対立、インディアス宣教活動に激しい神学の闘いが繰り広げたのである。

## ワマン・ポマ著『新しい記録と良き統治』インディオの惨状を訴える書簡なる

『アンデスの記録者ワマン・ポマ』 染田秀藤・友枝啓泰著・平凡社より抜粋する。

「ワマン・ポマ」・・・「フェリペ・ワマン・ポマ・アラヤ」1550?～1616年、出身はクスコ北部説があり、インカ帝国貴族インディオの出自とも云われ、『新しい記録と良き統治』の執筆者である。インカ帝国滅亡後、スペイン植民地社会に於ける重要なインディオの記録を残した人物でもある。この著作はインディオの被征服者側の『新しい記録と良き統治』記録となり、この文書で訴える事は、当時のスペイン国王フェリペに宛てた「書簡」形式で著されている。書簡とはいえ、凡そ2000頁に及ぶ浩瀚(頁数多い)な文書で、その三分の一以上が、著者自身の手による挿絵で占められている。文書の執筆時期には諸説があるが、文書の完成は1614年頃とされている。

この文書の原稿は凡そ3世紀の長い間、スペイン国からは黙視され続け、1908年にデンマーク国コペンハーゲン図書館で、突然に原稿が発見された経緯となる。原稿の経緯を辿れば、アメリカ大陸から送られて来たこの文書が、スペインのオリバーレス公伯爵(アンダルシア地方の貴族)の図書館に保管されていた説が有力である。

スペインに1650年～1662年まで駐在していたデンマーク大使のホルネリウス・ペンダーソン・レルヒ氏が文書を買受け、彼の自国に持ち帰ったものらしい。その後、1936年、パリの民族学の研究機関に依って出版され、広く世界の人々に知られるようになったのである。

ポマの父は、マルティン・ワマン・マルキと云い、インカ帝国の支配下の統治者ヤロビルカ・インディオの子孫に当るといふ。母はインカ皇女ワナ・クリ・オクリョだったことから、ポマはインカ・トパック・ユパンキ(インカ皇帝10代皇帝)の子孫であるとも言われる。

ポマには3人の兄弟と1人の姉妹の他に、母親とスペイン人征服者ルイス・アバロス・デ・アラヤとの間に生まれた混血の異父兄弟、マルティン・デ・アラヤガイタがいる。この混血の兄弟がカトリック司祭となっていることから、ポマの身の周囲には親族に依る知的発揚におり、多大な影響を与えたとポマは述べている。

ポマの記述に神父マルティン・デ・アラヤは義父や母や兄弟達に知識を伝授され、この兄弟の教えのお陰で著作の『年代記』を書く事が出来たと本人は述べている。正確な年代は分からないが、ポマは幼児期をクスコ街で暮らし、その後、混血の兄弟、

神父マルティン・デ・アラヤが神父を務める地方病院に有るワマンガ(アンデス山中マンタロ川上流)へ移り、一諸に暮しポマも父もその病院で働いていた。ポマはスペインイン語、ケチュア語、その他の原住民言語を話す事が出来た。

ポマは既婚者で少なくとも1人の子供がいた事が知られる。ポマはペルー国内の旅をしながら、貧しいインディオの保護に一生涯尽力した人物であった。

1583～1613年の30年間の歳月を費やし、ペルー国中を旅し、波乱に富んだ人生を送り80歳以上生きたと伝わる。

ポマ著作の挿絵には、鞭で打たれた画、棒で殴られた画、裸で鞭打ち画、子供への非人道的な殴打画、強制結婚、役人とカードゲームにふける司祭等の画が描かれている。

『新しい記録と良き統治』は、目次を含め1176頁あり、456頁に挿絵が描かれている。435頁までが『新しい記録』となり、古代からスペインに征服される迄の歴史を綴り、スペイン人による征服の記録と、植民地政策に対する反論の提言を、カスティージャ語(スペイン語)の記録となっている。それらの記録を辿れば、インディオが受けた「虐待行為や搾取の告発と改革案」が明るみになるのである。

ポマの情報と行動記録を挿絵で追う・・・従来の南米アメリカの征服史は、スペイン人が書き残した記録の『年代記』=クロニクルと呼ばれ、スペイン人の記録となって



1593年の英語版と1598年のラテン語版。左右は『アンデスの記録者ポマ』より

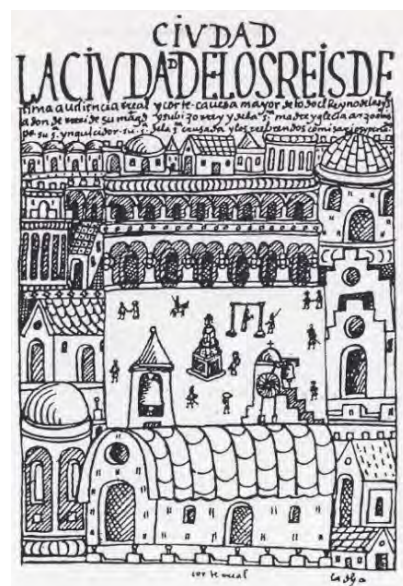


1936年版・1944年ポスナンスキー版の表紙となっている

いるのである。征服史(植民地)の研究には、征服された側のインディオ証言が求められ、その敗者からの視点の被征服者側の代表的な作品として取り上げられているのが、ワマン・ポマの『新しい記録と良き統治』であり、その宛先はスペイン国王への「書簡」形式となっているのである。

ポマは1594年、ワマンガ地方(マンタロ川上流域)に最初のコンポシシオンの役人が赴任したソラーノ・デ・フィゲロアに通訳として仕えた。コンポシシオン(作文)は、1591年11月、スペイン王室が逼迫する財政状況<sup>ひっばく</sup>を打開する一策として、打ち出した、有償の土地譲渡政策の方法で、これによりスペイン人植民者は、自己の所有する土地に対する正当な権利が保障された。

又、不法占拠が明らかな場合でも、一定額の税を支払えば土地所有が合法的に公認され、その結果、スペイン人による土地の収奪<sup>しゅうだつ</sup>が加速化した。この時、ポマ自身の土地も、所有権並びに受益権の返還を求める訴えを起し、ポマに有利な判決が出ていたのであるが、判決を実施当日に、土地測量士が到着した時に、ポマはその土地に不在だったため、コレヒドール(地方行政官)に、「卑しいインディオが偽ってカシーケ(族首長)を名乗り、邪悪な意図をもったインディオ」とされ、詐欺の裁定を下されてしまった。その結果、ポマは200回の鞭打ちと、訴訟費用200ペソの支払いと、2年間のワマンガ市から追放を言い渡されてしまった。



左・ポマが敬愛する異父弟 中・ポマは息子を連れてリマへ 右・リマの街・インディオ達で賑わう

左訳・異父弟マルティ・デ・アラヤ。左から隠修士マルティン・デ・アラヤ、父、母、クスコにて。

中訳・村を追放されポマは、息子フランシスコと一頭の白馬と2匹の犬を連れリマへ向かう。

その後のポマ・・・「自分と同じ貧しいインディオたちの哀れな情報を集めて放浪し、その目的は、神と陛下(スペイン国王)にペルーの窮状を知らせる為に、情報を記録して故郷を捨てて30年間、インカの出来事を集めて放浪した」と記している。

ポマの帰郷<sup>ききょう</sup>は平民身分から有力者に成り上がったインディオ、コレヒドール(植民地の地方行政官)やスペイン人に苦しめられる改宗区の司祭から歓迎されなかった。そして、ポマがリマで目にしたのは、スペイン風の衣装を纏<sup>まと</sup>い、腰に剣を帯びたインディオたちが、過酷な鉱山労働から逃亡してスペイン人に仕えていた。又、女性は既婚でありながら、身を崩しスペイン人や黒人と情を交え、メスティーツ(白人とインディオの混血)やムラート(白人と黒人の混血)の子供を抱いている姿にポマは失望した。



左・キリスト教徒の巡察使      中・ケチュア語で福音を説く      右・隣人愛を実行するインディオ  
左訳土民の救済行動する巡察使、中訳ケチュア語で福音を説く、右訳貧者をキリスト教に改宗を諭す



左・虐待者ドミニコ会士、インディオ女性に機織りをさせ情交を結び虐待したと罵る。中・女性の恥部<sup>ののし</sup>を眺めるコレヒドール(地方行政官)      右・夫を監禁して妻と同衾するコレヒドールを非難する



挿絵のコレヒドール(地方行政官)とは・・・コレヒドールとは、スペイン人植民者の自治組織であった市参事会(植民地自治行政局)に於ける、王権を代表する地方官吏や副王に従属して、インディオ移住区地域に管轄下に置くようになった。

その後、インディオ移住地域のみを管轄する事になり、インディオのコレヒドールに任命され、名目上は副王(植民地の王を指す)の命令で、インディオの苛斂誅求(スペイン人の土民迫害)の阻止すること、保護と改宗化(キリスト教徒に改宗)と、租税の徴収係、インディオ間の訴訟問題の解決する官職であった。現実には職権を乱用し、インディオ達を、支配と搾取する悪名高い存在であり、因って、ポマの挿絵にあるように、痛烈な挿絵を後世の歴史に残すことになったのである。



左・不道徳な改宗区の司祭　　中・ポマが非難した神父の一人　　右・インディオから布施を受ける

左訳不道徳な生活に耽る改宗区の司祭、強制的に土民女性に衣服を織らせ情交と虐待の神父。中訳ポマが非難した虐待神父、右訳インディオ達の布施を受けるフランシスコ会士とイエズス会士の司祭。

ワマン・ポマは自分がキリスト教徒で有る事に大きな誇りを抱いていた。キリスト教徒スペイン人の悪徳行為を見逃す事はできなかった。中でも最も厳しい批判を浴びせた聖職者は、インディオの改宗区を任務のコレヒドール(地方行政官)やエンコメンデロ(インディオを改宗する義務と課す)等と結託して、蓄財と不道徳な生活に耽る司祭は許せなかった。結婚前の娘たちを裸にして肛門や性器を眺め、指を押し入れたのはアルバダン紳士(実名)であった。「司祭達よ、あなた方は宗教裁判所で処罰されるべきだ」とドミニコ会士についてポマは次のような評価を下した。

「彼らは極めて粗暴かつ放漫で、神と正義を恐れていません。彼らは改宗区で残酷

な処罰を加え、自ら司直(裁判官)の如く振る舞っている。少女、娘や寡婦を集めて、糸を紡ぎの上等な織物を織らせている。この様なキリスト教改宗区からインディオの男女は被害を恐れて村々から離れてしまい、村々は荒れ果てている。」と非難している。

ポマによれば、現実に隣人愛に基づく行為を実践している人達は、実はスペイン人のキリスト教徒ではなく、インディオ教徒であると強く主張しているのである。

ワマン・ポマのイデオロギーに触れる「国王との架空の対話」・・・ポマは、アンデス先住民がノアの子孫(旧約『創世記』に登場するノアの箱船の人物記述に従えば全ての人類の祖先)であること。つまり、彼らが聖バルトロマイ(キリストの使徒の一人)の福音伝道によってキリスト教徒になった。これを根拠にスペイン人がキリスト教の伝道布教を名分に、ペルーを征服して支配を正当化したことに異議を唱え、ワスカル(第インカ帝国12代王)が平和裡にスペイン国王の使節を迎えて友好を結んだ。即ち、アンデス住民が自発的にスペイン国王に従ったことへの論拠に、エンコミエンダ(王室からスペイン人入植者の功績に応じ先住民を下賜され、地域インディオを委託管理する。個人の委託はエンコメンデロ)の存在理由を否定し、全ての世俗的支配権を彼らに返還するように求めた。換言すればポマはペルーの国土は本来の正当な所有者は先住民であって、インディオ住民に返還するように強く求めたのである。そして彼はその主張に基づいて、スペイン王室はペルー支配の本来の在り方を『良き統治』論考を書簡に著した。ポマは現地植民地の社会実態を詳しく記述し、厳しく批判すると共にその改善策を提言していたのである。



インディオ住民が減少し貧窮に苦しむ理由・・・この『良き統治』の「前書き」に、「いと聖なるカトリック王はペルー国の実情を知るため、様々な事柄について質問されるが、それは王国が正しく国を治め、正義を実行し、貧しいインディオ住民を救うためである。著者である私は、陛下の質問に耳を傾け、スペイン人、コレヒドール(地方行政官)、裁判官、改宗区の司祭、エンコメンデロ、有力なカシーケ(首長)等が行為を悔い改めること。そして陛下の益々盛んな栄光のために最善を尽くしてお答えする所

存です・・・(略)」。〔下記は国王へ説得会話の書式となり、()訳は筆者による。〕

**国王**「インカ国王が統治する以前は、何故インディオは繁栄し人口増加したのか」

**ポマ**「当時、国を治める王は一人しかいませんでした。大勢の領主達が国王によく仕え、金・銀の鉱山の採掘、農作業や牧畜の管理を行っていました。大勢の男女が子供を養うのに十分な食料が生産されていました。」

**国王**「インカ王の時代、何故、インディオは大勢の民がいたのか」

**ポマ**「インカ王は唯一無二の君主で、王の下には公爵、侯爵、伯爵、様々な階級がありました。インカ王の定めた法律や命令を遵守していました。従って、人々は増え栄え、食糧に事欠く事などなかったのです。」

**国王**「では、何故、現在のインディオは増えず、日増しに貧しくなっているのか」

**ポマ**「インディオが増えない第一の理由は、改宗区の司祭エンコメンデロ(入植者に先住民の委託を任せられ、キリスト教改宗者を金銀鉱山労働者に使役)やコレヒドール(植民地の地方行政官)等、スペイン人は女性や娘を拐かし、大勢の混血を産ませているからです。司祭がよく使う言い訳は、女性に罪深い生活を送るのを止めさせるためだと言いますが、実は彼女達を一人占めにするためなのです・・・大勢のインディオが希望を失い、首をくくって自殺するからです」と。

**国王**「どうすれば、インディオの人口はもう一度増えるか」

**ポマ**「改宗区の司祭、コレヒドール、エンコメンデロ等のスペイン人達が教徒らしく、陛下の命令を守って、生活しなければなりません。そして、インディオが夫婦生活を送れるように、安心して娘を育てる事が出来るように配慮する事です。インディオを大勢の支配者や裁判官が治める現状を改め、支配者は陛下一人だけにして、違反者を厳罰に処し、役職を罷免して俸給(給与)を支払わない事にしてください」

**国王**「では、どうすれば故郷を離れたインディオたちを帰郷させられるのか」

**ポマ**「すでに廃墟と化した村々、且つての村に若いインディオたちの男女を収容し、彼らに境界を明確に定めた田畑と牧草地を与えます。そして、彼らは租税を支払う義務だけを負う事にします。徴収の責任者の監督の俸給は、彼らの負担する租税から支払い、残りは陛下の取り分になります。その際、租税額は納税義務を負うインディオの数に合わせて決める事にします。そして、監督になるのはインディオのカシーケ(首長)でなければなりません。と言いますのは、私たちカシーケはこれまで陛下に叛旗を

ひるがえ

翻した事はなく、陛下の忠実な部下である事を証明してきたからです。私たちはこれまで陛下に自身や部下だけでなく、ポトシの銀鉱山(現ボリビア南部の鉱山、リマ南東400km)、ワンカベリの水銀鉱山(リマ東南東250km)も譲り渡しました。従いまして、こうした奉仕に対して、陛下は何らかの感謝のしるしを私達に示すべきです。

又、陛下は王室会議の12名の学職者たちが奴隷制を禁止する法令を定めたのみならず、司祭やその他の人々への租税支払いを禁じた事も想起しなければなりません。そうすれば、改宗区の司祭も神父も、要求している租税を徴収する事が出来ませんし、彼らは祭壇に供えられる布施<sup>ふせ</sup>だけで生きていくべきです。

司祭は普通、1年間に少なくとも1000から2000ペソの収入を得ています。つまり、ミサ代、自発的な布施、死者のための聖歌代、贈り物、クリスマスの祝儀や義損金として手に入れているのです。その額は彼らの衣食住を満たしても余りあります。従いまして不当に租税を手に入れたり、土地を所有したりするのは神や教会の掟に反します。彼らは私たちが差し出す物や、スペイン人が支払う十分の一税<sup>はっほ</sup>や初穂税(喜捨金)に満足しなければなりません」

**国王**「なぜ、改宗区の司祭が俸給を手に入れるのに、そんなに強く反対するのか」

**ポマ**「地上に於ける最初の司祭は、イエス・キリスト様で、彼は貧しい人を愛しました。キリストがこの地上に降り立たれたのは、魂を獲得するためであり、銀を手に入れるためではありません。従いまして、キリストは租税を求めませんでしたし、人がそれを求めるのも認められませんでした。彼は地上に於ける自らの代理として教会の最初の司祭<sup>しさい</sup>、聖ペトロ(キリストの使徒)と使徒<sup>しと</sup>たちを残されました。

そして、使徒たちも貧しい生活を送り、又、貧しい人々を愛しました。彼らは全員、報酬や収入を求めず、人々の慈善に頼って生きる事に満足していました。陛下は、神がこの世に示された掟に基づいて、インディオが差し出す布施は、教会を守るためのみ使うよう命じなければなりません。それと同じ理由で、改宗区の司祭は税を徴収したり、財産を所有したりしなくとも、十分に生活する事ができます。

もし彼らそのような生活を嫌がるのであれば、陛下はローマ教皇(ローマ・カトリック法王)と相談して、インディオを司祭にするのを認めるべきです。インディオは立派なキリスト教徒ですから、報酬や償いを求めないでしょう。従いまして、陛下は聖なるカトリック信仰を守るのに、それらの収入を用いる事になるでしょう」と。

**国王**「どうすればインディオが鉱山で過重な労働を強いられたり、水銀中毒にかか

ったりして、死ぬのを妨げるのか」

ポマ「インディオたちは高山所有者や裁判官から虐待されています。まず、インディオたちは色々と理由をこじつけられ、恥部を丸出しに裸のまま吊るされ、鞭打たれています。それを止めさせるべきです。

また、インディオたちは昼夜の区別なくインディオの保護官等は、権力者を招集して巡察使と協力し、各町や村の巡察を実施するよう命じてください。そうなれば、前任の巡察使の行動を正確に知る事が出来るからです。

即ち、巡察使が司祭に買収されたのかどうか、巡察使が粗野で短気で横柄な態度をとったかどうか、もし巡察使が司祭を処罰した場合、それが適切な処置であったかどうか。そして、処罰された司祭が実際立派なキリスト教徒であったのか、どうなのかが判明します。適切な解決策が採られ、陛下の良心が和むように、陛下と司祭にはこのような問題の全てに関する報告がなされるでしょう。

ペルー王国に良き統治を確立するためには、治績審問(政治上功績)は改宗区の司祭や巡察使のみならず、各村のコレヒドール(地方行政官)、治績審問判事に対しても行われなければなりません」と述べている。

そして「混血化」は社会秩序を破壊する・・・ポマの主張は、インディオの人口はスペイン征服後から減少し続け、一部の地域の村々に壊滅的な人口減少の廃墟の村も出ている。

「インディオの人口減少はスペイン人が持ち込んだ天然痘、麻疹、インフルエンザ等の免疫性を持っていなかった疫病から禍を広げ、次いでスペイン人による苛斂誅求の暴力使役によって命を奪われているからです」と。

ポマは、人口減少の第一の理由にメスティーソ(白人とインディオの混血)は、即ち、スペイン人男性とインディオ女性の混血化の問題を論じているのである。(※研究者の説に、1570年代のペルー混血人口は6万人余、17世紀半ばには7万人となっている)

ポマが混血化の問題で最も厳しい批判を浴びせたのは、改宗区の司祭に対し「世俗的な物欲と情交に溺れた」と宣教師を暴露している。

16世紀後半以来、インディオたちはスペイン人の苛斂誅求に耐えかねて、やむなく出身の共同体を離れ、都市部や地方へ移り住んだ者達が大勢いた。植民地入植初期に、彼らの大部分はヤナコナ(スペイン人の隷属民)という身分となり、成立しつつあっ

たアシエンダ(スペイン人土地所有者の大農園主)の主の隷属民となっていた。ヤナコナはインカ帝国時代に存在したインカ社会集団を利用した制度で、帝王に個人的に従属する奉仕者は、帝王に規制されていた。インディオたちは植民地政策の初期にかけて、ヤナコナとしてスペイン人に仕え、ヤナコナはミタ(インディオ労働者の強制的に徴集する貢納制度)の義務が免除されていた。インディオの減少で、労働不足に直面したアセンドラド(大土地所有主)やエンコメンデロ(先住民を個人で委託)が、共同体からインディオ民を連れ出していたのである。

第5代副王トレド(P 67参照)に依って、新しくヤナコナ(原住民の奉仕労働者)を使うことを禁止したが、1601年11月に<sup>ちよくれい</sup>出された勅令(国王命令)に依り、ヤナコナに対し移動の自由が認められた結果、ヤナコナが増加して生産活動の重要な担い手となった。

しかしながら、その実態は以前と変わらず、ヤナコナは生活に必要な最低限の生産物を手に入れるために、土地の用役権を持つのみで、妻子も労働に従事し、生計は維持できなかつた。

法律上、ヤナコナの人身売買は禁止されたが、彼らは<sup>わず</sup>僅かな土地を媒介として、アセンドラド(大土地所有主)に従属する<sup>だいだ</sup>奴隷的な存在で、ヤナコナは放漫かつ<sup>きよ</sup>怠情で嘘言癖<sup>げんへき</sup>があり、賭け事やアルコール、<sup>なりわい</sup>盗みを生業の集団と、ポマは述べその上、スペイン人と手を組んで国王に<sup>ひるがえ</sup>叛旗を翻す危険分子でもあると記している。



左・第5代副王デ・トレド



中・娘を奪うスペイン人



右・メスティーゾは嘘つきである

左訳・ポマが厳しい批判を浴びせた第5代副王フランシスコ・デ・トレドはカスティーリャ国で死去。

中訳・娘を奪うスペイン人に抵抗するインディオの両親、虐待にインディオはやむなく共同体を離れる。

右訳・メスティーゾは<sup>しゅうぶん</sup>醜聞もたらし嘘つきで略奪者、愛を語り合うメスティーゾの男女。

ポマの書簡によれば・・・スペイン国王が莫大な富を失ったのは、第5代副王トレド(1515～1584年、フランシスコ・デ・トレド)がレドゥクシオン(インディオの宗教改宗させる生活共同体)と呼ばれるインディオの強制移住を実施したため、アンデスの伝統的な社会構造を崩壊させた事を非難している。

その目的は、伝統的なインカ時代の社会組織から、租税をアイユ単位(インカ統治下の親族集団)ではなく、個人単位で徴収できる体制を確立し、インディオのスペイン化とキリスト教化を促進し、労働力を恒常的に確保出来るようにしたため、レドゥクシオン(改宗区共同体)は、インディオが先祖伝来の土地を強制的に断つ村にしてしまったと、強く訴えているのである。

レドゥクシオンの建設を実行するために移住を速やかに行い、抵抗するインディオがいれば住居を焼き払い、副王トレドは破壊する強硬手段に出たのである。この目的は、インディオが国王への貢納義務以外に、ミタ制(強制労働制度)の義務も負わされたことが、インディオたちの家庭生活が崩壊し、ミタの主たる目的はインディオたちを鉱山労働に割り当てることを重点にしていたからである。

このように第5代副王トレドは、150万以上アンデス住民を体制下に置き、総計600以上の村が建設されたが、個人生活様式を破壊した集団のため、多くのインディオたちが逃亡し、そして村は崩壊していったのである。ポマは、レドゥクシオン政策(宣教師と先住民の共同生活)によって伝統的な社会体制が崩れて人口減少の原因と見なした。疫病(伝染病)が流行してインディオが犠牲となるより、そのうっぶん晴らしに、彼らがチチャ酒・ブドウ酒で泥酔し、鉱山の苦渋を凌ぐ<sup>しの</sup>ために、コカ(コカノキ科の葉)を噛み、心痛を和らぎ、そして水銀中毒で死んでいったのである。第5代副王トレドの着任は、インディオに甚大な害を与える事になったと、ポマは激しく非難し、インディオたちは土地を強制的に捨てさせられ、アイユの集団移住に入籍され、広大な土地が無地主となった結果、無主の土地はスペイン人に掠奪されたのである。

やがて、インディオ達は楽な生活を求めてクスコの街へ、そしてスペイン人の下僕として仕え、未婚のインディオ女性は進んでスペインの男に保護を求め、白人との接触を深め、沢山の混血児を産む生活を選んだのである。

※ポマがインディオの人口減少に痛烈の訴えは、インディオの生活を立て直しアンデス民の「良き統治」を強く求めた、スペイン王室へ建策した書簡となっている。

「**ポトシ銀山**」の歴史経緯を考察する・・・『南米ポトシ銀山』青木康征<sup>やすゆき</sup>著から、インディオたちの厳しい鉱山使役の実態をポトシ銀山から見て行く。

ポトシ銀山は標高4千mを超すアンデス高原に位置し、山そのものは800mの小山である。インカの伝説によれば、1462年頃、グアイナ・カバク(11代皇帝ワイナ・カパック)の配下が皇帝の命令を受けて山に入り、銀を掘ろうとした処、大音響が響き「この山の銀に手をつけるなかれ。銀は汝らのものにあらず」という声が響いた。事の次第を皇帝に報告した際、「大音響がした」という意味で発した「ポトクシ」が転じてポトシになったと伝わる。(アルサンス・イ・ベラ著『帝国町ポトシ史』1965年刊)

別説に「銀の出る山」「美しい山」がある。ポトシとは「山、高く<sup>そび</sup>聳えるもの」ペルー誌の1554年にある。ポトシ銀山は正しくは「セロ・リコ・デ・ポトシ」と呼ばれている。

1545年頃、群れを離れたリヤマを追って山に入ったインディオのディエゴ・グアルパが、火を焚いて暖をとり、翌朝に火床に銀が光っていた。それをグアルパは秘かに銀を取り出し、街に銀塊を持ち歩き、その羽振りの良さに気が付いたスペイン人のビリャロエルの耳に入り、ポトシ銀山に出向き<sup>こうしょう</sup>銀鉱床を確認し、同年4月第1号鉱区の採掘権を取得の経緯となるらしい。



ポトシ銀山は当時はペルー側だったが  
現在はボリビア側に、首都ラパスから南  
東440km。(ポトシ銀山の画像より)

1647年には早くも1万4千人(スペイン人2千人インディオ1万2千人)鉱山労働者が集まり、更にインディオの労働者は2万人以上に達した。この周辺にはインディオだけでも6万人が住み、1650年には16万人の人口を擁して、インディオ最大の都市銀山となっていたのである。

スペイン人の征服後に、インディオ労働者は農園等で奴隷同然の扱いを受けていたが、カルロス5世(ローマ皇帝・スペイン国王)は、1541年にヤナコナ(元はインカの共同体で皇帝の従属民)は奴隷民でなく自由民であると認定された。その移動の自由を保証された事により、ヤナコナが大勢の高収入を求めてポトシ銀山に、銀山労働者として集まって来たのである。

採掘権を保有する鉱山主の多くはエンコメンデロ(先住民をキリスト教改宗に委託者)



であり、ヤナコナと請負契約を結び、採掘した鉱石の中から「タカナ・リカ」と呼ばれる高品質の銀鉱石は鉱山主が取り、品質の悪い鉱石は労働者の取り分となった。インディオに渡った鉱石は、街の鉱石市で売買されていたが、やがて、ポトシには単純労働者が就くインディオも多く、エンコミエンダ制(土民を改宗委任制度、現実には奴隷労働者)に強制的に送り込まれた。1549年、ポトシから銀の延べ棒 3771 本がセビリアへ送られ、1548~1550年までの5分の1税(20、8%税率・後に税率は上昇)の徴収額は合計 74万9845ペソであったという。



左・ポトシ銀山 1554年当時の景観の版画



右・鉱石の粉碎機 左右絵『南米ポトシ銀山』より

銀の生産量が急増した理由は・・・技術面では 1572 年から導入された「水銀アマルガム法」(金・銀が水銀とアマルガムを作り生産増にした製錬法)が功を奏して生産増となる。労働面では 1573 年からのミタ労働(男子 18~50 歳迄の交代制有償強制労働制度・5 代副王トレド期に制度化)の制度で更なるインディオを酷使して生産は更に向上したのである。

しかしこのミタ労働をめぐる問題は、アンデス先住民の反発と不服従の歴史が続き、1780 年スペイン植民統治に対する不満がインディアスの現地を治める事務当局に、「トゥパク・アマルの反乱」(同年 11 月 4 日制圧者スペイン人を打倒号令トゥパク・アマル旗下に、何十万人が集結したインディオの反乱)となって噴出したのである。

この宣言事項の一つにミタ労働の廃止が盛り込



ポトシ銀山 (世界史の窓より)

まれた、近代の労働問題の経緯となり、現代に繋がって行くのである。

ポトシ銀山に於いてインディオの労働を重要な法規は、1503年の強制労働令で、この法令はスペイン人との接触を嫌って逃げ出すインディオを一カ所に集住させ、キリスト宗教教育を進めながら、規律ある社会・勤労生活を身に着けさせることを目標に置いた。しかし、先住民側から見れば、実情はスペイン人による暴力や虐待から逃れるための自衛の行動であって、インディオを酷使するスペイン人の「飽くなき強欲」を柵<sup>たな</sup>に上げた、インディオ民の勝手気儘<sup>きまま</sup>に暮らす、惰性と悪癖<sup>ふけ</sup>に耽<sup>やから</sup>と、吹聴していたのである。

インディオ民を信仰と文化生活を高めるスペイン入植者の「指導的使命」とは程遠く、富のない処にはスペイン人は寄りつかず、国策のキリスト教の布教事業は絵に描いた餅と言わざるを得なかった。

ペルー国のインディオの経済開発の主軸は銀鉱山業となっていたが、スペイン王室は、現地に格別の産業振興政策を取らなかった。銀の生産を高めるため、ポトシ銀山での大量の労働力調達する方策として、ミタ労働(16~50歳の交代制有償強制労働制度)が導入された。その見返りとして、インディオのポトシ銀の生産額は、スペイン国へ送りその代価を、ヨーロッパからの商品(生活必需品・鉄と鋼材)を購入することができ、貨幣の代わりに用意できる唯一の銀だったのである。

しかし、ポトシ銀山が誕生して50年間、不潔な水、劣悪な衛生状態、坑道から出る毒性ガスは、先住民の人々を害した。新大陸を統治するスペイン王室は、インディアス民を、スペイン人入植者による虐待と収奪から保護するためと、それなりの手を打っていたが、その努力は「インディアス法令集成」(1680年編纂)に凝縮されているという。しかし、これらの法令がどれ程伴ったものなのか、現在でも分からない。



ポトシの銀鉱石



現在のポトシ銀山(ポトシ銀山の画像より)

## 第5章 新大陸での植民地政策の諸問題

16世紀中葉、スペイン出身のカトリック司祭、後にドミニコ会員のバルトロメ・デ・ラス・カサス司教は、スペイン国家を挙げて新大陸インディアスに於ける征服事業を進めていた。その植民地に於ける数々の不正行為や先住民インディオに対する残虐行為を告発して、現地に於けるその実態をスペイン国王に訴え出たのである。

### 『インディアスの破壊についての簡潔な報告』ラス・カサス著より追ってみる

序詞に「司教バルトロメー・デ・ラス・カサスもしくはカサスが、いと高くいと強きわれらが主君、スペインの皇太子フェリペ殿下に宛てて認めた序詞」とある。

「一いと高くいと強き主君一 神は自らの計画に従って、この世の王国や民のために、王たるものを創られました。それは、王たるものを通じて人類を導き、人類に等しく幸せをもたらそうとされたからであります。王は民の父であり、牧者(牧場の番人)に等しい存在でありますから、国中の人々の中でもっとも高潔かつ寛大な人物でなければなりません。従いまして、王が正しい心の持ち主であることについては、いささかも疑問の余地がありません。万が一、自分の治める国で民が何らかの不正、過ちや害に苦しんでいるとすれば、それはひとえに王がその事実を知らされていなかったからにほかなりません。もし、その事実を知らされてさえいけば、王は十分な調査と誠心誠意を尽くして、それらの諸悪を根絶なされることでしょう。……(略)

カスティーリャ(スペイン)の国王が、神との教会から、あの茫々とした数多の王国、すなわち、インディアスという広大無辺な新世界を譲渡され委ねられましたのは、そこに暮らす人々を導き、治め、キリスト教に改宗させ、現世のみならず来世に於いても等しく豊かな生活を送らせるためにほかなりません。

ところが実際には、インディアスの国王や住民は、到底人間が手を下したとは思えないような不正、迫害、破壊、破滅を数々と蒙ってまいりました。いと(大変)強き主君、私は50年以上に亘りインディアスの地で過ごし、実際にそれ等の悪事が犯されるのを目撃してきましたので、その中から特に顕著な出来事を幾つか申し上げれば、必ずや殿下は陛下に対し、無法者たちが征服者(コンキスタドル)と呼んでいる事業、つまり、彼らの考えを正し、今なお実行続ける企みを、今後一切容認や許可しないように折に触れて懇願(頼み願う)していただけるであります。……(中略)

昔からその地方に住んでいた人々や土地を所有していた人々を、何千万と殺害してあの広大無辺な土地を見る影もなく破壊したり、その土地から膨大な財宝を奪ったりするのを不当にも意に介さない連中の恐れを知らない常軌を逸した欲望は日を追うごとに膨れあがっていきました。……(中略)

従いまして、私は、インディアスで起きた破壊や破滅に関しまして、極めて浩瀚(広大な)な記録を認める事ができます。その悲惨な出来事をごく簡素にまとめたこの報告書を、殿下に献上するのが、時宜(適切な時期)にかなっていると考えました。……(略)

いと高き主君、以上申し上げましたことこそ、神の御業により、カスティージャ王国全体が聖俗両面において繁栄、存続するため、また、神の祝福を得るためにも、この上なく適切かつ必要な事柄であります。アーメン。》と王に願いでている。

インディアスとは、コロンブスが新大陸に到達したカリブ海諸島地域を指しており、本人は東南アジア・インド大陸に到達したと確信してインディアスと呼んだのである。この地域の発見の偉業が達成されると、スペイン人は直ちに同地へ渡り、金銀財宝の略奪し、スペイン人入植者たちを多数送り込み、新大陸での金銀財宝探しに、土民のインディオたちを強制荷役運搬に使役し、老若男女関係なく、食事も与えず酷使し、大勢のインディオが野垂れ死んだのである。

現地で起きたインディアスの村々に残虐な襲撃・掠奪・暴虐・虐殺は悉く驚くべきものがあり、それは、実際にその地域で目にした人でなければ、とうてい信じがたい事件ばかりが起きていたのである。

インディオを残虐な殺戮の現場には、無辜(無実)の住民の殺害や、村の財宝を奪い終わると、部落民を村集合建物の中へ村人全員を追い込み、建物に火を放し、村民を焼き殺すという残虐な殺し方をした。その理由は、侵攻するスペイン軍が次の村で金銀を掠奪する行動のために、インディオ達に財宝を隠すような行動を取らせないために焼き殺し、その行動作戦の激しさを次の村民達に見せつける行動となっていた。

略奪後、村に何も奪う物が残って無いと判ると、男女子供区別なく惨い殺戮を行い、インディオ部落民を破滅へ追いやり、幾つもの集落や村々は、見る影もなく破壊され、真心ある人々を唾然とさせたのである。

16世紀中葉、スペイン人キリスト教司教、バルトロメ・デ・ラス・カサス(1484

～1566年・ドミニコ会司教・カトリック司祭)が著した、『インディアスの破壊<sup>はかい</sup>についての簡潔<sup>かんけつ</sup>な報告』(ラス・カサス著/染田秀藤訳・岩波文庫)の内容は、軍隊や入植者達が村々で見せた殺戮<sup>さつりく</sup>現場の実態<sup>あば</sup>を暴いた報告書となっている。

ラス・カサスは修道士となつてから1523年にドミニコ会に入会し、彼は初期の段階ではスペイン人の入植者達と共に行動し、エスパニョーラ島へも軍隊と行動を共にしている。入植者達の島々に於ける出来事をつぶさに目撃した司教は、皇帝陛下(国王カルロス1世)にインディアスの実情を報告するために、宮廷へ参上したのは1540年の事とあつた。

しかし、国王や王室関係者はインディアス大地の事情に通じておらず、王室の官吏<sup>かんり</sup>役人達にラス・カサスは、インディアスで起きている実情を報告したが、話を聞いた王室の役人達は茫然自失の始末であつた。

王室関係者達からラス・カサス司教にその一部<sup>しじゅう</sup>始終の内容を、簡潔な文書に纏<sup>まと</sup>める様に要請があつた。

司教はその要望に応じて文書を認<sup>したた</sup>めたものが右の文書(書簡)となるのである。

しかしながら、その後、数年経ても直スペイン人の冷酷無比の連中達は、貧欲による果てし無い欲望・野心の末に、人間で有る事を忘れ去り、神に見捨てられる忌まわしい悪行を重ねていた。連中は、稀に見る残忍な手口を次々にあみ出し、インディアス大地を無惨に破壊し続け、その行動は以前より増して、醜<sup>しゅうあく</sup>悪な実行計画と企<sup>たくら</sup>みを拡大するために、国王陛下に新地域の開発地の許可と裁可を願い出ているのである。

ラス・カサスはその事実を知り、殿下(スペイン国王フェリペ2世)に、連中の申請を却下される様に願い出るために、認<sup>したた</sup>めた書簡を殿下に献上する決心したのである。

司教はその一文を殿下に読んで戴くには、印刷するのが適切と考え、1552年に印刷されたのが『インディアスの破壊についての簡潔な報告』の草稿となつたのである。

しかし、その後の経緯はインディオの擁護する植民地を管理地域では、インディオは自由民であり、スペイン国王の臣民<sup>しんみん</sup>であるとして、隷属民の使役を段階的に廃止す



る「インディアス新法」が成立していたが、国家の赤字財政に苦しむスペイン王室は、入植民から献金に頼っていた事情も重なり、依って、エンコミエンダ制(原住民を委託される分配者)の者たちの反対が激しく抵抗された上に、現地植民地管理当局にも反対側にたち、国王はエンコミエンダ制度の廃止を撤回するに至ったのである。

『<sup>かんけつ</sup>簡潔な報告』の内容を要約で解説・・・(『インディアスの破壊についての簡潔な報告』を『簡潔な報告』に簡略する)

インディアスの新大陸が発見されたのは1492年10月12日、コロンブスの西インド諸島(カリブ海)への到達から始まる。その翌年には、スペイン人のキリスト教徒がインディアスの大地へ上陸して、入植地<sup>おもむ</sup>に赴いて早や49年の年月を数える。

スペイン人が入植民を目的として最初に大地を踏んだのは、エスパニョーラ島(現在のハイチ3分の1・東側3分の2ドミニカ共和国)で、それ等は凡そ600レグア(1レグア=5、6 km、3360 km)に及ぶ大きな豊饒な島<sup>ほうじょう</sup>であった。島の周囲一帯には大きな島々が無数点在し、その島々には大勢の先住民のインディオが<sup>ひし</sup>群めき合って暮らしていた。

エスパニョーラ島の近くには、大陸(陸地)が横たわり、同島から大陸までは最短距離にして250レグア(1400 km)余り、既に1万レグアに及ぶ海岸線(ブラジル側 56000 km)が発見されていた。1541年までに発見された地域に、<sup>みつばち</sup>巣に群がる蜜蜂の如く先住民が住んでおり、ラス・カサスの書簡の報告は次のようにある。

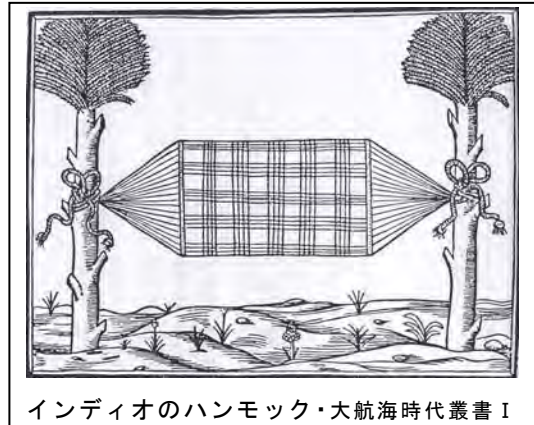
「インディアス一帯に住む無数の先住民はこの上なく素朴で、悪意や二心を持たない土着民のインディオで、極めて<sup>きょうじゆん</sup>恭順で、その上、土着民の首長(カシーケ)はキリスト教徒に従う忠実な土民でもあります。彼らは力づくなく、愛情に依って解放されるキリスト教徒に帰依する者たちと思います。インディアスの人々は他の民族と比べると身体が細くて<sup>きやしや</sup>華奢で、ひ弱で重労働には耐えられず、軽重を問わず病気に<sup>かか</sup>罹ると<sup>たちま</sup>忽ち死んでしまう。

又、インディアスの土民は数ある民族の中でも最も貧しく、彼らが手にする財産は他の民族と比べれば、<sup>ごくわず</sup>極僅かに過ぎず、そして彼ら自身は財産と思える物なども無く、所有したいとも思っていないのが、原住民インディオなのです。



ラス・カサスの肖像画・コロンブス図書館・ウィキペディアより

彼らの食べ物と云えば、且つての聖なる聖教徒(カトリック)たちが修行時代に荒れ野生活で、口にしていた食事と同じくらい僅か<sup>わず</sup>で<sup>つま</sup>しく、不味<sup>まず</sup>と思える様な食べ物であります。更に、インディオの男女は、普段何も身に纏<sup>まと</sup>わず、只恥部<sup>ただ</sup>を隠しているだけで、身体を一バラ半か二バラ(1バラ=84 cm)の四方の綿製の布<sup>マンダ</sup>の様なものに包んでいるだけです。彼らは一枚の<sup>こさ</sup>莫<sup>さ</sup>の上で夜を明かし、せいぜい、両端を固定して吊るして網の上(ハンモック=アマーカ)で寝る位であります。彼らは我が聖なるカトリック信仰を受け入れ、徳の高い習慣を身に着けるには、十分な能力を持ち合わせています。彼らは神がこの世に創造された、あらゆる人間の中で、信仰へ導くのに障害となるものが取り分け少ない人達であります」と土民風土を述べている。



インディオのハンモック・大航海時代叢書 I

スペイン人は、創造主(神)から様々な素晴らしい性質を授かり、従順な羊の群れに出会うと、まるで何日も獲物にありついていない、飢えて<sup>たけ</sup>猛り<sup>ころう</sup>狂った虎狼やライオンのように、彼らに襲いかかる。スペイン人が40年前から今日に至るまで、なお行い続けているのは、且つての人が見た事も、本で読んだ事なければ、話に聞いた事もない残虐極まりない手口で金銀を掠奪し、インディオ住民の身体を切り刻み、殺害して苦しめて拷問し、破滅へと追いやったのである。

ラス・カサスが初めてエスパニョーラ島(地図P87参照)へ上陸したのは1504年で、島には約300万のインディオが暮らしていたが、今では僅か<sup>わず</sup>か200人しか生き残っていない有様になっていた。ラス・カサスは『簡潔な報告』の著にスペイン人の非道な行為の事例を記述している。

スペイン人はエスパニョーラ島の住民が絶滅したことを知ると、今度はルカーヨ人(ルカーヨ諸島地図P87)をエスパニョーラ島へ奴隷として連行して来たのである。

その様な島々からスペイン人が土民を連れ去ることに頭を痛め、その島々へ一人の立派なキリスト教徒ペドロ・デ・イスラという人が、憐れみの情に打たれ、もし生き長らえている者がいるなら、キリスト教に改宗させ、宣教師の手に委ねようと思立ち、一隻の船に乗り3年間(1523~1526年)島々を巡った処、生き残っていたのは僅か<sup>わず</sup>か11名に過ぎなかったという。広大な諸島を歩き回ったのであるが、我々の同胞スペイ

ン人が、残酷な仕打ちや邪悪な振舞で、この諸島の人々を全員死へ追いやり、地域一帯を壊滅させた結果、その地は荒れ野原と化していたのである。

従って、我々が確信して正真正銘の事実と判断している処では、この40年間に、男女・子供を合わせて1200万人を超えるインディオが、キリスト教徒らの行った暴虐的かつ極悪無惨な所業の犠牲になっていたのである。誤解を恐れずに述べるのなら、その犠牲の実数は1500万人を下らないであろう。・・・(中略)。

キリスト教徒らがあれだけ大勢の人を殺め、無数の魂を破滅させるに至った原因は、只一つ、スペイン人が彼らから金を取り上げることを目的にした結果であった。出来る限り短時日で財を築き、その財を自己の最高位に就こうとした出世願望に原因があった。キリスト教徒たちが世界に類を見ない、飽くなき欲望と野心を抱いた記述が『簡潔な報告』がインディアスたちの破壊の報告となっているのである。・・・(中略)。



- 1 ユカタン
- 2 ハリスコ
- 3 コリーマ
- 4 ミチョアカン
- 5 イビルシング
- 6 トウトゥテベケ
- 7 グアテマラ
- 8 クスカタン
- 9 ニカラグア

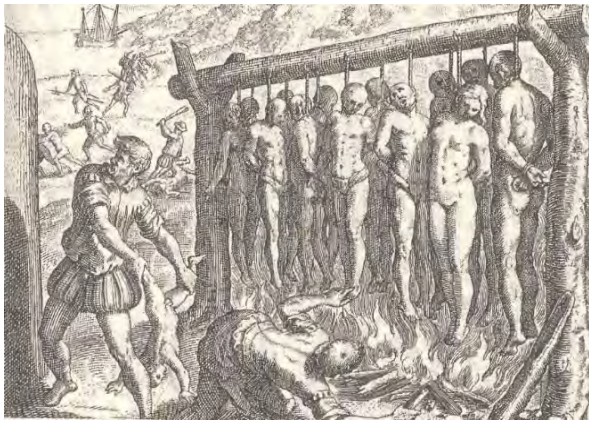
16世紀の中南米諸国図  
『インディアスの破壊についての簡潔な報告』ラス・カサス著・岩波文庫より



エスパニョーラ島地図『インディアスの破壊についての簡素な報告』より



『簡潔な報告』からその殺戮現場の版画を見てゆく



エスパニョーラ島 版画 1



版画 2・銅版画

版画 1・[版画部分の説明と解説のみとします] 足がようやく地面に着く位の高さの大きな絞首台を組み立て、こともあろうに、我らが救世主と12名の使徒を称え崇めるためだと言って、インディオを13人ずつ1組にして、絞首台に吊り下げ、足元に薪を置き、それに火をつけ、彼らを焼き殺したキリスト教徒らがいた。

版画 2・キリスト教徒はインディオのカシーケ(首長)や貴人を殺すのに、次のような手口を用いた。つまり、彼らは木の叉に、小枝や枝を編んで作った鉄網のようなものを載せ、それに彼らを縛り付け、網の下からとろ火で炙ったのである。すると、カシーケたちは苦痛に耐えかねて悲鳴を上げ、絶望のうちに息絶えた。

エスパニョーラ島(補足)・・・インディアスへ渡ったキリスト教徒が最初に上陸した島となり、原住民インディオに甚大な危害と破壊をもたらしたエスパニョーラ島となる。土民から女性や子供を奪って従わせ、食糧をも取り上げ、更に暴力で迫害を加えた。終に村を治める首長たちにも暴力を揮うようになり、キリスト教徒隊長(カピタン)が、島で最大の権勢を誇った王(カシーケ)のその妻を強姦するという、厚顔無恥な振舞いに及んだのである。以来、インディオたちはキリスト教徒を島から追放する抵抗に出た。しかし、彼らには貧弱な武器ばかりで、子供の遊びと変わりなく、キリスト教徒らは馬に跨り、剣と槍を振り回し、子供、老人、身重の女性までも斬り刻んだ。又、インディオに乾いた藁で縛り、藁小屋に火をつけて焼き殺した。インディオの逆襲で、スペイン入植者が一人殺された場合、キリスト教徒はそれを口実に、インディオへの仕返しに100人の土民を殺すべしという掟を定めていた。



版画 3

版画 3・総督は部下に命令した。出来るかぎりの大勢の首長を騙して、藁造りの大きな家屋の中に閉じ込め、家屋(集会場)に火を放つよう命じて、キリスト教徒らは彼らを焼き殺した。閉じ込められなかった首長やインディオたちを槍で突き刺し、剣で斬りつけ、土民の女王に対しては、彼らは敬意を表して絞首刑にしたのである。



版画 4

版画 4・キリスト教徒は3、4アローバ(1アローバは約1.5kg)の荷物をインディオに背負わせ、100~200レグア(560~1000km余)を移動し、重い荷物のため、背中や肩はすりむけても使役された。インディオは命じられた仕事に励んでいる時も、鞭や棒で、あるいは平手や拳骨なぐられインディオの苦しみは語り尽くせなかった。



キューバ島 版画 5

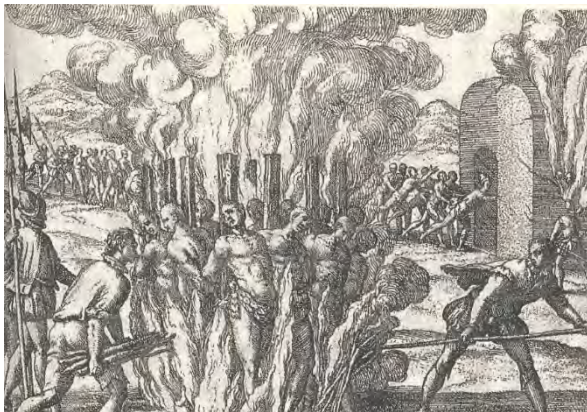


版画 6

版画 5・修道士はカシーケ(首長)に言った。「もし私の話を信じるなら、栄光に満ち溢れ、永遠の安らぎが得られる天国へ召されるが、信じなければ地獄に落ち、未来永劫に罰を受け苦しむ事になる」と。カシーケは暫く考え「キリスト教徒も天国へ行くのですか」と尋ねると、修道士は「ええ、善良なキリスト教徒であれば」、カシーケは言った「天国などには行きたくない。いっその事、地獄へ落ちたい、キリスト教徒が居るような所へ行きたくない、二度とあんな残酷な連中の顔を見たくない」と言った。

版画 6・キューバ島を統治していた総督(ゴベルナドール)は、首長の身柄を拘束し、地面に立てた杭に縛りつけ、両脚を引っ張り、足元に火をあて、更に多くの金を差し出すよう強要し、カシーケ(首長)は部下を館へ遣り、3000 カスティリャーノ(スペイン金額)の金を持参させた。しかし、それでもスペイン人は満足せず、再び首長に拷問を加えたが、首長はもうそれ以上金を提供出来なかった。スペイン人は首長の足を炙り続けたので、とうとう足の裏から骨が突き出てしまい首長は息絶えた。

キューバ島(補足)・・・島にアトゥエイという名の首長(カシーケ)いた。彼はキリスト教徒の数々の極悪非道から身を守るために、エスパニョーラ島から部下を連れてキューバ島へ逃げて来ていた。キリスト教徒らキューバ島へもやがてやって来た。部下たちは「邪悪な連中は、ここでも同じ様な事をするだろうか」。カシーケは「いや、それだけではあんな酷い事はしない。連中には一つ神がいて、それを心から崇め、こよなく“金”(神)を愛しているのではないか、と。だから我らの“金”を奪い、神に崇めるために“金”を奪うのだ、と。首長は金製の装身具が一杯詰まった籠を手に取り、「これがキリスト教徒たちの神なのだ。彼らの神のためにアレイト(舞と踊り)を踊ろうではないか。そうすれば、たぶん神が大喜びして、我らに悪事を働かないよう、キリスト教徒に命じてくださるだろう」。部下たちは「そうしよう!」と叫んだ。しかし、首長はキリスト教徒に捕まり木に縛られ火炙りにされた。



版画 7



版画 8

版画 7・辛うじて虐殺から生き延びた大勢インディオが、満身血だらけになって現れた。彼らはスペイン人に殺さないでほしいと涙ながらに訴え、慈悲を乞うた。しかし、スペイン人は彼らに対し、一片の慈悲心も同情の念も持ち合わせていなかった。たちどころに、ずたずたに斬りきざまれ、隊長(カピタン)は部下に捕縛している 100 人以上の首長を連れ出し、地面に立てた杭に縛り付け、火あぶりにするよう命じた。

版画 8・スペイン人一行は、 Cholula (メキシコ大ピラミット地区) からメキシコへ通じる入口に、 2 レグア (レグア 5572m) 離れた場所へ到着すると、モテンスマ王 (アステカ王) は大勢の首長達に、金や銀、それに贈り物を持たせて出迎えて宮殿まで案内させた。ところが、他のインディオの者から聞いた話では、スペイン人は謀略をめぐらし、モテンスマ王の身柄を拘束して、80名の部下を配し足枷を嵌めたのである。



ハリスコ地方 (メキシコ中部の州) 版画 9



版画 10

版画 9・インディオは騎馬に対抗するために罠を考え、道の中央に穴を掘り、落ちたら馬の腹部に突き刺さる計画をたてた。しかし、馬が罠にかかったのは僅かに 1 ~ 2 度で、スペイン人の仕返しに合いインディオは全員捕えられ、老若男女関係なく穴の中へ投げ込まれた。穴の中は串刺しになったインディオであふれ、母親が子供と折り重なって倒れている姿、胸が引き裂かれる光景であった。

版画 10・スペイン人は村々を攻撃する時、インディオの同士討ちをさせるため、既に降伏しているインディオに食事を与えず連れて行き、敵のインディオと戦わせ、捕虜を人食する事を許し、無法者の陣営には人体解体処理場のようなものがあり、子供は焼かれ、大人は手足を切断食用され、インディオは手足がもっとも美味だと無法者たちは言っていた。



版画 11



版画 12

版画 1 1・ある地方を治めていた王(首長)は無数の人々の行列を従えて、スペイン人に大量の贈り物を差し出した。処が王を拘束して王が莫大な量の金銀を所有していることを知られた。無法者たちは、出来る限りの大量の財宝を奪うために、王に拷問を加え、まず両足に枷(刑具)をはめ、身体を大の字に伸ばし、両手を棒に縛り付け、足元に火桶を置き、少年が布切れで作った油を滲み込ませた火玉を持って、皮膚が焼けるように火玉を足に擦りつけた。王の片側には、キリスト教徒の男が王の心臓を目掛けて大弓を構え立ち、更に恐ろしい獐猛な犬を嗾け、王の身体を八つ裂きにし、スペイン人は財宝の在処を白状させた。このようにしてスペイン人は金や銀を差し出させるために、カシーケ(首長)を苦しめて殺害したのである。

版画 1 2・ハリスコ地方(メキシコ中部)に入り、インディオたちに彼等から金を手に入れるため非道な悪事を開始、村々を焼き払いカシーケたちを捕えて拷問し、又、土民を捕まえて奴隷にして数えきれない程のインディオを鎖に繋いで連行した。産後間もない女性たちにキリスト教徒たちの重い荷物を担がされ、過酷な使役の労働の末に、食べ物をあてがえられず、飢餓に苦しみ、女達は幼子を道端に投げ捨てた。



ユカタン王国(ユカタン半島) 版画 1 3



アタパリバ皇帝を火炙りの刑に処す・版画 1 4

版画 1 3・1526年、神に見捨てられた総督(フランシスコ・デ・モンテーホ)がユカタン王国に任命されて来た。ユカタン王国は大勢の人が平和に暮らしていた。総督は300人の部下を引連れ、善良かつ無辜の住民に、情け容赦ない戦争を仕掛けて捕虜(戦争捕虜は戦勝品)とした。この土地は金が産出しなかったため、インディオを殺さずに全員を奴隷売買にし、奴隷の噂を聞きつけ数多くの奴隷船が港は船が溢れた。スペイン人は数匹の獐猛な犬を連れ、逃げたインディオを探し回り見つけ次第に犬を嗾け、犬から逃れることが出来ない女性は嬰兒を足に縛り付けて首を吊った。時すでに遅く犬が幼児をずたずたにし、幼児が息絶える直前に修道士は洗礼を授けた。

版画 14・1531年、有名な無法者(フランシスコ・ピサロ)が部下を率いてペルーの諸国へ向い、先住民たちを彼は信義に背き約束を反故し、ひたすら村々を破壊して破滅して移動した。プグナ(ブナ)と呼ばれる島に入り、島人はスペイン人を天から舞い降りて来た使者の如く出迎えたが、僅<sup>わず</sup>か6カ月で住民たちの食糧を食べつくし、旱魃<sup>かんぼつ</sup>・凶作のための非常食をも食い尽くし、その上支払った代償は、剣・槍で突き刺して命を奪い、インディオを奴隷狩りしてプグナ島を無人の島にしてしまった。

そしてスペイン人はトゥンバラ(ペルー北部トゥンベス)に着くと、村人が恐ろしさに逃げだすと、インディオは反乱を起こす輩<sup>やから</sup>と決め付け、スペイン国王に背く反逆者として脅<sup>おど</sup>した。当地のインディオ村人から、最早<sup>もはや</sup>インディオの手元に金が無いと分かるのでピサロはインディオたちをスペイン国王の家臣として迎え入れたのである。

数日後、インカ帝国皇帝のアタワルパ(13代帝王)は、名ばかりの武器を携え、裸同然の部下を従えてピサロ将軍の前に姿を現し、アタワルパは軍隊が持つ剣の切れ味、槍の殺傷力、馬を乗り回すスペイン人の正体に全く知識がなかった。

皇帝アタワルパはスペイン人の陣営に向かって、「スペイン人とやら申すのは何處に居るのだ。お前たちは私の部下を殺し、村々を荒らして金銀を奪った。お前たちがその償いをするまで、私は一歩たりともここを動くまい」と、言い放った。

するとスペインの軍隊は皇帝を取り囲み、輿<sup>こし</sup>ごと皇帝を拘束し、ピサロは皇帝の身代金交渉をして、アタワルパは400万カステリャーノ(貨幣額)を提示し、金の到着次第、皇帝の身を解放する約束をした。

実額は1500万カステリャーノの“金”を差し出す約束をさせられた。しかし、ピサロ将軍はその約束を反故<sup>ほご</sup>にして、信義を踏みにじり、スペイン軍は皇帝に言い掛りをつけ、皇帝を火炙<sup>あぶ</sup>りの刑に処すると決めたのである。

皇帝アタワルパは言う、「火刑にされたら、朕<sup>ちん</sup>の靈魂がこの世に帰って来ることができない、だから絞首刑せよ」と、言ったが、結局は絞首刑の後に火炙りにされた。

ピサロ軍は更にクスコ街から金の噂を耳にして、スペイン軍隊が宮殿周りに押し寄せ、凶暴かつ残忍な所業で膨大な金、銀、宝石を掠奪したと伝承が残るのである。

(※アタワルパの拘束と死刑までの説話は、第2章、第13代皇帝・アタワルパ～迫るピサロの軍事計画、P51～53参照)

ラス・カサス著『簡潔な報告』の終わりの〔付記〕に次のようにある

付記・「・・・1543年、マドリードの町でいくつかの法令と布告が<sup>注</sup>公布された。」

公布とは「国王陛下がインディアスの統治並びにインディオに対する正しい扱いと保護を目的として新たに制定された法令および命令」と云い、略して「新法」と呼ばれた。1542年11月20日に制定された全40条から成る植民法は、翌年6月4日、6カ条が補足され、同年7月8日に公布された。インディオの奴隷化禁止、インディオの強制労働の禁止、新しいエンコミエンダ<sup>注</sup>制の中止など、インディオの保護と正しい統治を目指して制定された。]

**エンコミエンダ制**・[スペイン人植民者は先住民インディオを金銀の採掘、<sup>しんじゅ</sup>真珠採取、農業経営等に使役した。1503年国王フェルナンドは、「征服者の褒賞として、先住民のキリスト教化を名目に、先住土民を委託され、貢物・労働を強制する権利を与えられた」。「エンコミエンダ」制を公式に許可したのである]。これによって植民地化は完成するが、その実態は奴隷制と変わらなかったのである。そして、インディオの保護者エンコメンデロが、被保護者であるインディオのために教会を建設し、聖像と礼拝用具を備えると、規定しているが実態はかけ離れていた。

付記として・「南米ペルー居るスペイン植民者は、法令(撤回・修正)を訴えるという名目で<sup>注</sup>反乱を起こした。その最大の理由は、新天地で既に手に入れている地位や財産を放棄する事はできないからだ。永代隷属民を保有しているインディオを解放することは、植民者たちに実に不都合な布告であった。インディオの殺害は止められるが、家内労働に使役している以上、国王でさえそれを阻止することは叶わない。なぜなら、身分の上下に関係なくスペイン人は誰も彼もが、程度の差こそあれ、国王(納税の義務を果たしている)に公然と仕えているためだとしている」。

**反乱**・「「新法」の実施に際し、王室は巡察官5名をペルー国へ派遣し、ペルー国内では、ゴンサロ・ピサロ(フランシスコ・ピサロの異母弟、共にインカ帝国を征服)が「新法」の撤回を要求した、ペルー副王ヌニェス・ベラと対峙し、反乱を続けヌエバ・エスパーニャ副王領(カリブ海等のスペイン帝国の副王領)では、メキシコ市会が本国へ代表団を送り、「新法」の撤回・修正を求めた。その結果、1545年10月、国王は「新法」の中で最も重要なエンコミエンダ制廃止条約項等を撤回するに至った。」

「解説」には次のようにある・・・ラス・カサス(バルトロメ・ラス・カサス 1484～1566年)が、スペイン本国が押し進めている新大陸征服の正当性を否定し、被征服インディオの擁護に尽すスペイン人聖職者として、「インディオの使徒」、「アメリカの父」と讃えられている。元々ラス・カサスは、征服者(コンキスタドル)として新大陸へ 1502年に渡り、エスパニョーラ島やキューバ島で数々の征服戦争にも参加して、論功行賞として先住民インディオの分配に<sup>あづか</sup>与り、植民者として開拓事業にも携わっていた。

しかし、植民者たちの進める征服戦争は、非道な実態となっており、エンコミエンダ制(土民を改宗させる名目で入植者に委託配分)による、インディオの悲惨な状況をつぶさに目撃したのである。ラス・カサスは、「回心」(神に背き罪を認める信仰体験)を経験し、ドミニコ会(1216年ローマ教皇ホノリウス3世認可カトリック修道会)に入会し、<sup>きてん</sup>帰天(死去)するまで、一貫して正義の征服戦争として捕虜を奴隷にし、スペイン征服政策とエンコミエンダ制の即時撤廃を求め、この訴えた活動を記録文書(クロニカ)執筆したのである。ラス・カサスは、スペインの植民政策に異議を唱え、「人類はただ一つ」の信念の基に、虐げられた人々の生命の自由と擁護に半生を捧げたので、「反植民地主義の闘士」、「人権擁護運動の先駆者」と評価された司教であった。

※1552年、この『書簡』がスペイン・セビーリャで印刷されたが、当局の許可を得ず刊行したため、スペイン国王フェリペ2世は、1571年この全文書をエル・エスコリアル修道院に保管とした。更に1579年に閲覧禁止となり、スペイン語で2回目の刊行は1646年バルセロナで、しかし、1660年にアラゴンの異端審問所が禁書とした。

スペイン政府は「国の威信を傷つける有害な書物」として所持も読書も禁じた。禁書の扱いは1879年迄続き、スペインと宗教や植民地政策に対峙した国々は、反スペインの論拠として翻訳され読まれた。国外版は、1578年オランダ語版出版、1579年にフランス語版、1583年に英語版、17世紀にイタリア語版、ドイツ語も出版された。

(参考文献『インディアスの<sup>はかい</sup>破壊についての<sup>かんけつ</sup>簡潔な報告』ラス・カサス著・染田秀藤訳・岩波書店。又同書推薦『インディアス史』①～⑦、同著・長南 実訳・石原保徳編・岩波書店)

ラス・カサス著の『簡潔な報告』に反論文を視る・・・『インディアスにおける福音宣教—多様な問題に関する宣教師たちの見解の相違—』(谷川義美著・南山大学機関リポジトリ)より、反論文を視て見る。



序に・・・第5代ペルー副王フランシスコ・デ・トレド<sup>注</sup>は、ペルーに於けるスペイン支配を確立した重要な人物であり、彼が副王領を治めた時期には、スペイン人によるペルー征服の是非と、先住民の支配をめぐる、宣教師たちの間では激しい神学論争が行われていた。16世紀に於けるこの神学的論争は、インディアスで宣教活動を行っていた宣教師たちに多大な影響を与えたのである。インディアスの宣教に関する2つの大きな潮流を明確に書き記した者は、副王トレドの従兄弟、ガルシア・デ・トレドで、ドミニコ会員であった、ガルシア・デ・トレドという人である。彼は、『バルトロメ・デ・ラス・カサスに反論するユカイという匿名の覚え書』文書は一般に『ユカイ文書』<sup>とくめいしょ</sup>と言われている匿名書(匿名で書いた文書)の著者である。

1571年に出版されたこの『ユカイ文書』は、スペイン王室の副王を通してインディアス大地を支配する正統性を実証し、ラス・カサスの思想と著書や言動などを批判し、それ等に抗議することを目的としたと、冒頭に述べている。トレド副王の治世時は反ラス・カサス運動が盛んとなり、トレド副王派對ラス・カサス派とに分かれて、インディアスの宣教活動に激しい神学的な闘いが繰り広げられていた。・・・(中略)

注・フランシスコ・デ・トレド(副王在位 1569～1581年)トレドがリマに赴任した頃のペルー一国は(中南米植民地4つの内2つ目が副王領となる)、南アメリカ大陸の西側、南東はボリビアからアルゼンチンまで副王領になっていた。1570年、ポトシ銀山の「銀」(P79～81参照)の増産に貢献している。又、インカ帝国政策にも力を注ぎ、スペイン傀儡政権のインカの最後皇帝を1571年に処刑している。

**スペイン王室支配の正当性の文書とは・・・『ユカイ文書』の冒頭に、**

《「スペイン人がインカ帝国を征服する以前には、インカ帝国がインディアスの諸民族を強権をもって統治していたことは、スペイン人が先住民(インディオ)をキリスト教化するのに役立ち、またインカ皇帝の治世より、先住民に洗礼を施すことが容易な状況になっていたことは、神の摂理であると言わざるを得ない。神の計画によって、インカ帝国の圧制はキリスト教化され、カトリック教会とスペイン王室が一致して、インディアスを統治することが可能になった」と、述べている。

しかし、ラス・カサスはインディアスの大地をスペインによる統治を認めず、インカ国にはインカ人の国王がいて、自国を支配することが正しいことで、先住民は征服

される以前の生活に戻るべきであると主張しているのである。

同様の観点に立つドミニコ会員のフランシスコ・デ・ヴィトリア(1492～1549)は、サラマンカ大学(マドリードにある大学、12～13世紀頃の中世大学)で、1539年に特別講義で、『インディオについて』という著書を出版し、誰にインディアスの地を所有する正当な権限があるかについて、次のように記している。

《「・・・スペイン国王は全世界の支配者ではないと前置きして、仮に国王が世界の支配者だとしても、それを理由に異民族の国々を占領したり、且つ領主を廃位して、新たな領主を擁立したり、税を徴収することはできない。また先住民が教皇の権威を認めようとしなくても、それを理由にして彼らと戦争を仕掛けることや、彼らの財産を奪うこともできない。それに、キリストの福音(キリストの教え)が述べ伝えられたばかりの先住民が、即座にキリスト教を受け入れないという理由だけで、スペイン人が彼らに戦争を仕掛けることはできないとしている。結論として、スペイン人が到来する以前は、インディアスの地は先住民が真の所有者であったので、スペイン人が彼らを支配することは正しくなとしている」。》とラス・カサス派の考えである。(『ラテンアメリカの歴史—史料から読み解く植民地時代』 染田秀藤・篠原愛人監修)

この様な考え方に対して、ガルシア・デ・トレドは、スペイン国王以外にインカ帝国を治められる正統者は無く、且つ絶対的支配者は存在しない。先住民を征服以前の生活に戻せば、また先住民は偶像崇拜を始めるに間違いない。と反論し、副王トレドは国王宛への「報告書」の中で次のように述べる。

《「・・・これらのインディオが、魂並びに財産に関する重大な事柄を、保護者を必要とする人々であることは証明されている。彼らを導き、統治する人がいなければ、彼らは破滅してしまう。また、もしここにイエス・キリストの信仰を彼らに教えるスペイン人がいなければ、彼らはそれらを理解せず、魂の事、財産の事でも、完全に騙されてしまうと考えられるからです。なぜなら、確かなことだが、彼らは財産の管理、領土の正しい秩序や統治に必要な事柄についても何も知らず、そのため、何度も騙されてきたからです」。》(グスタボ・グティエレス著『神か黄金か』 染田秀藤・岩波)

トレド(副王)はスペイン人の援助がなければ、先住民は人間らしい生活、またキリスト教徒としての生活もできない。『ユカイ文書』の著者は、スペイン国王がインディア

スを小罪(わづかの罪)さえも犯すことなく、所有できたことは神の摂理(神の意志)であると述べ、副王トレドのペルー統治の正当性を確証しようとしている。・・・(中略)

トレド派が、ラス・カサスの見解に抗して、スペイン国王のインディアス支配を弁護したのは、ラス・カサスの意見が既にローマ教皇を動かし、スペインの支配に変更を迫るような回勅(正当性を裏付ける公文書)が出されたからである。

ラス・カサスは、ペルーの重大な問題である、エンコミエンダ制(王室から先住民をキリスト教に改宗させる委託義務)と、エンコメドロ(原住民委託を受けた個人)を激しく非難しながら、スペイン国王は先住民に対する正義を守らず、彼らを圧迫や圧制から解放しなければならない。そして、先住民から租税を徴収できないと、述べて先住民にはスペインの王室の財政を救済する義務はないとした。又、国王はインディアスから1レアル(金額)さえも手に入れることはできないと主張し、王室のインディアス政策に対する厳しい批判を加えた。ラス・カサスは『全ての民族を真の宗教へ導くための唯一の方法について』著書で、宣教師たちには模範的な生活によって、先住民にキリストの教えが正しいことを理解させ、先住民を平和的改宗化へ導くようにする事が求められていると述べている。・・・(中略) (『ラス・カサス伝』染田秀藤著・岩波書店)

ラス・カサスの人柄に関する批判・・・『ユカイ文書』の著者ガルシア・デ・トレドは、スペイン在住時はラス・カサスの見解や言動を正しいと固く信じ、スペイン人先住民からペルーの支配権を奪うのは不当であると確信し、賛同もしていた。

しかし、彼がペルーに来て初めて現地を見聞確認して、その逆であることが分かり、余りにも知らな過ぎたことを反省し、自分はラス・カサスに騙されていたと告白しているのである。又、著者はラス・カサスが性格的に立派な宣教師の素質を備えているが、インディアスの問題になると極端に激怒し、重要な問題を誤解する傾向がある。その結果、インディアスの問題に関する自説を、偽りの資料と推理に基づいて国王をはじめ諮問会議、エンコメンドロ(先住民の個人委託)、修道会員、司教、神学者や大学教授まで影響を与え、混乱させていると言っているのである。・・・(中略)

トレドは更に、「事実、ラス・カサスについて何も知らなかった。ラス・カサス自身は生涯一度も、この土地に足を踏み入れたことは無かった。噂によれば、彼は2度に亘り、この地へ渡航を思い立ち船に乗ったものの、結局、目的地に着けなかった」。(グスタボ・グティエレス著『神か黄金か』染田秀藤訳より)

著者(トレド)が言っているように、ラス・カサスは現在のキューバ、ニカラグア、メキシコに渡り、司教にもなっているが、ペルーの不穏な情勢を知って渡航を断念して、ペルーのその詳しい事情を把握していたとは言いがたいと、ある。・・・(中略)

トレドは、先住民インディオの人間としての本性に触れ、彼らはキリスト教徒になるのを学ぶためには、まず人間であることを知る必要がある。社会的行為の規律や理性に従った生活様式を彼らに強要すべきである。この社会的行為というのは、スペインの様式のこと、ヨーロッパ社会生活以外の様式は、全て劣っており、人間的でないと考えるのが当時の風潮であった。・・・(中略)(『神か黄金か』染田秀藤訳より)

**福音(キリストの教え)と黄金との関係について**・・・ガルシア・デ・トレドが著した『ユカイ文書』の目的は、インディアスの富を搾取する征服者や、エンコメンデロの権利を、神学的に擁護することであった。このことは『ユカイ文書』の冒頭に何故、金銀の鉱山がインディアスの地に存在し、それを採掘するのか、その理由について論じ、スペイン国王が決めた規定に従って、インディアスの金や銀の採掘を行うことは正しいことであり、又、必要なことであると述べている。

ガルシア・デ・トレドは、ヨーロッパのカトリック教会を敵の攻撃から守るには、多額の資金が必要であり、その財源の一部をペルーの鉱山採掘に求め、しかも、神はペルーの鉱山や財宝を採掘する正当な理由を自分に示された、と言い切っている。

その上、ペルーの黄金はカトリック教会を守備するだけではなく、ペルーをはじめインディアスにおける福音の宣教活動のために、摂理的な役割を担うことになったとも言っている。(グスタボ・グティエレス著『神か黄金か』染田秀藤訳)

彼のこのような主張に、ラス・カサスは真っ向から立ち向かい、スペイン人たちがインディアスに滞在しているのは、ひたすら金と銀のためであるから、先住民たちは貧欲なスペイン人たちに鉱山の在り処を教えないように進言し、スペイン人の鉱山採掘を略奪行為だとして厳しく非難している。

このように2人の激しい対立論であったが、当時インディアスで活躍していた宣教師たちは、みな高い宣教精神を持ち、それらを達成するために、インディアスで採掘しなければならないのが金銀であると、確信を抱き宣教活動に従事していたといわれている。(L・ハンケ『アリストテレスとアメリカ・インディアン』佐々木昭夫訳)

『ユカイ文書』の著者トレドは、インディアスにいる先住民たちに欠けているのは、人間としての資質であり、彼らに洗礼を授けてキリストと結婚させるには、あまりにも先住民たちが醜くて、粗野で、愚鈍、且つ無能で、しかも不潔なのである。

結婚のために多額の持参金が必要のように、スペイン王室と副王トレド側にあると主張している。トレドは、哲学的なことと霊的な事柄とを上手に組み合わせ、黄金の香りが宣教師たちを神への愛に刺激し、彼らをインディアスの地に渡るように動かしたのだという。と言い切っている。・・・(中略)

トレドは更に、インディアスに豊富にある鉱山と財宝の香りが、人間としての資質に欠ける先住民たちに、福音を述べてくれる宣教師たちを招いた、といい、黄金によって人間の救霊、破壊が決定されることはありうるとも言って、

《「インディオについて言えば、これらの鉱山と財宝と富こそが、彼らが予め定められて救霊を得るための妨体であった。なぜなら、これも明白なことだが、鉱山と財宝と富のある所には、却罰(永劫にわたる罰)が下されるからである。長年の経験から明らかかなように、そこには福音が伝えられることは決してないのである。つまり、金・銀など、持参金のない土地へ行きたがる兵士、指揮官、さらに福音を伝える使者はいないのである。』》と、述べている。

そして、富は福音を惹きつけるが、貧困は福音を遠ざけ、地獄の苦しみを味わわせる罰を受ける、印しるしであると言っており、これは明かにキリスト教理に反していると言わざるを得ない。・・・(中略) (グティエレス著『神か黄金か』染田秀藤訳・前掲書)

『ユカイ文書』の著者は、鉱山は蛮人である先住民に有用であり、また彼らがキリスト教の信仰を受け入れ、救われるためには神が鉱山を与えて下さったのに、ラス・カサスは、悪魔の手先となってインディアスにある全ての鉱山は、先住民の所有物であると吹き込んで、彼らを地獄に追いやる結果となったと、述べている。

「悪魔(ラス・カサス)は先住民に鉱山や財宝を隠せ、鉱山がなければスペイン人やキリスト教徒はペルーから自国に帰り、先住民たちは以前のように偶像崇拜と、昔の楽しい生活に戻れると告げた。この悪魔のお告げの内容は、司教の位にあったラス・カサスの見解と同じで、まさに彼は悪魔の手先であったと言わざるを得ない。黄金がなければ先住民には福音も救いも無い、悪魔はペルーの地に黄金が福音をもたらす有効な手段であることを見抜いて仲間を探していたのである。・・・(中略)

又、ガルシア・デ・トレドは、先住民たちがキリスト教の信仰に生き、救いを得ることができたのは黄金のお陰であり、この黄金がなければ彼らは地獄に落ちる、と言っている。このような考え方は『ユカイ文書』を支える神学の中心をなしている思想であり、スペイン王室とエンコメンデロの権利を擁護する『ユカイ文書』の論証に意味と力を与えているのである。・・・(中略)

ここに同じドミニコ会であるガルシア・デ・トレドと、ラス・カサスとの神学上の相違が明白になっているのである。(グティエレス著『神か黄金か』染田秀藤訳・前掲書)

ペルーに到来したスペイン人は、黄金に飢えている事をはっきりと認識していた先住民ワマン・ポマ(P 68~78 参照)もクロニカ(記録文書)の『征服者』という項目の中で、

《「・・・金銀への貧欲に駆られて、総督、司教、司祭、修道者、商人や女性たちがペルーに向かった。彼らがインディアスを目指したのは金と銀のためだった。金と銀への貧欲のために、彼らは地獄に落ちるであろう。・・・そして、今の今まで、あの財宝欲は衰えず、そのためスペイン人は仲間同士で殺し合い、貧しいインディオを虐待している。金と銀のために、この王国の一部、つまり貧しいインディオが暮らしていた村々は荒れ果ててしまった。それもこれもみな金と銀のせいであると、スペイン人たちを厳しく批判している。」》と、記しているのである。

正に、15世紀末から16世紀に始まる大航海時代の新天地発見と、征服植民政策は、スペイン・ポルトガルの貧欲の縮図であったのである。後発国のイギリス、オランダ、フランスは、スペイン・ポルトガル両国の拠点地の隙間<sup>すきま</sup>をくりぬけて、17~18世紀に大西洋から太平洋への諸国へ、そして東南アジアへと、活躍の場を広げたのである。

## 終章 コロンブスの新大陸発見と世界への影響

コロンブスはイタリア・ジェノヴァ出身の商人出身という。生まれは1451年頃、父は毛織職人のその第3子の説で、名はクリストーバル・コロンの(ラテン語名)といい、クリストファー・コロンブス(英語名)となる。天文学者のトスカネリ(パオロ・ダル・ポッツォ・トスカネリ)はイタリアの天文学・地理学者で「地球球体説」を唱え、西廻り(大西洋)航路からアジアに到達できると、1474年にコロンブスに教授したのである。

15世紀初めにヨーロッパ強国は大航海時代が始まる・・・時は1415年、ポルトガル国のジョアン1世は、アフリカ、モロッコ北端のイスラム教徒の要衝セウタ(アフリカ北岸)の攻略に成功し、その戦闘に参加した王の第5子エンリケは、イスラム教徒によるヨーロッパ方面への広がる勢力を見て衝撃を受けた。閉ざされている地中海ではなく、アフリカ西海岸に乗り出せば香料・金銀を得ることができる国々に到達したことに衝撃を受けたのである。

南ポルトガル最南端サグレスの砦に観測所と航海技術所の集合拠点を設け、その後の行動は1420年にマデイラ諸島、34年にボジャドル岬、41年ブランコ岬、45年ヴェルデ岬、46年ジェパ河口へ、そして、シエラレオネの南端に到達したしたのである。

その後、1469年ポルトガル国ジョアン1世の孫アフォンソ5世が、リスボンの実力者フェルナン・ゴメス(航海商人)に交易権の一部譲渡を条件に探検航海を委託した。そして、パルマス岬(リベリア海岸南東端)を、1470年に黄金海岸のエルミナを71年に、サン・トメ島を72年に到達、アフリカ西海岸沿いを航海は進められ、73年に赤道を越え、82年にはコンゴ河口(中部アフリカ)に発見し標識を建ててに至った。

この時期よりヨーロッパ強国は爆発的な勢い

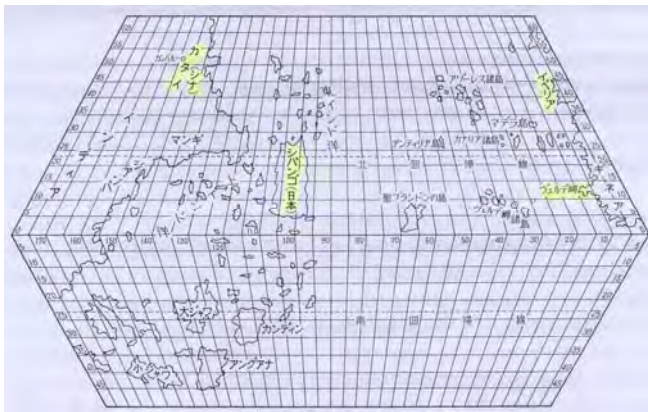


で、世界史の方向を一転させる大発見が矢継ぎ早に成し遂げられて行くのである。

即ち、バルトロメウ・ディアス(ポルトガルの航海者)が、1487年～88の航海で喜望峰(ケープタウン)を廻り込み、アフリカ南限地を極めた。その新天地競争に隣国のカスティーリヤ国(スペイン)は、フェルナンド王とイザベル女王の両王の資金投資によって派遣されたのが、**クリストバル・コロソ**(コロンブス)のカスティーリヤ国船隊となり、大西洋を突破してアジア(コロソはアジアに到達したと確信した所はカブリ海)へ到達したという知らせが、ポルトガルに1493年3月4日到達の情報が入った。

驚愕したポルトガルのジョアン2世は同時期に急逝し、彼の従弟のマノエル1世が、**ヴァスコ・ダ・ガマ**(ポルトガル航海者)の船隊を1497年に派遣して、ガマはヴェルデ岬(アフリカ大陸最西端・セネガル)から喜望峰(ケープタウン)を廻り込み、その翌年3月20日に、無事にインド・マラバール海岸(インド南部タミル地方沿岸地帯)のカレター(カリカット)に到達したのである。

又、西回り航路派のイタリア人**アメリゴ・ヴェスプッチ**(アメリカ名将の語源・イタリア探検家)が、彼は1497年～1501年の間に中米からブラジル、アルゼンチンに至る長い海岸線に沿って調査し、コロソ(コロンブス)の発見した島々・新大陸は、ヨーロッパとアジアの間に位置する「新世界=アメリカ大陸」であることを確認したのである。



トスカネリの考案東洋の位置(1474年・大航海時代1) 16世紀初期のカスティーリヤ王国(スペイン)

※キリスト教・・・カトリックはローマ教皇を頂とするキリスト教最大教派となる。イエズス会は1540年ローマ教皇の認可を受け設立しイタリア・ポルトガル・スペイン等の国となる。

16世紀初期に始まるルターの宗教改革によってプロテスタント(新教)が隆盛し、ドイツ・オランダ・イギリス等に広がる。ヨーロッパ列強国は布教活動の旗の基に新天地を求めて、貿易商人・軍隊・入植民たちが、新天地への進出により大航海時代が幕をあげたのである。



その後、1513年バスコ・ヌニェス・デ・バルボア(スペイン探検家)が中米パナマの地峡<sup>ちきょう</sup>(陸塊<sup>りくかい</sup>の細長い陸地)越えて、「南の海」から「太平洋」を発見し、それは大局的に見れば大西洋から太平洋への航路に繋がった。東からの太平洋航路は、インド洋・東アジアへと世界の航海へと繋がっていたのである。故に、当時の人々が考えている以上に、地球は大きく予想外の諸国が存在していた。その後マガリャンイス(マゼラン・ポルトガル人)とエルカーノ(スペインに仕えたバスク人探検家)の地球を証明したのである。

**コロン(コロンブス)の航路は・・・**コロンの1492年～1522年(1回目～4回目航海)の一連の大発見はヨーロッパの強国の大航海時代と植民地制覇への幕開けとなる。

**第1回目航海**・・・3隻の船団に90名の乗員が乗り、1492年5月12日パロス港(スペイン南部)を出帆<sup>しゅっぱん</sup>した。8月12日、カナリヤ諸島ゴメラ島のサン・セバスティアンに入港し船隊を整え、9月6日、同島を出帆した。10月12日、現在のバハマ諸島のワトリング島に到達し、この島をサン・サンバドル島と名付け、この島はインドアス(インド)の東の外れにある半島であると確信したコロンは、原住民をインディオと呼ぶ。10月28日、キューバ島の北岸へ到達して海岸線の諸点を探検した。



コロンブスはスペイン南西パロス港出帆、左ピ  
ンタ号、中サンタ・マリア号、右コニーニャ号

12月6日、ハイティ(イスパニョーラ島)に到達、同島で1カ月滞在し、その間にナビダーに砦を築いて39名を同地に残留させた。1493年1月4日出帆し帰国の途につき、船隊は同島沖でサンタ・マリア号が座礁して放棄の止む無きに至る。

その後、コニーニャ号、ピンタ号の2隻で航海して、2月14日、船隊はアゾーレス諸島沖で再び嵐に遭遇し、2隻の船は離れ離れになってしまった。コロンの乗船のコニーニャ号は、2月24日、サンタ・マリア島を出帆したが、3月3日、またもや大嵐に会い、翌4日に辛うじてリスボン港に帰着した経緯となる。

一方、ピタン号はガリシア地方のバヨナ港に入港していた。コロンは各地で大歓迎を受け、当時両王が居たバルセロナまで陸路を赴き、4月中頃に最高の礼をもってフェルナンド王並びにイザベル女王に迎えられ数週間王室に留まったのである。

第2回目航海・・・コロンの帰国は新大陸発見のニュースで国民は沸き上がり、国内外には感動を与えた。そして、直ちに2次航海の準備が開始され、選ばれた乗員1500名が17隻の船団を組んで、6カ月後1493年9月25日、カディス港(イベリア半島南西端)を出帆し、途中で小アンティリア諸島(西インド諸島)を発見、11月22日エスパニョーラ島に到着した。

28日にナビダー村へ到着次第、39名の残留者<sup>注</sup>を調べた処、島に残された乗組員は島の原住民インディオたちに襲撃や連れ出されて全員が殺されていたのである。コロンはこの問題を解決しないまま西へ向かい、モンテ・クリスティ(現ドミニカ共和国北西部)の地点のイザベラ市

に拠点(砦)を建設した。イザベラ市を拠点として4カ月間に亘り、奥地へ探検し金の採掘地を探し回った。更にキューバ島を再調査してキューバ島は一つの島であることを確認したのである。

その後、エスパニョーラ島へ戻ったのであるが、この5カ月間の航海でジャマイカ島を発見し位で、両島からは期待された金銀財宝は発見に至らず、コロンは貪欲<sup>どんよく</sup>に金を探し回ったのであるが、自身は疲労困憊<sup>こんぱい おちい</sup>に陥ってしまった。

実は、コロンのエスパニョーラ島不在中に、コロンの部下たちはコロンの指示とは別に(各自が勝手に金銀財宝を探す)反した行動に出ていた。その上、インディオたちの蜂起によって、エスパニョーラ島の統治は極めて困難な状態に陥ってしまった。

その上、コロンの実弟ディエゴは、これ等を收拾する能力に欠けていて、島を上手にまとめきれなかった。その原因は、エスパニョーラ島からは期待したほど、当初の計画通り、その金銀は見出せず、コロンも部下達も失望に陥っていた。コロン兄弟は、反徒の植民者やインディオの行動を鎮めながら、島の事業経営に努めたが、コロン総督の専制的な事業経営に部下たちの不満は高まっていった。

その不満の余波は、1494年11月に本国へ帰国したブイル神父らに報告をされ、コロン兄弟の事業計画に対する入植者の不満が、現地で高まっている事を王室に知らさ



エスパニョーラ島発見・1494年バーゼルで印刷コロン書簡の木版画『大航海時代叢書I』

れてしまった。王室はこの状況対処するために翌年10月、フワン・アグアード指揮官(王室の官吏)が4隻の船団を派遣してコロン行政の管理査察官として島へ送り込まれた。この植民地事情によりコロンは、急遽帰国を決意し、後事を実弟バルトロメーに託し、96年3月、225名スペイン人と30人の拘束の原住民(インディオ捕虜、ラス・カサスは批判)を伴い、2カ年半振りに本国へ帰還した。カトリック両王はコロンの帰国を、懇ろに労をねぎらったが、両王は次回の航海を援助すると約束したが、コロンは不安よぎるのであった。

(注・残留者の事件について部族長(カシーケ)に事情を正したが、要点を得るような解答は得られなかった。インディオの襲撃による39名の命を奪われた上に、その結末の真相は、結局あやふやになった事が、後にコロンがインディオの奴隷狩に繋がって行くのである)

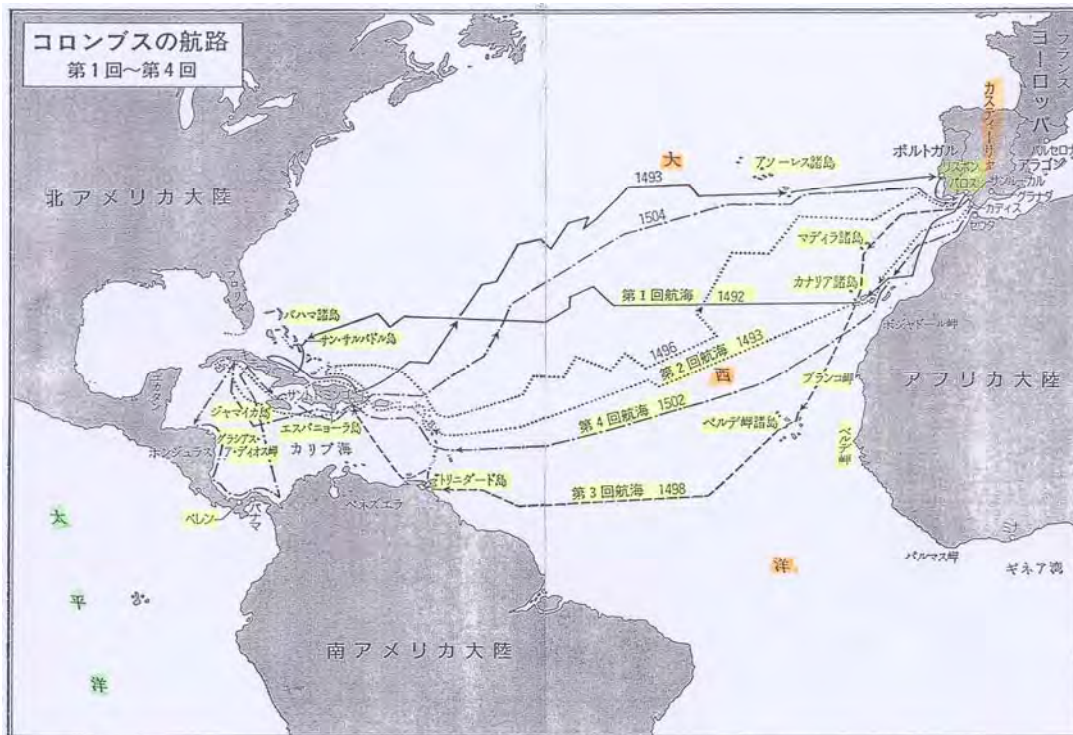
**第3回目航海**・・コロン(コロンブス)は国王(王室会議)の真意が読めず、王室全体がコロンに対する風当たりが厳しくなり、航海の準備は進展しなかった。そして、2年後に漸く、第3回の航海船隊6隻がまとまり、98年5月30日、サンルーカル港(スペイン・アンダルシア州)を出帆した。7月31日、トリニダー島(カリブ海)を発見し、更に同島南岸を沿ってアレナール岬(現ベネズエラ国)に到達、この地をグラシア(有難う)と名付け、コロンはこの地こそ聖書にある地上の天国であると思っていた。

コロンの居ない2年半の不在中に、エスパニョーラ島の情勢が更に著しく悪化し、金銀財宝を発見できない植民者達の不満が高まり、その上食糧不足、病気等の悪条件重なり、コロンの実弟と大判官(フランシスコ・ロルダン)が全ての方針で争いが起きてしまった。この様子を船乗員の帰国者から、給料不払い等々の問題が逐一国王に報告されたため、99年の春、現状調査のためフランシスコ・デ・ボバディリヤ(エスパニョーラ島2代目総督)を派遣となったのである。

ボバディリヤ総督の権限の行動は、どの様な権限と問題点に基づいたものか判らないが、国王の名に於いて現地で発した諸命令は、コロンと実弟を捕えて鉄鎖(手足を鎖で繋ぐ)を繋ぎ、船に幽閉した。1500年10月の初め、コロン兄弟は鉄鎖のまま本国へ送還されたが、船が出帆すると流石に、船長は鉄鎖を解くことを申し出たが、コロンは「王命があるまで解く必要はない」と答え、そのまま帰国したという。

12月12日、両王はコロン兄弟を自由の身にして宮廷へ出頭すると、国王はにこやかな顔と、優しい語り口で「鉄鎖を付したことは、予の命令よるものではない」と

言い、更に、国王は「誠に遺憾に思う、直ちに責任者を処分するであろう」と述べたが、しかし、この言葉にも拘わらず、王室は1501年にエスパニョーラ島の総督にニコラス・デ・オバンド(騎士団・エスパニョーラ島3代総督)に任命した。明らかにエスパニョーラ島の統治をコロン兄弟の手から離して、国王は有能なオバンドの政策に<sup>ゆだ</sup>委ねる事業方針に変えたのである。1502年2月13日、新総督は2500名(技術者含む)と30隻の大船団を組んでカディス港(スペイン南西部)を出帆したのである。



コロンブスの航路・第1回～第4回の航路図

**第4回目航海**・・・コロン最終航海に参加したのは、僅か140名を4隻に分乗し1502年5月9日カディス港(スペイン南西部)を出帆、両王からコロンは「エスパニョーラ島への寄港は差し控えるように」と厳命された。船隊は嵐を避けるため29日にサント・ドミンゴ港(ドミニカ共和国首都)へ入港を求めたが、新総督オバンドはこれを許可しなかった。嵐を避けてホンジュラス(現ホンジュラス共和国)へ、そしてコスタリカ、パナマへ到達したが、嵐のため2隻の船を失うことになってしまった。

1503年4月、旗艦とサンティアゴ号の2隻でジャマイカに到達したが、座礁して同地に1カ年の滞在を余儀なくされた。1504年6月28日ジャマイカを発し、サント・ドミンゴ港に到着するが、3代総督オバンド総督の態度は冷たかった。9月12日、22名を伴い実りある成果も無くサント・ドミンゴ港を出帆した。11月7日サンル

一カル港(スペイン・アンダルシア地方)に4回目の航海を終えて2年半の航海は疲労困憊こんぱいの帰国となったのである。

コロンは直ちに国王へ謁見を申し出たが、王室からは何の音沙汰もなく、その上、イザベル女王の身は危篤におちいり同年11月20日死去となった。

その後、コロンはフェルナン



コロンブスが到達した西インド諸島 (世界史の窓より)

ド王に謁見を許されたのは1505年5月であった。即刻、コロンは副王兼提督兼総督の世襲権を両王から認定されているので新天地の権利を強硬に主張した。

しかし、国王は経済的な特権以外に、一切の権利をコロン並びに子孫に認めようとしなかったのである。この新大陸発見の経緯については、コロンは国王並びに女王陛下によって、この航海の一回目から提督に命ぜられていたのであるが、国王の打算的な心中は、インディアスの西インド諸島の実態が(発見の新天地が無限大である事に国王は変身した)が明らかになると、国王はコロンとの結ばれた協約書を到底順守できない事に気が付き、提督権を否定したのである。

国王はインディアス新大陸をスペインの国領することを目指し、王は「提督には諸々の職を自らの思うままに処理した」と、述べているが、1506年5月20日、コロン(コロンブス)はバリャドリテ(バリャドリート)で痛風に侵された上に、国王には約束が破られ、託かこちながら(恨み嘆うらなげく)、54歳の生涯を閉じたのである。

(1回目～4回目記事は『航海の記録』大航海時代叢書Iより)

コロンブスが到達した新大陸の占有権問題について・・・コロンブスは新大陸インディアスの大地から金銀・香料・真珠が発見され始めたので、第1回目の大成功の成就をもって、到達した新天地は「東アジアのカタイ(中国)」と「ジパング(日本)」に到達したと思い込んでいた。コロンの新大陸到達の1493年の翌年、早くもスペインは新大陸領土の権利を確保するため、カスティーリヤ国王はローマ教皇に教書を要請したのである。そして、アソーレス諸島(大西洋に位置するポルトガル群島)の西100レグア

(約 560 km)の経線(地球の両極を通る南北線)の西の地を全てスペイン領とする事に成功したのである。当然、ポルトガルは自国の権利の経線を主張した。

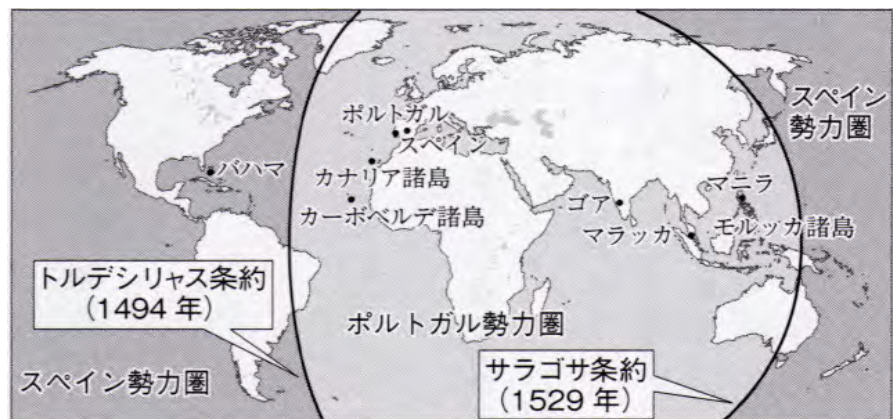
翌 1494 年、トルデシリヤス(カスティーリャ)でスペイン、ポルトガル両国は会議を開催してヴェルデ岬(現セネガルの岬)の西、370レグア(約2000km)南北に走る経線の、「東側の大地はポルトガル領、西側の大地はスペイン領」と取決められた。すなわち、これが「トルデシリヤス条約」(西経46度37分の子午線=東側はポルトガル領、西側はスペイン領)である。



コロンブスの肖像・『コロンブス』増田義郎著より

このトルデシリヤス条約の線引きは、発見した新領土を両国が地球上を2分して分け合う分界線となったのである。

カスティーリャ王(スペイン)によるインディアスの島々と新大陸の領有は、発見の実績に加え、時のローマ教皇アレクサンデル6世(在位1492~1503年)による、1493年5月4日付けの教皇勅書「インテル・カエテラ」(教皇子午線)を以て、「清廉で、神を畏れ、学問に秀で、住民にカトリックの信仰を伝え、よき習慣を教えることに熟達した聖職者を派遣すること」を条件として、「今回発見され、今後発見される全ての島々と陸地」をカスティーリャ王に贈与(ドナシオン)とすることを裏打ちされたのである。



左トルデシリヤス条約の条文(大航海時代地図より) 右サラゴサ条約経線は北海道釧路と網走のラインを通過、当時の蝦夷地域は日本国領域も不明確である。(『戦国日本と大航海時代』平川新著・中公新書より)

分界線(デマルカシオン=世界領土分割体制)・・・インディアスの航海権の分界線は、1494年「トルデシリヤス条約」後に、ポルトガルは喜望峰を廻り1498年ヴァスコ・ダ・ガマ(1460~1524年・ポルトガル探検家)が、インド・カリカット(南西端ケーララ州・香辛

料積出港)に到達してインド航路が開かれた。インドのゴア(カリカットの上)を 1510 年に占領し、ポルトガルは東南アジアへ進出して香辛料貿易を展開するのである。

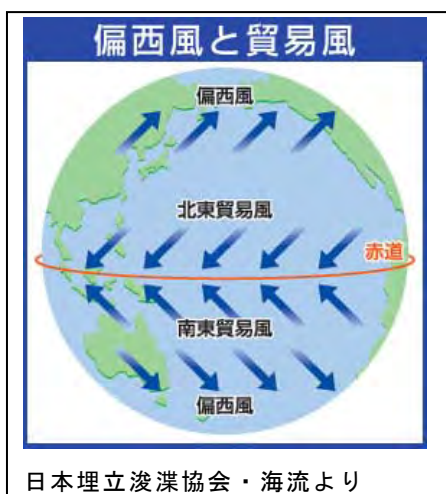
スペインは大西洋航路で 1520 年、南米大陸南端のマゼラン海峡(南米最南端)を発見し、南端を廻り込み太平洋を西に横断、1521 年フィリピンに到達したのである。やがて、ポルトガルとスペイン両国は東南アジアで再び出会い、香辛料の産地“モルッカ諸島”で両国は再び衝突し、東南アジアの占有権争いが起きたのである。両国は話合いの結果、スペインはポルトガルから賠償金を得て、モルッカ諸島から撤退した経緯となる。再度、両国による分界線の話合いにより、1529 年、分界戦線を引き直したのが、「サラゴサ条約」となるのである。



モルッカ諸島・ふたりたび・net より

(注・スペインは西回りのモルッカ島への航路は、大西洋と太平洋を横断する必要があり、帰路(太平洋→大西洋)は東風の貿易風で進めず、モルッカ諸島を放棄した要因)

補足・北緯 4 5 度近辺と南緯 4 5 度近辺の上空を西から東へ吹く強い偏西風は、北極・南極と赤道付近の温度差及び地球の自転の影響によって起こる。偏西風そのものも南北の温度差が大きい。貿易風は北緯 1 5 度近辺と南緯 1 5 度近辺の上空を東から西へ吹く風で、こちらも地球の自転



日本埋立浚渫協会・海流より

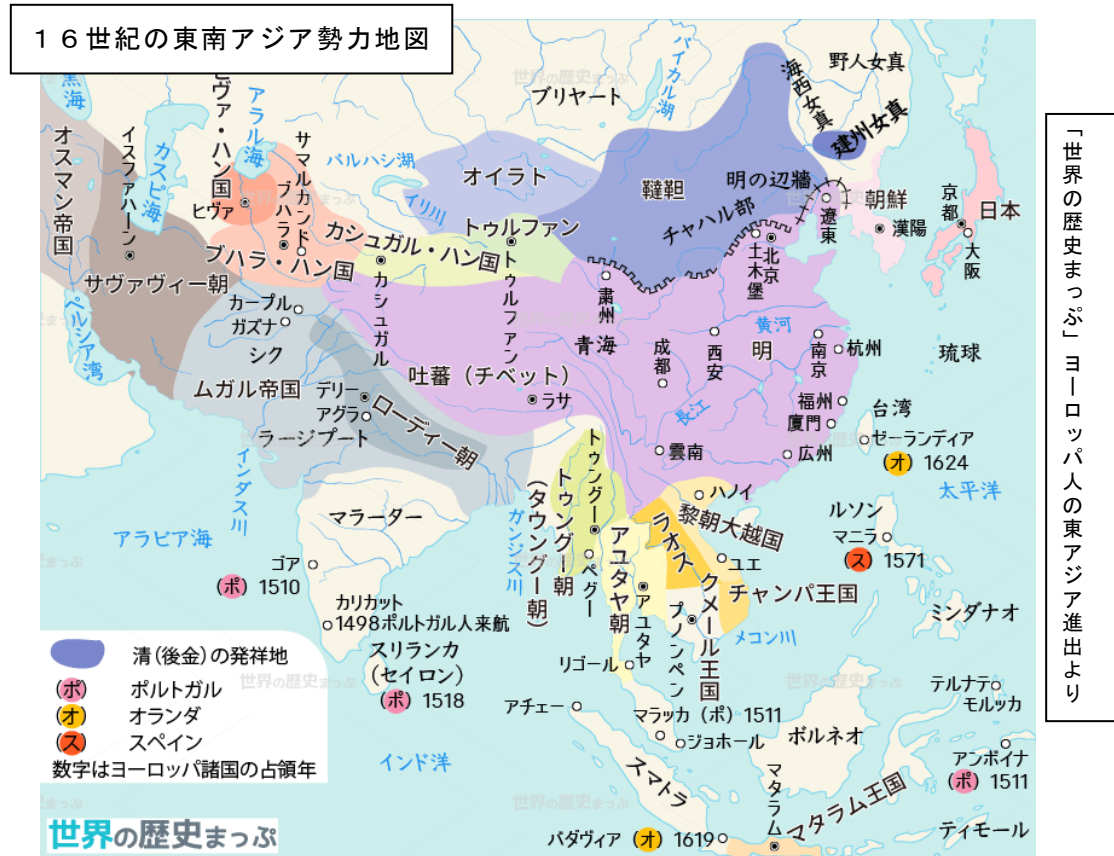
によって起こる現象。赤道付近を吹くため、南北の温度差はあまりない。インド洋を吹くこの風に乗って貿易船が航海したことから付けられた名で、偏東風とも呼ばれる。

サラゴサ条約の後にオランダが動き出す・・・16 世紀初頭の新天地の領土獲得に乗り遅れたオランダ、イギリス、フランスが動きだした。ヨーロッパ列強国は、スペインに領有されていたオランダが、イギリス軍事力を借りてスペインに反乱を興し、世に云う「オランダ独立戦争」(1568～1648 年ネーデルラント州がスペインに起こした反乱。オランダ国誕生まで国際承認 8 0 年戦争)を勝ち取ったのである。

これ迄カスティーリャ(スペイン)は中南米の植民地を押さえてきたが、オランダもカ

ブリ海(メキシコ湾)の島々へ進出し、スペインの占有地に於いて海賊行為を働く行動に出てきた。その海賊行動を起こすには、当時の商船装備に、軍艦と同様な戦闘装備を備え、航海上で敵国(スペイン)の商船に遭遇すれば、オランダ商船は大砲戦で打ち勝ち、スペインの積荷(銀・銀貨)を奪い、金銀財宝を掠め盗り東南アジアへ搬送して、これを基にアジア貿易をしていたのである。

オランダ船舶は即ち私掠船<sup>しりやくせん</sup>であった。私掠船とはオランダ政府から認可を受けた戦闘装備付きの商船で、戦争状態にあるスペイン貨物船を攻撃して、その船から積み荷を奪うことを目的としていた。国家免許を受けた一種の政府公認の海賊船で、特にスペイン船を狙うオランダ・イギリスの商船はこれに該当し、政府公認の海賊商船は奪い取った財宝・武器弾薬・食料<sup>りやくだつ</sup>を掠奪する海賊貿易船団となっていた。



※スペインは1571年、フィリピン・マニラ拠点設置。マニラとメキシコ間の定期航路開設する。

※ポルトガルはヴァスコ・ダ・ガマが開いた航路(1498年)でインドのカリカット(香辛料)やゴアを占拠し、更に1501年マレー半島のマラッカまで進出、1552年広州湾に来たポルトガル艦隊は明国政府の要請を受け、明人・日本人倭寇<sup>わこう</sup>を排除した。明国政府により1557年マカオ上陸を許された。※ポルトガルは1510年インド西海岸ゴア進出、翌年マレー半島マラッカ占領拠点設置している。

※フィリピンの名称は、スペイン皇太子フェリペ(後のフェリペ2世国王)名前から命名されている。



和蘭・英国の商船について・・・《「・・・当時の船団派遣の真の目的は太平洋に面した南アメリカの海岸で、スペインの商船を襲い、財宝を掠奪し、その財宝をアジアで売りさばく貿易を行う事だったのは疑いない。」》(『ウィリアム・アダムス』「第2章」フレデリック・クレインス著より)

ではスペイン・ポルトガルの分界線は日本国にどのような影響があったのか！

少し寄り道して日本国を見聞することにする。まず、アジアの手掛りは、ポルトガル人が1510年インドのゴワを占領して、この拠点からポルトガル人は極東地域乗り出した。ポルトガル船は1543年鹿児島種子島へ漂着し、その船の積荷に火縄銃(鉄砲)が積まれていた。これが日本国初の「種子島鉄砲伝来」、その経緯は下記の様になる。

《中国の貨物船には、海賊兼商人の百余人の中国人が乗船していた。その一人の中国人が漢字を解し、名を五峯(倭寇の一人)といった。他に冒険家のポルトガル3人がいた。その一人が鴨を撃つのを種子島の領主種子島時堯ときたかが見た事により、五峯と漢字通訳として、ポルトガル人から2挺の鉄砲(火縄銃)買い受けた(1千両とも云われる)。

時堯は家臣の刀鍛冶の八坂金兵衛に命じて、鉄砲製作にあたらせた。八坂は銃口の底をふさぐ方法が、どうしても分からず、ポルトガルの船長に、17歳の娘を差し出して、その見返りにポルトガルの鉄砲の匠たくみから、銃口の底をふさぐ方法(ネジ)を習得したと伝わる。その後、1年経たぬ間に、八坂は10挺の鉄砲を制作した。

それによって、10年後に、日本中で鉄砲鍛冶が大量に製作にいたった。1549年、織田信長が、5百挺の種子島銃を注文した史料が現存する。それから15年後に「長篠の戦い」の勝敗を分ける武器となったのである。》(『鉄砲を捨てた日本人』より)

鉄砲船の漂着後、戦国の雄藩達は火縄銃・弾薬・大砲をポルトガルから買い求める貿易を、日本各地域の雄藩で独自の交渉で、ポルトガル・スペインとの貿易交渉が始まる経緯となって行くのである。それと同時にポルトガル貿易商人やイエズス会の宣教師たちが日本へやって来たのである。

キリスト教宣教師が最初に上陸したのは、1549年、九州鹿児島へイエズス会注のフランシスコ・ザビエルが初来日となる。ザビエルは薩摩国の守護大名・島津貴久たかひさに拝謁して、宣教の許可を得たことに始まりとなる。その後、貴久が仏僧の助言を聞き入れ、

キリスト教は禁教に傾き、ザビエルは薩摩を去り京都にのぼって行くことになる。

初期のキリスト教布教の和語通訳では、神の事を「大日・大日如来」、聖母マリアのことを「観音」、天国の事を「極楽」等と訳されたようで、日本語訳の布教には苦戦していたことが分かる。ザビエルは日本滞在の2年後にインドへ戻り、1552年には病により46歳で世を去っている。40年後には日本国内の信者30万人となっていた。

(※イエズス会は・・・1540年ローマ教皇認可の基に創設し、イタリア・ポルトガル・スペインのカトリックの組織となる。遅れて16世紀初期にルター等の宗教改革より、プロテスタントの組織はドイツ・オランダ・イギリス等になる。両派の福音を伝える宣教師達が貿易商人・軍隊・植民者と共に世界の各地域に赴き、布教活動と侵略が植民地経営一体となって行く)

日本で最初に鉄砲を作った八板金兵衛清定<sup>やいたきんべえきよさだ</sup>・・・鉄砲伝来による鉄砲製作技術について少し述べる。種子島領主の時堯<sup>ときたか</sup>は、乗船のポルトガル人から2丁の鉄砲を入手し、その威力に驚き、関(現関市)から移住していた八板金兵衛清定(『八板氏清定一流系図』に「濃州関之鍛冶善刀剣為産業而来」とある)に、刀匠金兵衛<sup>とうしょう</sup>に鉄砲の製作を命じた。

当時、種子島では砂鉄<sup>さてつ</sup>(日本刀主原料)が採取されていて、地方の刀鍛冶が来島していた。その仲間らの協力により、刀鍛冶職人の高度な技術で取り組んだのである。しかし、刀鍛冶技術だけでは鉄砲製作の完成にいたら

なかった。尾栓<sup>びせん</sup>(銃口の根元部分)の鉄と鉄の接合部分の「螺子<sup>ねじ</sup>」の加工技術を日本人は知らなかった。

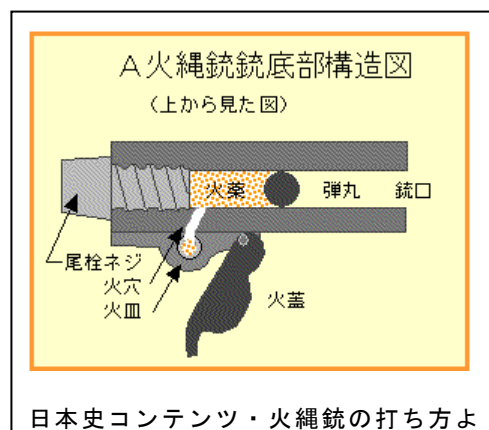
鉄砲製作における銃身(弾丸が通る円筒部)の加工部分「ネジ」難問が解けなかったのである。

銃筒(銃口)は清掃や不発弾除去に、「尾栓ネジ」取り外しが必要となるので銃口の手入れ等に最も

大事な個所となる。雄ネジ<sup>おす</sup>は螺旋状に鍛冶職人の加工が考えられるが、雌螺子は加工に苦戦したと考えられる。

1614年(慶長19年)「大阪夏の陣」では、徳川軍の火縄銃は30万挺を買い受けた。国内の火縄銃の産地は、種子島、近江国友(長浜市)、大阪の堺、根来(和歌山岩出市)、雑賀(和歌山市)等で国産化が進められていた。

※『鉄砲記』の意識は、「終わりにかえて」の章に載せてありますのでご覧ください。





左・輪束打之図 右・雨中連砲乃図 (雨の中でも日本製の火縄銃は使われていた)『武芸芸術秘伝図  
 絵』歌川国芳著・国立国会図書館より (火縄銃資料は、岐阜県図書館・関市、「刀剣ワールド」・日本  
 史研究室東通エイジェンシー、日本史コンテンツ「火縄銃の打ち方」より掲載させていただきました)

戦国時代は日本国製造の鉄砲が50万挺出回っていた・・・我が国最初の火縄鉄砲  
 戦は、織田信長の1575年の「長篠の戦い」となり、鉄砲の威力が遺憾なく発揮されて、  
 信長は見事に勝利を収めた。戦国期に鉄砲隊を持った  
 のは、信長・秀吉・家康の3巨頭にしばられていた。

3巨頭がキリスト教(日本ではキリシタン)に関心を示  
 したのは、スペイン・ポルトガ両国から貿易は、武器  
 仕入れの「火薬・弾丸」と考える。その頃、石山本願  
 寺や浄土真宗寺院の仏教徒の争いに、戦略として武器  
 貿易は軍事的に欠かせないものとなっていた。又、鉄



織田徳川軍3万8千と武田軍1万  
 5千の戦・火縄銃ときどき山登りより

砲が戦の陣形を個人戦から、一般人からの足軽を鉄砲隊へと編成され、いち早く取り  
 入れたのは、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康の3巨頭で、騎馬隊から鉄砲隊へと編成  
 して、戦場の優劣差を決める戦いに、増々両国の貿易は盛んになって行くのである。

武器貿易と共にやって来た宣教師の活動・・・1563年、宣教師ルイス・フロイス(『日  
 本史』の著者・長崎で布教1597年没)がやって来た。朝廷に取り入り布教の認可を受けよ  
 うとしたが、朝廷は宣教師たちを追放した。そこで軍事力を持った岐阜の織田信長に

謁見し、布教を願い出ると信長は、「万事は予の権力の元にあると、望みの所に滞在せよ」と言われ、フロイスは信長の言によって京都で宣教することができた。

1580年頃、信長は一向宗総本山・石山本願寺を攻撃には、仏教勢力に敵が心を持つキリスタン兵士たち共に動員して戦は勝利をおさめ、キリスト教布教とポルトガル貿易の関係は深まり、フロイスは信長に急接近して行くのである。

信長は、フロイスからヨーロッパの国々の情報収集し、ポルトガルの歴史、ローマ教皇の権威、ポルトガルのインドのゴア拠点占領工作、ポルトガル・インド副王の権威等を聞きただすことに成功している。信長は、ポルトガルの宣教師たちが、ゴアの占領地拠点から派遣されている事を知り、このポルトガル領インドのゴアを拠点とした植民地となっている事に、信長は強い警戒心を抱いたのである。

フロイスは、信長の戦場や政治政策まで、その事情や動きを深く考察して調べ上げていた。フロイスは1582年、イエズス会総会長に宛てた書簡の一節に次の様にある。

「信長は、毛利を平定し、日本の66カ国の絶対君主(皇帝)となった暁には、一大艦隊を編成してシナを武力で征服し、諸国を自らの子息たちに分け与えることを考えていた」と、伝えている。(『完訳フロイス日本史』③)

信長は諸大名(宣教師たちは国王と呼んでいた)を平定の後、「支那」(明国)を征服するという信長の発言をフロイスは記していた。この時期の日本国3巨頭(信長・秀吉・家康は両国の征服情報を十分注意を払う)は、ポルトガル・スペイン両国がキリスト教布教後に、地方大名の軍勢を先導し、日本征服を目指していることを理解していた。

信長は宣教師たちが、インド(ゴア)やマラッカ(マレー半島・地図P111)を征服基地から来航して来ること、やがて日本国の布教に成功に達し、日本への侵略征服に向けられる事は十分に判っていたと考える。

1570年代のイエズス会の方針、「明国征服論」の情報が信長に洩れ伝わっていた。

又、九州のキリスタン大名・大友宗麟ら大名たちをキリスト教信者に取り込み、日本各地方の軍隊を使役して、明国(シナ)の征服考察論が宣教師たちの記録も残されているからである。では、どの様なポルトガル・スペインは「日本征服論」や「明国征服論」を考えていたのであろうか。その背景を考察すれば、信長の時代に日本へやって来たイタリアの宣教師ヴァリニャーノ<sup>注</sup>に依る日本征服論を考えた書簡が残っている。

第1回目の日本巡礼を終えたヴァリニャーノが、マカオからフィリピン総督に宛て

た 1582 年の書簡に、「日本の国民は非常に勇敢で、しかも絶えず軍事訓練を積んでい  
るので日本征服は困難だ」と述べている。

彼らは織田信長の実践の戦<sup>いくさ</sup>を目の当りにして、その  
戦闘力の高さを認識したのであろうか。日本征服につ  
いては慎重に進めなければならないと述べ、時宣<sup>じせん</sup>(水滸  
伝の登場人物)の征服論(鋭い観察論)だと考えていた。

これに対して積極的な日本攻撃を仕掛ける事を主張  
しているのは、イエズス会の日本準管区長ガスパル・  
コエリョ(ポルトガル宣教師)であった。彼は 1585 年イエ  
ズス会のフィリピン布教長アントニオ・セデーニョに  
宛てて次のように記している。



ヴァリニャーノ『日本巡察記』より

「日本は早急に兵隊・弾薬・大砲、数隻のフラガータ船(フリゲート軍艦、小型高速艦)  
を派遣してほしい。キリスト教徒の大名を支援して、服従しない敵に脅威を与えるた  
めで、これで諸侯たちの改宗が進むだろう」と。更に、コエリョはフィリピンからの  
軍隊派遣を得て「日本 66 カ国すべてが改宗すれば、フェリペ 2 世国王(在位 1556~98  
年)は日本の様な好戦的<sup>れいり</sup>で伶俐な兵隊を得て、一層容易に明国をも征服する事が出来る  
であろう」と述べている。日本国を支配する意欲が漲り、ヴァリニャーノの日本征服  
論より明確となっている。(『戦国日本と大航海時代』より)

マニラ司祭(フィリピン)のサラサールは 1583 年、スペイン国王の命令に基づいて、  
在日イエズス会が明国へ出兵を命ずれば、日本のキリシタン大名達は忠実に従うと述  
べている。実際、平戸の領主松浦氏や小西行長が、スペイン側からの要請があり次第、  
十分に武装した兵隊を、僅かな費用<sup>わず</sup>で、明国、ブルネイ、シャム、モルッカの何処へ  
でも差し向けられと表明しているのである。

1587 年、フィリピン総督に宛てた書簡に驚くべきことは、豊臣秀吉の朝鮮出兵(文禄  
16 万・慶長の役 14 万・1592~98 年)の前に、イエズス会は日本の大名をキリスト教に改  
宗させ、すぐにでも 2000~3000 人の兵力を送り込む事ができる。彼らは打ち続く戦争  
に従軍しているので、大変勇敢な兵隊なので、少しの給料で喜んで馳<sup>は</sup>せ参じるだろう。  
と。明国<sup>みん</sup>を征服するなら日本からの軍事動員が効果的と建策している。

日本国での改宗を実現し、神の名の基に日本兵を明国侵略に駆り出す構想が出来て

いたのである。（『戦国日本と大航海時代』「ポルトガルとスペインの日本征服」より）

（注・ヴァリニャーノは日本を3回訪れたイエズス会宣教師。天正遣欧少年使節派遣の手配や活版を齎した。『日本における宣教師のための儀典書』日本の風習と流儀の執筆が有り）

**ウィリアム・アダムス(三浦按針)の人物追う・・・**時は関ヶ原の戦いの2年前の事、1598年6月24日、オランダ商船の5隻がオランダ・ロッテルダム港を出帆した。

この商船にはイギリス人船員の航海士が乗船しており、その中に日本でお馴染みのウィリアム・アダムス(三浦按針)がいた。彼は航海士として乗船し、その商船団の航路は南米最南端のマゼラン海峡を廻り込み、南アメリカを北へ上り、スペインの植民地拠点や貨物船から財宝を掠奪する海賊オランダ商船の航海となっていた。その海賊航海であったが、アダムス乗船時には海賊行為は上手く行かず、その上土民の襲撃や、食糧不足、赤痢、壊血病等が蔓延し、次々と船員を失う状態に陥ってしまった。

やむを得ず太平洋からアジアへ航路を切ったが、また嵐に出合いオランダ商船隊は、4隻共沈没の憂き目に遭い、残る商船は1隻になってしまった。乗組員110人の人員は、24人に減ってしまった。

日本へ漂着は関ヶ原の戦いの半年前の1600年4月29日(慶長5年)であった。

そのリーフデ号1隻が到達した所は、豊後(大分県)臼杵領内の佐志生湾の海岸から300m北方に位置する黒島に漂着



した。南米サンタ・マリア島を出帆してから5カ月後のことであった。当時、豊後臼杵は大友宗麟領内となっていた。到達の諸事情は省くが、この商船にはイギリス人航海士ウィリアム・アダムスと、オランダ人航海士ヤン・ヨーステンが乗船していた。

後の話になるが、2人は家康に信任され、ウィリアム・アダムスとヤン・ヨーステンは、家康の外交顧問となる人物である。やがて、アダムスは名字帯刀を許され三浦按針(三浦に領地を貰う)と名乗り、ヨーステンは、日本名を耶楊子と名乗り、家康から江戸城内に邸宅を貰い、日本の女性結婚をしている。邸宅は、現在の東京都中央区「八重洲」の地名になっている。2人は徳川幕府の重要な外交顧問となり、欧州列強国の秘密情報を家康に齎した経緯となる。特にスペインとオランダの紛争状況を家康

は情報を知ることができた。因って、家康は「<sup>あんじん</sup>按針」と「<sup>やようす</sup>耶楊子」の情報を基に国家の方針を総合的判断することが出来たとゆえる。その判断の結論には、欧州列強国から遠く離れた極東アジアへ軍隊を派遣することは、とても当時の輸送能力では極東の日本への軍事行動(征服戦争)を起こすには、とても無理であることを知った。下記に当時の輸送航路の日程が分かって来たからである。

《・・・リスボン(ポルトガル首都)から長崎までの帆船の航路は、普通は2年以上かかった。ポルトガルを春3月末に出帆し、アフリカ南端喜望峰を廻り、貿易風を捕えて上手く進めば、7月に末にマダガスカル(東アフリカ)到着し、モザンビーク(東側)港で冬を越すこともある。翌年の春にインドのゴアへ到着してから、日本へと北東に舵をとり、長崎へ至る旅は2年猶予の船旅となる。その上、船内で病人が出た場合は、1隻で200人から400人の死者が出る事があった。悪い例ではリスボン発の輸送船に1100人の乗客が乗り、無理した航路日程で進んだ時に、6カ月後にゴアに着いた時は、900人が病死となり、残りの健康人は200人足らずであったという。》

(『通辞・ロドリゲス』「第1章アジアの旅」マイケル・クーパー著・原書房より)

当然家康は、外交顧問の<sup>やようす</sup>按針と耶楊子(ヨーステン)から、このような海路の様子を聞き出していたと思われる。その上、スペイン・ポルトガル両国からは、日本の皇帝と呼ばれる3巨頭(信長・秀吉・家康は皇帝と呼ばれていた)は、日本国は軍事力も盛んで簡単に征服など出来ない事を、家康自信は見抜いていたと思われる。

当時のヨーロッパへ宣教師達が云える書簡には、「日本の皇帝」の名は織田信長・豊臣秀吉・徳川家康の3人で、有力大名は地方の国を治める「国王」となっている。

三浦按針からのスペインの情報は、「スペインの征服工作は、宣教師よって日本をキリスト教布教で改宗させ後、その信者(切支丹大名=大友宗麟・高山右近・大村純忠・有馬晴宣等)を動員して、日本の征服を考えている」と、家康に進言していたのである。

《スペインの征服計画は、「まず宣教師を送り込み、その国の多数の国民をキリスト教徒に改宗させ、スペイン国王の領有(日本国を)とする」。というスペインの策略を家康に伝えている。スペイン国史料によれば、このアダムスの発言が直後に、起こるキリシタン弾圧の一因であったという。》 (『ウィリアム・アダムス』「第4章」フレデリック・クレインス著より)

幕府の布教禁止理由・・・徳川家康は、積極的な貿易政策を展開したが、キリスト教に対し、1602年(慶長7)にフィリピン総督宛て親書に次のように布教禁止を通告する。「外国人は一般に日本国内の何地にても、好きに応じて居住することを許可す。然れども、その教を弘布(広める)することはこれに厳禁す」。(『増訂異国日記抄』)

何故、家康はキリスト教布教禁止に踏みきったのかについて、在日司教セルケイラ(ポルトガル宣教師)がマニラのイエズス会に宛てた書簡(1602年10月22日付)に、次のように述べている。

「内府(家康)をはじめ異教徒の大名達は、太閤と同様にルソンやメキシコのスペイン人は、他国を侵略するものだと同く信じている」(『松田毅一『豊臣秀吉と南蛮人』より)

家康は秀吉と同様に、スペイン人が日本を侵略するのではないかと危険視し、1605年(慶長10)に家康は、同様の書簡をフィリピン総督に送っている。

「閣下(フィリピン総督)及び他の方々は、たびたび日本の宗派に言及され、これに関して多くの事を求められたが、それを認めることはできない。何故ならば、わが邦は神国と称し(秀吉も同様)、神々に捧げられており、我らの先祖から今に至るまで、いとも崇められてきたのであり、この事実を予独りが破棄することはできないからである」と述べている。(※キリスト教は一神教、日本神国は八百万神=森羅万象に神がいる。)

“キリスト教の布教=スペインの脅威”を排除する理由として、神国論は禁教を正当化する国の内外向けの説得論となる。(『戦国日本と大航海時代』平川新著より)

家康との貿易交渉は、スペインとポルトガルの「キリスト教と貿易」がセットの交渉が行き詰まり、家康は思案の末に奥州大名の伊達政宗に交渉を委ねた。仙台と江戸(江戸の人口15万、関東東北には貿易港がない)の近港にはマカオとメキシコ間の定期貿易船の港は無く、家康と政宗は何とか関東・東北方面に開港したい希望が一致して、メキシコからの貿易船を仙台港と相州浦賀へ着岸する貿易交渉を目指したのである。しかし、スペイン側はキリスト教の布教と貿易はセットの方針は崩さなかった。

政宗は可能を求めて、スペイン貿易成立を期待し1613年に慶長遣欧使節(支倉常長他4名が通商条約提案使節)を派遣したが、結局は上手く行かなかったのである。派遣交渉成り行きを見て、家康はスペイン・ポルトガルのキリスト教



支倉常長・仙台市博物館よ



布教の禁止令を發布したのである。それに続いて伊達政宗も支倉常長の帰国を以て、家康と同調のキリスト教布教禁止令を出したのである。スペインとの通商貿易交渉は破局したが、別の貿易交渉国のオランダ・イギリス貿易交渉がまとまり、長崎平戸に商館が設置された経緯なるのである。家康はスペインの貿易に固執したのは、ペルー国から銀鉱山技師を日本へ送ってもらい、日本の銀山開発を高めようとした。

やがて、家康は全国平定し、日本国はキリスト教禁止令を発令、欧州列強国に布教と日本侵攻の隙を与えなかった。その結果、家康軍は戦国の終盤戦に「大阪落城・夏の陣」に於いて、豊臣軍の持つ大砲(被弾距離 350m)は徳川軍陣地にとどかず、徳川軍の持つ大砲は、オランダ国の最新型の大砲(被弾距離 600m)は豊臣秀頼が籠る大阪城へ被弾し大阪城は落城となる。結果的に家康は国家方向性を見失しなう事なく、日本をキリスト教の布教を許さず、武器弾薬を手に入れて天下を取ったのである。

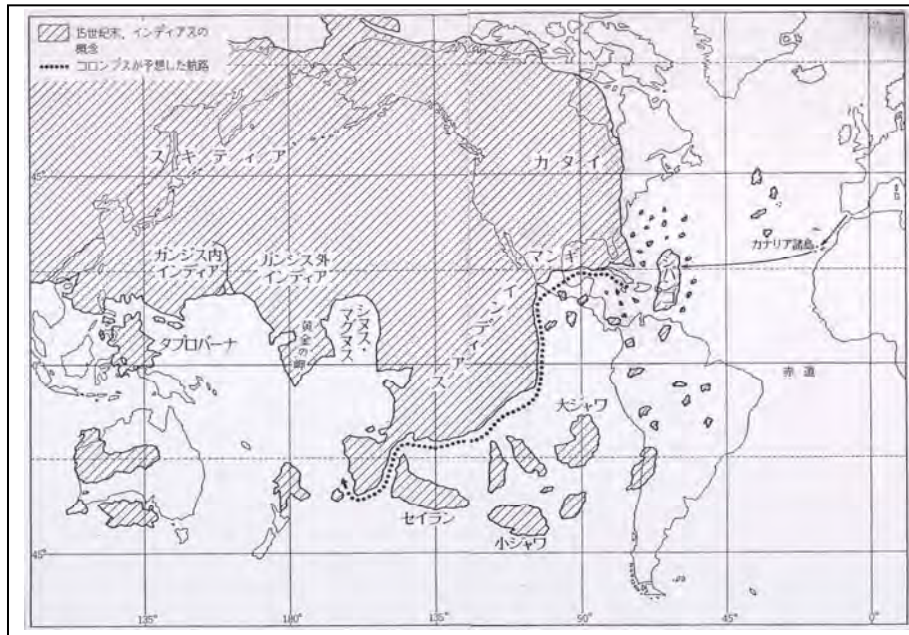
さて、ここからコロンブスの情報に戻す



1544年に描かれ17世紀まで5カ国語で発行された地図。北アメリカの直ぐ西に「ジパング・Zipangri」と描かれている。1561年の着色図となる。(ドイツ人ミュンスター著作、「Cosmographia」掲載されているアメリカ図)

※カタイはシナ(中国)指し、モンゴル系の契丹族に由来し、北東・中央アジアでは「キタイ」で知られ、マルコポーロは元朝を「カタイ」と記す。※「黄金の国ジパング」の説話は平安時代末期に奥州平泉藤原氏の中尊寺金色堂の建築建物が金張り様式と伝えられ、中国貿易に砂金が使われている事に由来する。

15世紀東アジア  
地図・現在の世界地図  
に重ね合わせるとこ  
のようになる。コロンブ  
スはインドやカタイ  
(中国)へ最短ルート  
はカナリヤ諸島の西  
の先にアジアに到達  
すると考察した。『コロ  
ンブス』増田義郎著より



コロンブスの西回り海路開発の権限は・・・コロンブスは1492年4月にカスティールヤ国のフェルナンド王(2世)とイザベル1世(カトリック女王)との間で、コロンブスはインドへ到達への海路の協約書を取り交わした。この協約書は、コロンブスが新しく発見した島や大陸(国家の体を成いない大地)は、その新大陸を提督(現地副王)に指名されること、又は、新天地での副王兼総督にコロンブスを任じること。これらの職務及びこれに伴う特権はコロンブスの子孫に継承されることが定められていた。

そして、新天地から獲得する金、銀、真珠、香辛料、その他の財宝の十分の一をコロンブスの免税所得とすること。及びコロンブスが航海の費用の八分の一を負担する時は、これによる利益の八分の一をコロンブスに与える事に定められた協約となっていた。この協約を基に、コロンブスはトスカネリ(天文学者・地球球体説者)の教授に従い、地球は球体なので、大西洋海路を西に海進すれば、最短で大汗王のカタイ(シナ)や、黄金のジパング(日本)へ、早く到達することが確信されていたのである。

新大陸発見はカブリ海から中南米へと海路は拡大・・・新大陸発見のインディアスの大地は、コロンブスが第一回の航海で到達したカブリ海の島々だけでなく、その延長でフロリダ、パナマ、メキシコ、ペルー、グアナハニ島(最初に発見した島=サン・サルバドル島・聖なる救世主)へと繋がっていたのである。

その大地を占有(コロンブスの意志で所有)し、ローマ教皇による贈与(キリスト教の布教

活動するために贈与)、及び王室間の合意を得て、カスティーリャ王国(スペイン)の領土編入となったのである。それ故にエルナン・コルテス(メキシコ・アステカ帝国征服者)やフランシスコ・ピサロ(インカ帝国征服者)等の征服地は、今やカスティーリャ国領になったのである。

実情はインディオたちの住んでいた大地侵略に過ぎないが、キリスト教の神の福音(教え)を布教の目的とするため、武力で領土侵攻ではないという事にしている。しかし、カスティーリャ王が縷々<sup>るる</sup>説明するのであるが、この様なインディアス領有の論理や手続きは、中世ヨーロッパのキリスト教信仰国同志で理解し合えるとしても、それまで古来より外部の世界と何等の関わりもなく、生きて来た新大陸の住民(インディオ)にとっては与<sup>あずか</sup>り知らぬ事となる。

先住民にとっては、コロンブスに始まるヨーロッパ人の新大陸への来訪目的は、結局は金銀財宝の獲得(強奪<sup>ごうだつ</sup>)を目的とした侵略、掠奪<sup>りやくだつ</sup>以外の何物でもなかったのである。

その後、スペイン人の入植者がインディオに浴びせる虐待を告発する声に端を発し、インディアスの領有の正当性をめぐり、国王(王室)に金銀を送り込む入植者と、司教バルトロメ・デ・ラス・カサスとの白熱した神論争が展開されていくのである。

**スペイン王室支配の正当性について**・・・1539年、サラマンカ(スペイン・サラマンカ県)大学神学教授フランシスコ・デ・ビトリアは、特別講義をおこない、インカ帝国を征服したピサロの残虐行為、新大陸発見の事実やローマ教皇に依って贈与等を根拠にした領有を正当化したのである。その上でビトリア教授は、万人に認められると考えた交通権(航海航路)等の権利を、スペインがインディアスの大地統治権を正当化する法理論を組み立てた。カスティーリャ王は一貫して、先住民へのキリスト教、神の福音(キリストの救い)の教えの布教を前提にして、ローマ教皇による贈与を、領有と統治の基本に置いていたのである。

バルボア(パナマ地峡を越えた太平洋発見のスペイン人)のフェルナンド王(スペイン国王)への手紙に露骨に書き綴られた文書は、結局は黄金獲得の渴望であり、コロンブスも国王への進言は、原住民捕獲計画(抵抗を理由した奴隷売買)は、16世紀以後に世界各地で見られたが、異端地域をキリスト教徒に改宗する目的を前提とし、その延長線上に於いて非人道的な奴隷売買と植民地を国の発揚として、信仰の改宗をかざして領土侵略と奴隷貿易を目指すのであった。

征服者の征服の論理とは・・・侵略するスペイン人に抵抗を続けた先住民は罰せられた。

その罪状は「インディオ大地の領有者カスティーリャ王」に対する反逆の罪とされた。

その結果、エスピノーラ島の先住民は絶滅の憂き目に曝され、インディオの労働人口が大減少したのである。その解決策に1510年代、スペイン入植者たちの労働力を補うため近隣の島々へ渡り、先住民を奴隷として連れ帰っていたのである。

奴隷にした理由はスペイン人を素直に迎えず、抵抗行為をしたとされ、その戦いを「インディオとの戦争」と捉えてスペイン行動は原住民を戦争捕虜としたのである。その戦いには明文(戦争理由)の必要があったので、レケリミエント(催告)と呼ばれる文書が作成され、その内容は次の様な明文になる。

「天と地、アダムとイブの創造主である神は、その子キリストを介してペテロ(初代ローマ教皇)に、この世の統治を委ね、ペテロの後継者であるローマ教皇アレクサンデル6世は、キリストの教布教ためインディアスの大地をカスティーリャ王に贈与した。これより先、すべからくカスティーリャ王に服し、キリスト教を受け入れるべきである。この催告(文面を言葉で伝える)を受け入れれば、カスティーリャ王国民として厚遇するが、拒めば妻子ともども成敗する」という宣告文となっていたのである。

この文書はインディアスに訪問した法学者や神学者の考えを基に、文書をインディオたちの前で読み上げ、スペイン人がこの地域へやって来た経緯や目的を説明している。しかし、この催告を告げられても、言葉が通じないインディオたちは、抵抗をやめて服従すれば、奴隷にならないで済むという催告文であるが、現場で読み上げた人たちはこの書状を本当に伝わっていたと考えていたのであろうか、・・・。

1526年以降、スペイン軍人や入植者たちは、この催告文書を、通訳を介して相手が内容を理解するまで、何度でも読み上げた事にはなっているが、しかし、実情は言葉

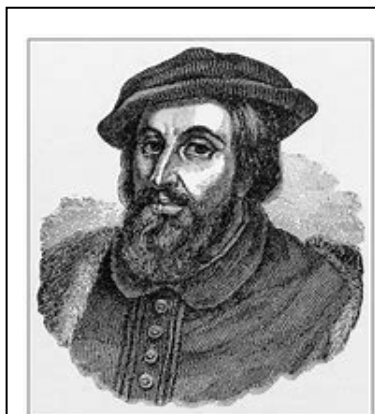


ラテンアメリカ地域・『南米ポトシ銀山』より)

が通じない民族関係で読み上げたとしても、形式的に棒読みするだけであろう。

先住民に対する宣告通牒(一方的言い放つ)であるこの催告文を、コルテス(アステカ王国征服者)も、フランシスコ・ピサロ(インカ帝国征服者)も携行していたという。

こうして、レケリミエント(催告)はインディオの不当な奴隷化を防止するという本来の主旨とは逆に、武力征圧を正当化し、戦争状態をつくりインディオ捕虜を奴隷目的としていたのである。スペイン人は素直に帰順しないと云うだけで、キリスト教神学を拒否する不埒な原住民が戦争を挑んだインディオと認定され軍事制裁(形式だけの裁判)の対象にされてしまったのである。



エルナン・コルテスはメキシコ高原のアステカ王国を征服

キリスト教徒にとって偶像崇拜の原住民を征服するために、「正義の戦争」によって獲得した捕虜と戦利品は「神への大いなるご奉公」に対する褒美に他ならなかった。この様な論理の基に、戦利品は事業への出資者や、武勲の程度に応じて参加者全員に配分され、王室は獲得利益の5分の1を税(20%)として徴収したのである。

コルテスはアステカ王国の地から、1519年、4000ペソ(1ペソ=272マラペディ・当時貨幣額)送り、1520年にカルロス5世国王に、17万8000ペソ財宝を送っている。ピサロは、インカ帝国13代アタワールパの身代金を、カルロス5世に119万2411ペソ送り、更にクスコの街の財宝は総額21万5000ペソ、その中の15万3000ペソが王室へ送られた。送金を受けた当時スペイン国王(カルロス5世)は、イスラム教徒とのグラナダ帝国との軍事戦争の最中で、ペルーからの金銀の送金は、軍事費に転用してイスラム教徒に勝利を収めていたのである。結局、これ等新大陸からの金銀財宝は、全額軍事費用に使われていたことになる。このようにコルテスやピサロが獲得した戦利品の金銀は、地金に換算すると14・3トン数量になるという。

**絶滅する先住民の人口**・・・カリブ海のエスパニョーラ島の先住民を例にすれば、ヨーロッパ人が来る以前の人口は、1492年に60万人、1508年には6万人を数える。

そして、1509年には4万人、1510年には3万352人と減り続け、1514年には2万675人、1517年には1万5000人、1519年には3000人を数えるのみとなった。

エスパニョーラ島の先住民人口は、コロンブス上陸の30年後、事実上絶滅寸前に

なっていた。コロンブスがサン・サルバドル島に上陸した1492年10月12日の日誌に、「彼らには力ではなく、愛をもって接すれば、より速やかに解き放され、われわれの聖なる信仰に帰依する」と述べている。

島の先住民にキリスト教化に成功すると確信を抱いていたコロンブスは、スペイン王室がインディアスの住民と接するのは、布教を通してキリスト教布教活動へ導く温情方針の政策で望むコロンブスであったが、現実<sup>ま</sup>に連れて来たスペイン人たちは、金銀財宝を目の当<sup>ま</sup>たりにして貧<sup>ひん</sup>欲<sup>よく</sup>になったと言うが、それが目的だったのである。

先住民の人口は、コロンブスがカリブ海に到達から30年後には島の住人たちは絶滅状態になってしまったのである。

どの様な権利があ<sup>あ</sup>って先住民を奴隷化にできたのか・・・当時の国際的にどの様な権利を経て、カスティーリヤ(スペイン)国王は中南米征服事業を認可し、インディアスの大地住民を、己<sup>おのれ</sup>の支配下に置いたの<sup>の</sup>であろうか、・・・疑問は残る。それは、先住民たちの領土を占有する自体、他人の土地への不法親侵入ではなかったのかという疑問の解決策はどの様な世論を考<sup>考</sup>えていたの<sup>の</sup>であろうか。

カスティーリヤ国王(スペイン)に言<sup>言</sup>わせれば、中世ヨーロッパ・キリスト教徒同志国の了解事項として、未だかつてインディオ以外の何人とも行き交うこともなかった、カリブ海諸島の島々や陸地で、ローマ法<sup>法</sup>による「所有者無し<sup>無</sup>の土地」(国家形体がない)の土地として発見時は、その原住民にキリスト教を布教するという条件付きで、これらの最初に発見したキリスト教徒たちに、領有権(占有)が認められていた。こうした考<sup>考</sup>えに基づき、コロンブスは1492年10月12日に、上陸したサン・サルバドル島でカスティーリヤ王国の所定の手続<sup>手続</sup>きに従<sup>従</sup>って領有宣言を行<sup>行</sup>ったのである。

—最後までお読みいただき有難うございますこれにて終了とします—

参考文献・『コロンブス』青木康征著・中央公論、『コロンブス』増田義郎著・岩波新書、『航海の記録』大航海時代叢書I・岩波書店、『アメリゴ・ヴェスプッチ』色摩力夫著・中央公論。

『戦国日本と大航海時代』平川 新著・中公新書、『17世紀のオランダ人が見た日本』クレインス・フレデリック著・臨川書院。『日本見聞記1609年』ロドリゴ・デ・ビベロ 大垣貴志朗訳・たばこと塩の博物館。

鐵砲記 代種子島久時公

隅列之南有一嶋去列一十八里名曰種子我祖世  
 世居焉古來相傳嶋名種子者此嶋雖小其居民庶  
 而且富譬如播種之下種子而生生無窮是故名  
 焉先是天文癸卯秋八月二十五丁酉我西村小浦  
 有一大船不知自何國來船客百餘人其形不類其  
 語不通見者以為奇怪矣其中有大明儒生一人名  
 五峯者今不詳其姓字時西村主事有織部丞者頗  
 解文字偶遇五峯以教書於沙上云船中之客不知  
 何國人也何其形之異哉五峯即書云此是西南蠻  
 種之賈胡也粗雖知君臣之義未知禮貌之在其中  
 是故其飲也杯飲而不杯其食也手食而不箸徒知  
 嗜欲之愜其情不知文字之通其理也所謂賈胡到  
 下輒輒止此其種也以其所有易其所無而已非可  
 怪者矣於是織部丞又書云此去十又三里有一津  
 津名赤尾木我所由類之宗子世世所居之地也津  
 口有數千戶戶富家冒而南商北賈往還如織今雖

郷土史料集『鐵砲記』西之表市教育委員会 種子島開発総合センター より

「鐵砲伝来」のあらすじ・・・鐵砲の伝来は、日本列島では戦国の動乱が最高潮期を迎える前夜であった。鐵砲伝来という資料は、薩摩の大龍寺の文之和尚が、鐵砲の伝来した種子島の領主種子島久時の依囑によって書いた『鐵砲記』（『南浦文集』所収）が日本に残っている唯一ものである。これは鐵砲が伝来してから60年後に、島の伝承にもとづいて書かれた記録となる。大要は次のようになる。

《 「天文12年(1543年)8月25日、この島の西村の小浦に、いづこのものとも知れぬ大きな外国船が来着した。この船には、五峯と名のる中国の儒生が乗り込んでいて、この者と筆談を交わした結果、船中の客は西南蕃種の賈胡(中国西南少数民族の商人)であることが知られた。なかに2人の長がいて、一人を牟良叔舎、もう一人を喜利志多侘孟太といった。彼らは「鐵砲」と称する、驚くべき性能をもつ火器を携えていたので、年若い島の領主時堯は、「希世の珍」2挺を高価といわずに譲り受けることができて欣喜雀躍(大喜び)した。この新兵器に瞠目した時堯は、臣下の篠川小四郎

に命じて、これら外国人から火薬調合の方法を学ばせる一方、鍛冶数名に命じて、銃筒を模造する仕事にあたらせた。銃尾はネジのついた鉄栓<sup>てつせん</sup>でふさぐ方式の作りであったが、当時の日本ではまだこのネジの製法は知られていなかった。ところが、翌年また来航船に鉄匠<sup>てつしょう</sup>(鉄砲鍛冶)が一人乗り込んでいたので、八板金兵衛清高がこの者について、その方法を学び、ようやく鉄砲の構造に成功した。……》

(『鉄砲』洞 富雄著・1 鉄砲伝来より・思文閣出版より)

『鉄砲記』(意識)(『鉄砲記』西之表市教育委員会・種子島開発総合センターより)

大隅の州<sup>くに</sup>を南に離れること18里に、一つの島がある。名を種子という。我が(16代島主)が先祖代々ここに住み、島主の地位を相伝している。島を種子と名付けたのは、この島は小さいながらも、住む人は多く、しかもその暮らしはゆたかである。これをたとえて言えば、一粒の種がきわまりなく殖えつづけるようなもので、これから名付けられたのであるという。

むかし、天文年間の壬虎<sup>みずのえとら</sup>(12年)の秋、8月25日、我が島の西ノ村の小浦に、見なれぬ形の大きな船が現れた。どこの国から来たのかはわからない。船客はおよそ百人あまり、その姿はたとえようもなく変わっており、その言葉もまるで通じない。これを見た村人等は、一様に不気味なものを感じて、不安気に浜に人垣を作った。

しかし、その客の中に、大明国の儒生<sup>だいまんこく じゅせい</sup>(学問を志す者)で、名は五峯<sup>ごほう</sup>という者が居たのは幸いだった。だがこの五峯についても、その名のほかは、詳しいことは言うまでもなく名字すらもさだかではない。

時に、西ノ村の村長に西村織部丞<sup>おりべじょう</sup>という者が居り、よく漢文に通じていた。五峯を見るや砂上に杖で次のように書いた。「船の客は、何という国の人か、中には一きわ姿・形の変った者がいるが、それは何故なのか」と。これに対して、五峯もまた砂上に文字を書いて答えた。

「これは、はるか西南の方の蕃国<sup>ばんこく</sup>の商人たちである。一通りは君臣の間の、守るべき筋道はわきまえているとは言え、その中にも守らなければならない<sup>つし</sup> 慎みや作法を知らない。それ故に飲物を飲むにも杯<sup>さかずき</sup>を用いることもなく、喰べるときもそのまま指で喰べ、箸<sup>はし</sup>を使うこともない。自分の好きなことにふけり、学問が天地の筋道を明らかにすることも知らない。いわばこの商人たちは、何処か利のあるところに行けば、そこに腰をすえると言うたぐいである。自分らの持っている物を、無い処に行って売



るもので、別段あやしい者ではない」と。おおよその事を知った織部丞が、また砂文字で言った。

「ここから13里ばかり北に行くと港があり、赤尾木と言う。そこには私が仕<sup>つか</sup>えている島主が住んで居り、この島のかなめと言うべき所である。港に沿って数千戸の家があり、家毎に富み栄えている。また島内のいたるところから人々は集まり、それらの人々で住還は織るように賑わっている。今このまま荒海に向かって船を繋ぐよりも、波をさえぎり港内も深い赤尾木の港(現在の西之表港)に船を廻すにしくはない。すぐこのことを島主・時<sup>ときたか</sup>堯とその父・恵時に報告しよう」と。

五峯等はこのことを納得して船に帰り、織部丞はすぐさま、赤尾木の島主へ報告した。島主はただちに大船を赤尾木の港に曳<sup>えいこう</sup>航するように命じた。

27日、小舟十数艘に曳<sup>ひ</sup>かれて、大船は赤尾木港に入港した。この時にあたり、日向の禅寺・龍源寺の主座を勤める僧が、この港頭<sup>こうとう</sup>の慈遠寺<sup>じおん</sup>に逗留していた。目的は法華宗を学ぶ為だったというが、ついに禅から法華へと転じ、名も住乗院と改めていた。

この住乗院は、ほとんどの経書(四書、五経、十三経など)に通じているのみでなく、その筆の手は流れるように早かった。はからずも五峯と会って、筆談で意志を通じあうことができたのであるが、五峯の方でも「異国で心の友に会うというのはこのことか」と、<sup>よろこ</sup>歡んだ。よく言われる「こころざしを同じくする者は自然に相会う」というものであろう。

商人の長<sup>おさ</sup>が3人、名は一人は牟良叔舎<sup>むらしゆくしゃ</sup>、一人は喜利志多<sup>きりした</sup>、一人は佗孟太<sup>だもた</sup>と言う。いつも手に一つの物を携<sup>たずさ</sup>えている。それは長さ2、3尺、外観は真直で中に穴が通って筒になっている。見かけ以上に重いのが特徴と言えよう。穴が通っているとは言え、その一端は堅く塞ぐいだ端<sup>はし</sup>に近く極めて小さなもう一つの穴ある。これは筒の中に火を通す穴である。その形は、且つてこれと較<sup>くら</sup>べられる物を知らない。それをを用いるには、まず粉の薬をその筒の底に入れ、更に小さな丸い鉛の玉を入れる。次に<sup>まと</sup>的となる小さな盃を岩の上に置き、一物を顔によせて姿勢を正し、片目を閉じて筒を的に向けて狙う。次いで底に近い小さな穴から火を放てば、一瞬にして盃は砕け散ってしまう。まず火を発する時は雷の光るのと同じく、同時に発する音は落雷の時のとどろきそのものである。その場に居合わせた者は、色を変え、耳を<sup>おお</sup>掩わない者はなかった。盃を岩の上に置いたのは、的に黒点を書くのと同じ事である。

この物を一たび発すれば、たとえ銀山であろうとも砕け散り、鉄壁も射とおすこと

ができよう。国に対し害をはかる者は、これに触れるやいなや魂を失うであろう。ましてや苗に害をする鹿など言うまでもない。こうした用途は例をあげて数えることもできないくらいである。

時堯はこれを見て、この世にまれな宝物であると考えたのである。しかし、こうした宝も、はじめは誰もその名を知る者としてなく、またその用途・用法を詳しく伝えられることもなかった。それゆえ、何時とはなしに鉄砲と呼ぶようになったが、これは明国人がそう名づけたのか、あるいは島の者が名づけたのか、それらは詳しく知ることとはできない。

ある日、時堯は、明国語と南蛮語の2人の通訳を仲だちとして、「自分がこれを能くするという自信はない。しかし、これを学びたいという気持ちは強いのだが、どうであろうか」と、蛮人にたずねた。蛮人は、「公がこれを学びたいとのことであれば、我々もまた秘法や奥義の一切を教えましょう」と答えた。

時堯は驚きと<sup>よろこ</sup>びで、「ほんとうに奥義を聞くことができるのか」と問い返した。蛮人は「はい、それには心を正すことと片目を閉じるだけのことなのです」と答えた。時堯は「心を正すということは、昔の聖人が人を教える根本であって、自分もつとこれを学んできたところである。およそ天下を治めるためには、すべてこの理に従わなければ、世のうごき、言うこと<sup>な</sup>為すこと、おのずから行き違いが生じないとは言えない。其方<sup>そなた</sup>が言われる心を正すは、自分がかねて習い覚えたことと異なるものではない。ところで、片目を閉じるということは、遠くのを明らかに見ることにはならないのではないか、いったい、なぜ目を<sup>すが</sup>眇める(片目を閉じる)のであるか」と、ただした。

蛮人は「ものごとには、おのずから出来上った手順とか<sup>きま</sup>極りがあるもので、その手順や極りを守ることが大切である。目を眇めるのもその極りで、ただ広く見るだけでは十分に狙うことにはならない。目を眇めるには、余分のものは見ずに、遠くを目当てに明を及ぼすのである。どうかこのことわりを悟ってほしい」と説明した。時堯は納得して「老子が、見ること<sup>しょう</sup>小なるを明と言う。と言ったのがこのことなのか」と、独り<sup>うなず</sup>肯いた。

この年の9月9日、時堯は蛮人のその物(火縄銃)を自分の手で試すことになった。習い覚えた通り、その筒に薬と鉛の玉を入れ、盃を百歩はなれた所に置き、厳しく教わった通りの手順で火を放った。結果は蛮人の場合とほとんど変わらないものだった。一瞬、皆が驚きの声をのみ、ついでその威力に恐れのだよめきとなった。そして期せず

して「我々もこれを習いたい」と声を合わせた。

時堯は、その値段の高いことなぞ気かけず、二挺を買い取って家宝とし、その恐るべき薬の製法・調合の方は、家来の篠河小四郎に学ばせた。

時堯は、朝は朝、夕は夕と、心をくだいてその仕組についての知識、その使い方についての修練を積み、腕を磨いた。そして、ついには百発百中の腕前に達したのであった。こうした時、紀州の根来寺の杉の坊という者が、千里を遠しとせず、種子島に伝えられた宝器を手に入れた一心で来島した。時堯は、その杉ノ坊の熱心さに心をうたれた。その気持ちを察して言った。

「むかし中国で、徐君という人が、友の季札の持っている剣に心を奪われた。しかし、それをおくび暖にも出したことは無かったが、季札には徐君の気持ちがよくわかった。ついにその愛刀を徐君に贈ったということだ。わが島は南に偏在した小島で、自分はその島主たるに過ぎないが、どうしてこの宝器を独り占めしよう」と。ついて時堯は一挺の宝器・鉄砲を津田監物に託して、杉ノ坊に贈ったのである。もちろん、妙薬の火薬の製法や発射の方法も教えたのである。

時堯はただ一挺の鉄砲を扱うにつけ、これら自分らの手で作らなければならないと思った。鍛冶数人を召し集め、鉄砲をつぶさに見せ、調べ、絵にうつし、制作する方法を考えさせた。鍛冶たちは、苦心さんたんの鍛練をつづけ、月がたち、秋が去り冬が来た。そして形だけは寸分たがわないものを作ったが、鉄の筒の底を、捻りを切つて塞ぐ作り方が、どうしてもわからないまま半年が経った。

そうして年が明けて春、中国に去った南蛮船が、今度は島の東側の熊野浦に再び姿を現したのである。浦を熊野と名付けたのは、浦に沿う岩山が熊野をしのばせているからで、小廬山とか小天笠とかの地名と同じ縁起と思われる。

この船に意外にも、鉄砲鍛冶が乗っていたが、時堯は、これこそ天の恵み、と喜び、早速、八坂金兵衛尉清定を熊野に遣り、本職の鍛冶に、筒の底を塞ぐ捻の方法を学ばせ、会得させたのである。そしてその年のうちに数十挺の鉄砲を完成させたのであった。もともと、木製の台の彫刻とか、鍵や鑰(かぎ)や鑲(たまき)などの飾りなどは、時堯にとっては二の次で、実用としての使い易さが重要であった。こうした実用中心の考えから、家臣の中には寸暇をおしんでこれを習い、百発百中の者は数えきれないほどであった。

その後、泉州・堺の商人・橘屋又三郎という者が来て2年間この島に滞在、鉄砲の

作り方、火薬の製法、射撃の方法などを学んで堺に帰った。堺では橘屋又三郎とは呼ばず、鉄砲又と呼んだという。こうして畿内や近郊に伝わり、皆あらずってこれを学んだ。こうして畿内にとどまらず、関西から関東にも伝わったのである。

自分(久時)が、かつて古老に聞いたことがあるが、天文年間の<sup>みずのえとら</sup>壬寅・<sup>みずのと</sup>癸卯の時、大型の朱印船が、明国に向かうことになった。この時、畿内およびその西の方の各地の富豪の子弟が、商売するというので船に乗り込んだ。その数およそ千人。他の船の水夫らをはじめ、乗員が数百人。ここ種子島で船もやい(多くの船を綱で繋ぎ止める)をした。そして、天候を見極めて纜綱(もやいづな)を解いたが、不運にも数日後、海は<sup>きょうらんどうとう</sup>狂瀾怒濤となった。<sup>ちじく</sup>地軸(地球の回転軸)をくだくような大嵐で、第一船の<sup>ほぼしら</sup>檣(帆柱)は、傾き<sup>かじ</sup>楫は折れ、ついに海底に姿を没した。第二船はかろうじて明国の<sup>ねいはふ</sup>寧波府(浙江省)に着いたものの、第三船はようやくのことで種子島に引き返すことができた。

翌年、第三船はまた明国をさして帆をあげた。その往路は風に恵まれ、<sup>あきな</sup>商いもまた順調に進み、多くの珍宝や奇貨を満載して帰途についた。しかし、またもや空を黒く覆う暴風にまき込まれ、東西もわからぬまま漂いつづけて、流れついたところは伊豆の海であった。しかもこの船を知った土地の人達は、たちまち盗賊となって襲いかかり、すべての財貨を奪い去った。そして、便乗の商人たちも行き方しれずとなってしまった。

この第三船には、種子島家の家臣・松下五郎三郎という者が乗っており、松下は鉄砲の名手であった。この騒動に怒り、鉄砲一発を放ってその威力を見せた。これには伊豆の人達も仰天した。その名には、松下を偉人としてうやまい、師として慕い寄る者も多かった。こうして鉄砲は関東の八州にひろがり、更に日本全国のすみまでひろまったのである。

今、鉄砲が国内あまねく行き渡ってすでに60年あまり、白髪の老人の中には、伝来の頃の種々の世の様を、はっきりと記憶している者もある。それ故に明らかなことは、さきに南蛮国の鉄砲二挺を、島主・時堯が買い求めてこれを学び、その一発こそは、<sup>ふよう</sup>芙蓉(日本)60余州の耳目をそばだたせたのであった。しかも鍛冶たちにこれを制作する技を習得させ、五畿(山城・大和・河内・和泉・摂津)七道(東海道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道)にあまねく行き渡らせたのである。言うまでもなく、種子島こそは日本に於ける鉄砲のはじまりの地である。これは明らかな事実である。

むかし、一粒の種子が<sup>きわま</sup>窮りなく<sup>ふ</sup>殖え栄えたことを採って名としたこの島は、この鉄

砲についても、予言が適中したこととなる。古人の言に「先祖に徳功<sup>くどく</sup>がありながら、世にそれを明らかにし得ないのは後の世の人の過<sup>あやま</sup>ちである。よってここに書き誌すものである。

慶長11年<sup>ひのえうま</sup>丙午 菊の節供

種子島左近太夫将監 藤原久時 花押



種子島銃 社会教育課文化財係（種子島開発総合センター鉄砲館）

『鉄砲記』の補足として（『鉄砲』1鉄砲伝来・洞 富雄著・思文閣出版より）

※ 我が国がポルトガル人よりアルケピュース（鉄砲）を得た事は重要な文化的意義を持つものである。16世紀のヨーロッパ人は、世界の至る所に携帯火器を持ってその足跡を印しているが、土着民が彼らの持っている火器に着目し、その価値を認めてこれを獲得して倣<sup>ほうせい</sup>製し、忽<sup>たちま</sup>ちの間にこれを普及せしめたとい民族は、日本人以外には無かったのである。アラブ人は、最も早く西洋火器を知り、且つこれを利用したのであるが、その技術を我が物として撰<sup>せつしゆ</sup>取（取り入れて自分のものにする）し、これを発展せしめる事ができなかった。インド人もまた同様であった。中国人は25年も前に西洋火器を知ったが、しかし<sup>フランキ</sup>仏郎機（明代の中国人がポルトガル人・スペイン人を呼んだ語、西洋人が伝えた大砲の異称）を彼らの手で、自ら製するまでには13年の日<sup>にっし</sup>子（日数）を要し、鳥銃<sup>とりじゆう</sup>（小銃）を日本人より得て、自らの手で作る事ができるようになったのは、最初の洋人来航より32年を要した。

※ 「鉄砲」という名は恐らく文永の役の「てつほう」を想起して名づけたものである。「砲」の字は石扁<sup>いしへん</sup>の他、火扁<sup>ひへん</sup>にも書き、礮<sup>ほう</sup>（おおづつ・いしゆみ・つつ）の字にも用いるが、皆同字である。（『火砲の起源とその伝流』有馬成甫著・「六、鉄砲の伝来」より）

※ <sup>ごほう</sup>五峯<sup>ごほう</sup>について・・・種子島へ漂着したのは、中国人五峯を船主とするジャンク（中

国の沿海・河川での帆掛け船)であり、この船にはフランシスコ・ゼイモト等3人のポルトガル人が便乗していたという。なお、『鉄炮記』で儒生と称せられる中国人五峯という人物は、実はやがて倭寇(貿易商人・海賊)の大頭目となり、肥前の五島(五島列島)を根拠に大活躍をするに至る。中国安徽省出身の密貿易家・海賊だった王直で、号は五峯その人であったと推測される。中国では小さな島を峯とよんでいるから、五峯は五島の意味であると思われる。種子島の人たちは、日本初来のヨーロッパ人を伴ってやって来た中国人が王直であった事を、後になって知ったのである。

**執筆中に小生の眩き・・・本篇をつづり中に、思わぬ事が3つ起こりました。**

その1つは、令和元年(2019年)9月9日、台風15号が千葉県の上陸し、小生の事務所の屋根が飛ばされ、記録写真や書籍等を水浸しになってしまった。風速60m級の強風を受け、電気・水は1週間ストップ、(地区によっては1か月余り)小生は人生初めての台風の実体験学習となりました。

その2つ目、同年の12月31日に中国武漢市で新型コロナウイルスが発生の報告があり、その発生源は武漢市の市場で販売していた野生動物からと云う。コロナウイルスは瞬く間に全世界へ感染が拡大し、当初は日本国でもインフルエンザの強い程度と考えていたら、いやいやとんでもないコロナウイルスで、世界各国へ拡がり、変異を繰り返し今年4月末で、コロナ患者の全世界累計は4億3400万人とも、死者も600万人の報告を聞く。この先、簡単にコロナ患者数は終息しそうもなく、長期戦の予測となっている。

その3つ目、信じられない事が起きた。今年(2022年)2月24日、突然ロシア国がウクライナへ国へと侵攻した。プーチン大統領が渴望していることは、どうも、スラブ民族のロシア・ウクライナ・ベラルーシ等を集結して、旧ソ連邦の勢力圏を取り戻す侵攻とか、プーチン氏の意図はどこ迄なのか解らない。そして、この侵略戦争を止められるのはプーチン氏次第とか、どの様な解決策の道筋があるのか、どの国の誰が音頭を取るのか、とんでもない世界核戦争へと進むのか、コロナ禍で家籠りの生活であるが、退屈させない事件が起きている。

— 終わりまで、お読みいただきありがとうございました。 —

※ 拙著の電子書籍は下記の10作となります。

電子書籍版 『義経不死伝説の声を聞く』

電子書籍版 『仏教伝来の道物語』

電子書籍版 『“ジンギスカン即源義経説”流布の顛末』

電子書籍版 『日露戦争への列強の策謀』

電子書籍版 『手宮・フゴッペ洞窟壁画人は何処から来たのか』

電子書籍版 『アムール下流域奴兒干都司と永寧寺と先住民たち』

電子書籍版 『『絵詞』と元寇の考察 蒙古襲来考』

電子書籍版 『縄文人の「あの世」と「この世」』

電子書籍版 『中南米で事業を興して成功し

ペルーリマに天野博物館を開設した男』

電子書籍版 『アンデス文明(遺跡)・文化(宗教)と、

16世紀新大陸に上陸したスペインの植民地政策考』

電子書籍版「歴史シリーズ」10作品発信中。

池田勝宣(いけだかつのぶ)1942年・神奈川県藤沢市生まれ。